
音の向こうの空

らんらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音の向こうの空

【Nコード】

N0844F

【作者名】

らんらら

【あらすじ】

18世紀フランスを舞台に、天才音楽青年オリビエが恋と友情と抱きつつ、革命に翻弄される。歴史ロマン、青春小説(?)

1・音、恋、空

第一話：音、空、恋

1

シスルーの森のざわめきが午後の木陰にも風として流れる時刻。
しばしの別れを思い、オリビエは腕の中のぬくもりを確かめるよう
にもう一度抱きしめた。

「ん、楽士さん」

少女の柔らかい頬をむき出しの肩に擦り付けられ、オリビエは吐息
を落とす。

「そろそろ時間だ」

「あん」

「ほら、司祭が来る時間だ。アネリア、起きて」

寄り添っていた二人は静まり返った礼拝堂の中庭から、身を起こす。
綺麗に刈り込まれた低木にかけていたシャツを手に取ると、オリビ
エはその脇に転がる少女の靴を彼女の足元に揃えて置いた。

まだ十六の少女、アネリアは乱れた胸元のボタンをしっかりとめな
おし、スカートについた木の葉を払う。

オリビエも靴を履き終えると、少女の髪に絡む白い萩の花びらをと
ってやる。

「ね、明日も同じ時間に」

アネリアのおねだりは何時も青年の胸元にしっかりと両手で捕まっ
て上目遣い。

その眼差しにとく、と鼓動を感じるが、オリビエは小さく肩をすく
めてごめんね、と謝る。

「明日、侯爵様に新曲の披露なんだ。昼から午後にかけての小さな
茶会がある」

「また侯爵夫人の熱い視線に耐えなきゃいけないのね。あの人がおリビエを見る目つきって同じ女性として恥かしくなるほどあからさまよ」

「君こそ、侯爵に気をつけなよ。前から思っていたけど、この家のメイドの服ってここがやけに空きすぎだよ」

オリビエは少女の胸元を軽くつつく。

「平気よ。これで愛しの楽士さんを誘惑できるなら」

アネリアはその武器をしつかり青年の胸に押し付け、口付けを交わす。そうかと思えば次の瞬間にはくりとスカートを翻し、数歩先を歩く。午後の日差しに眩しい一瞬の姿は、花の香りのように心をくすぐり淡く消える。覚えた花の名をいくつも心に並べながらオリビエは少女を例えようとその香りを追う。

「侯爵様はね、ちよつと違うのよ」

「違う？」

「そうよ。侯爵様は、元軍人でいらつしやるからか、すごく堅実な方よ。オリビエみたいにこんなとこばかり見てないもの」

「ひどいな」

苦笑する青年にアネリアは笑みを咲かせる。

ブルネットの巻き毛を遠く響く鐘の音が風に乗って揺らした。

温かい午後のひと時をメイドのアネリアと過ごすのは、オリビエの唯一の楽しみであった。密かに二人で侯爵家の敷地内にある小さな礼拝堂に忍び込み、回廊に囲まれた中庭で寄り添う。

見つければただでは済まされないが、それは蜜のように甘い誘惑で、二人はもう二月程続いていた。

アネリアが厨房のある母屋へと向かうと、オリビエは離れの一角にある音楽堂に向かう。小さな六角形の建物は四階建ての離れの南東に張り付くように作られている。丸い屋根と風見鶏を乗せたそこは

まるで鳥かこのようだと言えに見るたびにオリビエは思う。そして、
うんざりする。

分かっている。

自分に出来るのは、音楽を奏でることだけ。

それで一応は生きていけるのだから、幸せだと思わなくては。

1・音、恋、空 2

2

音楽堂の南側は庭に面している。小さな池や花壇を備えたそこは、茶会の会場ともなる。こうした場所はこの敷地内にいくつかあるが、オリビエが奏でるチェンバロ*の曲を聞きながらの茶会はここだけ開かれる。

それも、必ず三十人以下の小規模なものだ。

（*チェンバロ＝ピアノの元となった鍵盤楽器。弦を叩くのではなく、弦を引っ掛けることで音を響かせる）

以前、侯爵は友人のロントー二男爵に「大広間でもオリビエの曲を」とせがまれたらしいが、侯爵は首を縦に振らなかった。貴族はそれぞれにお気に入り楽士を抱え、その自慢のためにわざわざ他家のパーティーに同伴させるものもいるという。楽士が著名になるほど、抱える貴族は「芸術のよき理解者」との誉れを受け、鼻を高くするのだ。

オリビエの雇い人、リツアルト侯爵のその対応には、出し惜しみしているとか、変わり者だとか。

そんな噂が囁かれるのも当然だった。

オリビエは侯爵の対応は自分が未熟だからだと感じ取っていた。

悔しいが、オリビエ自身、まだ亡き父親に追いついていないと思っている。

今年十八になるが、楽士の世界では子ども扱いだ。

新しい楽器の発表会などに連れて行かれると、どうしても周囲の目は冷たく感じた。

「お父上譲りの腕前とか。ぜひ拝聴したいものですな」

そんなことを言われても、その場での演奏を侯爵は許さなかった。

オリビエはギシと小さく鳴かせて音楽堂の扉を開く。

音に気付いた。

白く彩色されたオリビエの、いや侯爵家のチェンバロの前に派手な赤がたたずんでいた。

「アンナさま」

振り向いた侯爵夫人の表情を見て、オリビエは足を止めた。

常なら彼に向けられる侯爵夫人の表情は笑顔だ。それが今は違う。

バン、と乱暴に鍵盤を手のひらで叩いて、夫人は靴音を響かせながら青年に歩み寄った。

今年三十五になる夫人は真綿のように真っ白な肌をした美女で、王家の血を少しだけ引く。その由緒正しき生まれの美しい外見を見事に裏切り、厚めの唇に塗りたくった紅がつつやと青年に迫る。

1・音、恋、空 3

3

「アンナさま、あの？」

「オリビエ、あの子には出て行ってもらわうわ」

あの子…。

「それは」

「楽士オリビエは一人しかいないけれど、メイドの代わりなどいくらでもいる」

「！アンナさま、どうかそれは」

「では」

侯爵夫人の唇は弧を描くと横に伸び、パンドラの箱を思わせる。

「抱きしめて」

擦り付けられるふくやかな胸。

緋色のドレスの胸元ははしたないほど開かれていた。

オリビエは目のやり場に困り視線をそらすが、気付けば吐息が口元にかかる。

「あの子を辞めさせたくないのでしょうか？」

妖艶なパンドラの箱はそう囁いてオリビエの口を塞いだ。

音楽堂の窓から庭に灯される外灯が見て取れる頃。オリビエは一心に鍵盤に向かっていた。心に思う音を一指一指つなげていく。はかなげで切ない弦の響きに、オリビエは磨り減ってしまった何かがまた心に戻ってくるような感覚を覚えていた。
この楽器の音はとても気に入っていた。

それは侯爵も同じで、今年の春の楽器の展覧会で二人同時にこれらと目を合わせた。

オリビエの選択と自らの選択が同じであったことが嬉しかったのか、普段無口な侯爵が嬉しげに笑った。

「これに、お前の好きな絵を描かせよう」

そうして、美しい空を描かれた真つ白なチェンバロはこの音楽堂にやってきたのだ。

軽やかな音がこれほどまで伸びるのは、楽器のためなのか、建物の構造なのか。耳に沁みる淡い音を掬い取ってはまたこぼす。

夢中になって弾いている青年の手は見るものを魅了した。

先ほどまで、青年を欲のはけ口としていた侯爵夫人も、今は人形のように傍らにあり、その音の響き一つ邪魔しないように息を潜め聞き入っていた。

曲は激しさと切なさを増し、深い森に迷い込む。湿気を帯びた空気を振るわせる。雨粒のようなかすかな音が遠くから近づいてくる。そして、遠ざかると、夜明けの涼やかな風が吹き、音は木の葉から垂れる一滴の水滴となって、曲は終わった。

ふう。

乱れた髪を気にもしないで、オリビエが眼を閉じたとき、背後から拍手が響いた。
音で誰か分かる。

オリビエは立ち上がると、拍手の主、扉の前に立つ侯爵を見つめた。夫人も拍手で気付いたらしく、慌てて立ち上がると侯爵に駆け寄る。オリビエは黙って一礼した。

「今日はことさら激しいな」

「恐れ入ります」

侯爵は傍らの夫人に腕をとられながら、視線はオリビエに向けたまま満足そうに笑った。

「明日の茶会には、今の曲は弾けまい。新しいものを」

「はい。三曲ほど用意してございます」

「うむ。楽しみにしておるぞ」

再び頭を下げる青年を置き去りに、侯爵は夫人を伴って出て行った。オリビエはいつの間にかびっしょり汗をかいていることに気付く。

激しい怒りに似た思いを音にして吐き出せば、安堵が訪れた。

思いのまま弾き殴る曲は、人を惹きつけるが二度と同じものは弾けない。譜面に起こすことも出来ない。

侯爵はそれをよく知っていた。

そして、そういう曲を奏でる時はオリビエの心が平穏でないことも。

自らをさらけ出す演奏は終わってしまえば熱から醒めたような空虚な満足感を残した。オリビエのそれを侯爵はもう、五年も聞いている。夫人とのことも見透かされているのではと空寒い思いもあるが、侯爵が態度に出さなければ耐えるしかない。

貴族たちの華燭なお遊びはさまざまな欲を満たし時間をつぶすためにある。その嗜みの一つである自分の立場を嘆く必要もなかった。

1・音、恋、空 4

4

任されている音楽堂の鍵を閉め、青年は帰途に着いた。

広い侯爵家の庭を横切り、すっかり夕闇に沈む中、通用門までたどり着く。

この時間に通いのメイドたちも帰るので、数人の女性の話し声が聞こえていた。

門柱につけられたランプの明かりの下、女たちの噂話が漏れ聞こえる。

ふと、オリビエは顔を上げた。

つかつかと足を速め、門の外で立ち話をする三人の女に声をかける。

「あの、今なんと」

「お、オリビエ様」

三人そろって慌てて口を塞ぐのだから、聞き間違いではない。

「アネリアが辞めさせられたと、聞こえました」

胸騒ぎは顔を見合わせる三人に頷かれた。そして、一人が意を決したように、オリビエのそばで小さく語った。

「あの、侯爵夫人に酷く叱られましてね、あの子も耐えていたんですけど」

「酷いんですよ、あの子は南の遠い町から里子として買われてきたんですよ、侍従長の子供同様なんです。ここが家ですし出て行けつて言われてあてがあるわけでもないでしょう」

「それを夫人たら、この家に残りたければ北部の牧場へやるというんです。北のあそこは一年中寒くて、家畜の世話をしなきゃならな

い、とてもあの子が耐えられる場所じゃないです」

三人が順に話す間に、一人が、あという形で口を開けオリビエを指差した。

「それで、彼女は？」

「そうよ！あの子、こんなところは辞めてオリビエ様と結婚すればいいのよ！」

「そうだわ！」

残る二人が同時に叫ぶ。

三人の期待の視線を受けながら、オリビエは唇を噛んだ。夫人が二人の仲を知ったのだ、あれで収まるはずもなかった。迂闊だった。

「…それで、アネリアは今、どこに」

とたんに三人は顔を見合わせて。首をひねる。

明確な答えを待つつもりもなく、オリビエは再び門をくぐり屋敷に入る。門番の男が忘れ物かい、と声をかけたので片手を挙げて挨拶した。

オリビエはまっすぐ。

侍従長の一家と、大勢の下働きの人たちが住む建物へと向かった。

侍従長は南の国の出身で、貿易商を営む両親を持つが、業績不振で五人兄妹の長男である彼がこの国に働きに出たのだ。以来この国に住み着き家族を持ち十年以上たっていた。彼のなまりのある口調と明るい瞳の色は南の見知らぬ国を思わせてオリビエをわくわくさせた。オリビエがここ、侯爵家に勤め始めた頃からの知り合いだ。扉を叩くと、侍従長の妻ヘスが丸い顔をのぞかせた。

「遅い時間にすみません」

「オリビエ様、こんなところにおいでになってはいけません」

ヘスは扉を開けるどころか追い返そうとする。

1・音、恋、空 5

5

「しかし、あの、アネリアは」

「あの子は、明日北へ向かいます」

「ヘスさん、僕は彼女と話がしたい」

強引にでも、扉を押し開こうとする。

どん、と。開きかけた扉がまたも途中で止まった。

扉には、無骨な大きな手がかかっていた。

「会わせてください！」

「楽土様、あんたとあつしらは身分が違うんだ。構わんで下さい」

扉を頑として押さえつける男、下男のモスだ。昔から庭師の助手をして花壇の手入れをする姿を音楽堂から見ていた。たまに声をかけたり、話したりした。

無骨な物言いの男だが気の優しい男だ。

「モス、開けてくれ！」

ふと扉が開き、駆け込もうとするオリビエの肩をモスが押し出した。
「モス！」

そのまま階段の手前まで押され、モスの大きな背中の方こうで扉がガチャリと閉じられた。

「楽土様、落ち着いてください。わかってるだよ、あつしらは、あんたを恨んだりしません。仕方のねえことだ。あんたが悪いんじゃない。けど、あの子はここにいたら、これからもう辛い目に会う」
「だから、僕が」

「無理だ、分かってるだ。無理してそんなことすりゃ、あんただって追い出される。あつしらと同じ、あんただって結婚するのも侯爵の許可がいるはずだ。無茶しちゃんねえです」
モスを突き放そうとしたオリビエの拳が止まった。

「分かっていますよ、アネリアだって。しちゃんねえことしたんだ、あんたは侯爵様のものだ。奥さんのものだ。アネリアは他人のもんに手を出したんだ。そりゃ罰せられる。あんたは若い年頃の娘には毒だ。そばにいればきつとまた、同じことになる。だから、もう、こんなところに来ちゃなんねえ」

いつの間にか、オリビエはその場に膝をついていた。胸の前で組んだ手に力が入り、小さく震える。

「僕は…」

アネリアの声が思い出される。

ほんの、つい数時間前まで幸せだった。

幸せなひと時をすごしていた。

それは昨日も、その前もだ。

これまで続けてこられたのに、突然ここでなかったことになるのか。こんな最悪の形で。

ついた膝の下のレンガ。二人で寝転んだ中庭を思い出す。

昼下がりの日差しを吸い込んだ太陽のぬくもりが二人を温めた。

なのに今膝の下にあるそれは冷たく彼を拒絶した。そこに小さく、拳を打ちつけようとする。寸前で手首をモスにつかまれた。

「さ、立ってください。楽士様。あんたのこの手は、大切な手だ。

怪我なんかされたらあつしら何人が鞭で打たれるか。あんたが無事で、よくお勤めしてくることがあつしらを助けるんです」

モスの腕には昔の鞭の後が褐色の肌に桃色の傷を残していた。伝え聞く奴隷とは違うが、扱いは同じようなものだった。迷惑をかける自分の気持ちを押し通せば、彼らにも影響が及ぶのだ。

「…すまない。アネリアに、…いいや、何も。何も伝えないで欲しい。僕がここに来たことも言わないで。…そうだ、僕は、彼女を裏切った。だから、憎んでくれていいから、僕のことは忘れて…」

不意に髪をなでられた。

見上げると、モスがしゃがんで泣きそうな顔で笑っていた。日に焼

けた顔がランプの明かりで照らされて鼻の頭がてらてらと光っている。

「それも、夫人から言われただ。あの人はあんたのことをペットかなんかみたいに話した。それで、アネリアは我慢できなくて口答えしたんだ。皆分かってる。だから、自分から悪者になることはない。あんたはいい人だ。ただ、そういう運命に生まれちゃったんだ」

オリビエは黙って頷いた。
立ち上がると夜風が頬に冷たく触れた。

その夜。

オリビエは自宅でチェンバロに向かっていた。
何度も何度も、思いのままに弾きつづけた。
弾いても弾いても。

その夜だけはいつもの空虚な満足感を得ることはできなかった。
しまいには荒っぽく鍵盤をたたき、突っ伏し。
そのまま、寝室へと向かった。

1・音、恋、空 6

6

翌日。まだ侯爵家は誰も目覚めていない時間にオリビエは音楽堂へと入っていった。

楽器の乾燥を防ぐために換気をし、南に面したガラス戸をすべて開く。朝の空気が室内に染み渡り、オリビエはゆっくり息を吸う。少し重いまぶたを擦り、ぼんやりと朝日の差す窓辺に立つ。色が変わっていく空と明るさを増す庭をしばらく眺めた。

オリビエが今日の茶会のための譜面を再確認しているところに、メイドが二人準備だといって入ってきた。

いつもなら、と思い出す少女がいるはずもなく。けれどアネリアと同じ服を着るメイドたちにどうしても思い出さずにはいられない。オリビエは胸のうちに湧き出す音を抑えきれなくなっていた。

昨夜、何度も弾き散らした。それでもまだ、同じ音が胸に残る。

二人のメイドがテーブルと椅子とを綺麗に磨き、花台に派手な薔薇を生けている間、オリビエは静かにチェンバロの調律をしていた。弦を締め、緩め、青年の指が微細な響きを捉え音を変えていく。出comingする一音は澄み切っている。それがまたオリビエの胸に昨夜の曲を思い出させた。

調律を終えると同時に指が奏で始めた。

アネリア。

花のように笑う少女だった。

黒い髪がしつとりと大人びて見せた。

瞳の青に空を見ながら、何時もそばにいたいと願った。

白い手は小さく、いつも荒れていて。それが愛おしかった。

オリビエの手は綺麗ね、好きよ、そういつて青年の手を頬に摺り寄せた。

二度と、会えない。

僕だけが、のうのうと好きな音楽を続けている。

カタン。

床に落ちた小さな音にオリビエの指が止まる。

我に返ると、メイドの一人が慌てて倒れたモップを拾った。

「も、申し訳ありません」

慌ててわびつつ、オリビエより少し年上と思われるメイドは目元をぬぐった。

気付けばもう一人も、小さく鼻をすすった。

「あの、どうぞ、私たちは終わりましたので失礼いたします」

「あ、あの」

「アネリアは」とたずねかけて、聞いてどうするのかと自問し、オリビエは挙げた手を下ろした。

「いや、なんでもない」

二人が深々と礼をし、退室するのを音で感じながらオリビエはぼんやりとチェンバロの前に座っていた。

立てた反響板には澄み切った空。

蒼い空に白い雲。そこにはそれ以外何も描かなかった。通常はこの反響板の絵も茶会を彩るもので花や美しい動物や風景が描かれる。だが、オリビエはごてごてしたものは嫌いだっただ。

侯爵が随分シンプルだなと笑い、同じく侯爵のお抱えの画家が「鳥でも描きましょうか」と申し出たが、オリビエは「鳥はいつまでも同じ空を飛んでいられないから、このままでいいんだよ」と応えた。画家は何か感じるところがあるのか黙って、強く頷いた。

自由な空に、憧れていた。

「君は」

もう一人、聴いていた人間がいたことには気付かなかった。慌てて立ち上がると、楽器の向こうに男が一人立っていた。テラスから入ってきたのだろう。

栗色の髪を一つに束ね、背の中ほどまでにたらしめている。黒いビロードのリボンで縛られた髪、シルクのシャツに同色のチーフを蝶々結びに縛っている。それは首都では上流貴族の間で流行しているのだといつか侯爵夫人が言っていた。上着の襟に施された金の刺繍。紺色のベスト。貴族だ。

三十代後半。彫りの深い印象的な顔の男だ。

「どの楽士に指導を受けたのかね」

「はい、私は指導というようなものは一度も。師と扇ぐとすれば、亡き父だけです」

男は組んでいた腕を解いて、オリビエの傍らに立った。あまりにもそばになるので、並んで背を比べるのかと思うほどだ。

思わず一步下がる青年にくすくすと笑みをこぼした。

1・音、恋、空 7

7

「似ているな。かのラストン・ファンテルの息子なんだってね」
「あ、はい」

オリビエは構えた。父の名を知る貴族は十中八九、生前の父親と比較し、まだ若いとけなすのだ。人生の何たるかを知らずして名曲は奏でられないと、一時間も話されたこともあった。父親を超えられないのはオリビエも分かっている。

しかし他人にわかったようなことを言われるのはどうにも忍耐が必要だった。

だから自然と父親の話題は心を固くさせた。

「私はホスタリア・ロントーニ。幾度か君の演奏は拝聴しているよ。しかし、今日のは良かった。普段の君の演奏とは違うね。あれはなんと云う曲なのだ」

「ロントーニ男爵、お名前はお聞きしております。お恥かしいことに、即興の曲です。譜面もございません」

「ふん。では題名くらいはあるのではないか」

「いえ、それも」

「何を想って弾いていたのだ。メイドは聞いて涙した。私も切ない思いを感じたが。何を想ったのだ」

オリビエは黙った。

背の高い男爵は青年を見下ろしていた。

その黒い瞳は穏やかに笑っているが、さらけ出せといわれているようにオリビエは小さく眉をひそめた。

「ふん、そう睨むな。無礼な奴だな。では、私がつけてやろうか」
親しげに肩に腕を回してくる。怪訝な表情を隠しもせず、オリビエ

は低く応えた。

「…お好きに」

「そうか、ではその曲は私がもらっていいのだな」

「え？」

オリビエが改めて男の顔を仰ぎ見たとき、背後から大きな咳払いが響いた。

「これはこれは、ロントー二男爵。何か重要なお話があるということでしたな、客間でお待ち申しておりましたが一向においでにならないので、探しましたよ」

「ああ、それは失礼。侯爵、ご相談の前に、もう一度確かめたいと思いますてね」

相変わらず肩に手を置かれているオリビエは、侯爵に朝の挨拶をしたいのに男爵の手を振りほどいていいものか迷っていた。

「ロントー二男爵、オリビエは私の楽士。オリビエの曲はすべて私のものだ。勝手に題名などつけられても困りますよ」

隣で男爵が肩をすくめた。

「私も優秀な楽士を探していましたね」

「オリビエは譲らん」

オリビエが二人の顔を交互に見たときすでに、男爵の相談事には結論が下された。追い討ちをかけるように侯爵は念を押した。

「私はオリビエの音楽が好きだ。一曲たりとも他人に聞かせたくないと思うほどだ。よいかオリビエ、お前もそこを心しておくのだ。」

お前の手が奏でる全てが私のものだ」

は、とため息と共に男爵は肩をすくめた。

もったいない、小さくそう呟いたのがオリビエの耳に残った。

1・音、恋、空 8

8

茶会が終わり、侯爵に案内されて客たちは母屋へと移動を始めた。オリビエがこの日、披露した新しい三曲はおとぎ話の三人姉妹を花に例えた小品だった。ちょうどアネモネの花が庭に赤く揺れるので季節感のある明るくにぎやかな曲に仕上げた。

強くしなやかな長女、理屈っぽいが夢見がちな次女、そして無邪気で芯の強い末っ子。三人が森の中で不思議な屋敷を見つけ冒険する物語だ。

お客の半数は女性だから、女性が好きな題材、恋や冒険は昼の茶会には欠かせなかった。

いつもと同じ拍手を受け、客の中の小さな少女に花束をもらう。漆黒の礼服の青年を少女は眩しそうに見上げていた。

客も侯爵も退室した。片づけを始めたメイドたち数人とオリビエだけが残っていた。オリビエがチェンバロの反響板をたたもつとした時だ。

またも背後に聞き覚えのある靴音。ロントー二男爵だ。

ワイングラスを片手に、少し乱れた前髪をかき上げる。ポケットからのぞく白い手袋が酔ったようにゆらゆら揺れた。

「ふん、つまらん」

同伴の女性を何故連れてこなかったのかは知らないが、男爵はつまらなそうに始終酒をあおっていた。乱れた歩調を音で聞き分けて慌ててオリビエが支えると、男爵は手もとのワインをこぼしそうになりながら遠慮なく青年によりかかる。

「あの、少し休まれたほうが」
「ああ、そうする」

言うなりその場に座り込むと、一氣に残ったワインを飲み干した。大理石の床にコッソンとグラスを解き放つと、男爵は自らも大の字になった。

テーブルを片付けていたメイドたちが呆れたように見ていたが、オリビエは気にせず、グラスを拾い上げるとメイドの一人に渡そうとした。

と、片足が床に貼り付いた。

「わー！」

酔っ払いにからまれた足。そう気づいた時にはグラスを持ったまま冷たい床に転がっていた。悲鳴だったのか薄いグラスがはかなく碎ける音だったのか。

床に手をついて体を起こそうとしたが、酔っ払いに止められた。

「手が」

ちょうどオリビエが手をつこうとした下には硝子がきらと輝いていた。視線の定まらない酔っ払いの癖に男爵はオリビエの両手をつかんで子供にするように引っ張り起こす。

「あ、あの」

「大丈夫ですか！オリビエ様！」

メイドが駆け寄り、座り込んだ青年が見回す間に床は綺麗に片付けられた。

相変わらず男爵が手を取っているの、顔をしかめる。男二人床に座り込んで醜態としか見えないだろう。オリビエは酒に飲まれる大が嫌いだ。自らがあまり酒に強くないせいか、酒場など近寄ることもない。

酒などに頼らなくとも、オリビエは音楽で心を癒した。

十八の青年にとって酔っ払って座り込む三十過ぎの男爵はみっとも

ない以外に形容できないのだ。

「危ないところでしたなあ、オリビエ」

「あなたが足を引っ張ったからでしょう？」

迷惑さを眉に乗せる青年を少し上目遣いで眺め、男爵は楽しそうに笑う。

「年中ここで音楽三昧か。どうりで足も細く、反射神経も鈍い」

「ご心配には及びません、音楽を奏でるのが私の務めです」

「手を庇うために剣も乗馬も禁じられている、のか」

「…」

「まだ十代だろう？汗を流すことも日の光を受けることも必要ではないか。ここは、まるでバスチーユのようだ」

首都で有名な監獄の名をひそやかに耳打ちする。

それは遠まわしに国王を批判している。

オリビエは顔をこわばらせた。

「ご心配、…ありがたいですが。かの監獄は庭を散歩することも出来ないといえます。ここでは見知った庭師が美しく整え、私はその作業を一日中眺めることも出来ます」

今日の演目の花の名を覚えてくれたのは庭師だ。

ふん、と男爵は眉を寄せた。

「散歩できようと出来まいと。投獄されていることは変わらない。私なら自由にしてやる。酒場で飲み明かしてもいい。女を買ってきてもいい、どうだ、私の牧場は海に面している。蒼い海と白い砂浜。そこを馬で駆けるのは気持ちいいぞ」

オリビエは男爵から離れて立ち上がろうとする。が、また腕をつかまれた。

「あなたは何をなさりたいのです？」

「女のような手だ」

ニヤと男爵の口元が笑うので、オリビエは思わず乱暴に振り払った。

「ロントーニ男爵、お加減はいかがです。ドクターをお呼びしましょうか」

侍従長のビクトールが立っていた。そのでっぷりと突き出た腹の後ろに先ほどのメイドたち。男爵の様子がおかしいと呼んでくれたのだろう。

「これは、失礼」

おどけた仕草で一礼して見せると男爵はよろけながらも音楽堂を出て行った。

「すみません、助かりました」

「変わったお方ですね。大丈夫ですか、オリビエ様」

「はい。あのビクトール。彼女は」

アネリアは。

「今頃はロンドンの街でしょう。トロツコ電車で山に登るのです」

「そう……」

「水も空気も美味しいところですよ。冬は厳しいですが、今の季節はきっと美しい花畑が広がっています。きっと元気で幸せに暮らせます」

「そう、お前も淋しくなる、ね」

ビクトールは黙って青年の肩を叩いた。

それ以上二人とも何も言わなかった。

いつもならオリビエが自宅に帰る時間だったが、侯爵が今日のねぎらいにと食事を運ばせたので、音楽堂の片隅のテーブルでそれに向かっていた。

向かいに座るリツアルト侯爵はあごひげを盛んになでていた。

一人だけ黙って食べているのもやりにくい。視線が気になりながら、オリビエは二口目の肉を頬張る。

人が食べているのをただ黙って見ているというのも、不思議な趣向だった。面白いのだろうか。

時折視線を合わせると侯爵は食べなさいといわんばかりに少しだけ目を細める。

自分が餌を与えられた犬のようだと感じられ、オリビエはますます食欲がなくなる。

「男爵に迫られたそうだな」

むせかけて、水を口に運んだ。

「え、はあ、そういうんでしょうか、あれは」

「変わり者だ。かつて、お前の母親にしつこくしていた時期があっ

た」

オリビエは顔を上げた。

「私の、母に？」

「そうだ。当時はまだお前の父ラストンと結婚する前のことだ。お前の母マリアが二十歳、ロントーニはいくつだったと思う」

「ええと、…」

「十二だ」

「は？」

「ませた奴だろう？」

くつと口だけで笑うと侯爵はオリビエの飲みかけた水を取った。飲み干すと水差しからまた同じくらい注いだ。

「早熟が過ぎたのか。未だに妻を娶らない。私の兄と彼の父親が親しかつたのでな、何とか似合いの女性をと進めたのだが」

「…あの」

「なんだ」

話の腰を折られて侯爵は憮然とした。

「侯爵様、私も、あの。結婚したい女性が」

1・音、恋、空 10

10

テーブルではグラスの水が静かに波を収めたところだった。

「だめだ」

「あの、一人前でないことは分かっています、ですが、その」

「料理が冷める。食べなさい」

「侯爵様、私には愛する女性がいます！」

いつの間にか胸の前で両手を固く握り締めていた。

そこに包む想いを強く強く固め、それは凍りついた雪球のように侯爵の額に革命的な一撃を。

「……どうか、アネリアとの結婚をお許しください」

「小娘に入れあげるのも一時。お前は家庭を築くためにここにいるわけではない。私のために曲を奏でるのだ。それ以外のことは許さん」

息すら、許されない気がした。

投じてもなお、拳に冷たさを握り締めたままオリビエはうつむく。額に当てた拳の下、溶けた雫が瞳を潤ませ睫を飾るが。侯爵は言った。

「言っておくが。このスープは冷めると不味いぞ」

オリビエは綺麗に飾られたトマトをひっくり返し、銀のフォークで突き刺すと口に運んだ。

飼い犬のような。愛玩動物なのだ。

オリビエは胃が要求しないにもかかわらずとにかくこの時間を早く終わらせたくて、もくもくと食べ続けた。

スープには冷めるまで手をつけない。そんな小さな反抗すら、目の前の侯爵は面白そうに眺めていた。

お遊びの、道具なのだ。

アネリア。

ごめん。

自分のナイフを持つ手にふと目が止まる。白い手。傷一つ、つけることを許されない手。音楽を奏でるためにある、手だ。

今もむせながらこぼれそうになる涙を音に変えたくて、生き物のようにうずうずしている。

鍵盤があればまた踊りだすのだろう。曲という形になれば、オリビエは何を叫んでも怒鳴っても許された。食後に披露した即興の曲に侯爵は黙って聞き入っていた。

オリビエは奏でるしかない。

切ない思いを。

自由な恋。

空を羽ばたく。

音だけは誰にも捕まらず空を翔る。

2・少女、歌、奏で 1

1

オリビエヌ・ド・ファンテルが音楽に才能を持つのは生まれながらの環境といえた。

父はこの小さな二階建ての家で貴族やブルジョア階級の子供らに音楽を教えながら、侯爵家の楽士として勤めていた。王宮に招かれ音楽会の主役になったときもある。

少年だったオリビエはそれを誇らしく思っていた。

家では母親が父の演奏に合わせてよく歌を歌い、伸びやかなソプラノを真似しようとオリビエも子供ながらに声を張り上げた。母マリアは人前で歌うことははしらないと考えていた。だから彼女の歌声を知っているのは父とオリビエだけだった。

この教区の司祭である祖父の教育のせいだ。母マリアは誰にでも優しく、父が音楽を教える生徒たちにも慕われていた。幼いオリビエはそれに嫉妬し、そのどの生徒より優秀であろうとした。

誰よりも長く音に親しみ、歌い、奏でた。

学校は嫌いで、半日我慢するとすぐに近くの公園へと逃げ出していた。逃げ出した翌日には「ロバの席」に座ることになったが、それはあまり気にならなかった。怠け者の象徴として教室に設けられたその席は、丁度日当たりのいい一番前だった。

反対側に「栄誉の席」があつたが、そこにいつも座る常連の男の子とは仲が良かった。先生が結婚式の手伝いに借り出された翌日などは、まだ酒臭い息をしてたまにのけたりするから互いに目を合わせてはくすくすと笑いあっていた。

基本的には個別授業。ラテン語もフランス語も得意だったオリビエは、祖父の影響で聖書もよく読めたし、怠け者だったが手のかかる生徒ではなかった。授業中も放っておかれることが多く、オリビエ

も出来るだけ質問しないようにと黙り込んでいた。

昼の十一時にいったん学校が閉じられる。寄宿している子どもたちは寄宿舎に食事に戻る。オリビエは母親にパンを持たされることが多かったが、大抵その時間に抜け出すと午後の授業に出席することはなかった。

ふらふらとどこかで時間をつぶし、こっそり家に戻る少年が一人でチェンバロに向かう姿を母親は黙って見守っていた。夕方からの家で音楽学校で、貴族たちに負けないようにとオリビエは懸命に楽器に向かっていたのだ。

ふと。

公園の風景を。あの時眺めていた道行く人々を音にしてみたくなる。毎日、池の絵を描いていた老人。覗き込むと春なのに秋の風景だった。理由を問うと、納得がいわずに同じ絵を何度も修正し描き続けるうちに季節が変わってしまったのだと老人は応えた。

面白い気がした。彼にとってはまだ、秋なのだ。

彼の絵の中に描かれていた子犬は、その時には立派な成犬で毎日主人の派手な貴婦人に引かれて散歩していた。

少年にとって不可思議で面白い世の中の人々。彼らを曲にする。

そうして、オリビエはペンを執り、五線譜に音の印を並べていく。

窓の外はすでに夏の盛りを過ぎ、夕刻の風は涼しさを増した。今年もまた秋が近づく。

秋は苦手だ。

両親を失った季節だから。

ふと、公園の景色から余計な想いへと思考が飛んだことに気付いて、青年は頭を軽く振る。あれからもう、五年が過ぎようとしている。

時は容赦ない。
そう、アネリアを失って半年になろうとする。
容赦ない。

2

ペンをインク壺に戻すと。オリビエは楽器に向かう。
譜を残しタイトルをつけなくては曲として残せない。けれど今は。
この想いを音にしておきたい。

いくつか弾き、やはり書こうと手を止める。
調子が出ない日とは、こういうものだ。

と、開かれた窓の外から誰かの歌う声がした。
聞いたことのある曲だ。

歌詞もなくただ、ららら、と歌う少女。

オリビエは窓辺から外を眺めた。
わんわん！と激しくほえられた。

「あ、ごめんなさい！」

街の少女だ。アネリアと同じくらいか。白い犬を抱きしめ、こちら
を見上げる。

真っ青というのか。空を映す瞳にオリビエは何もいえなくなった。
少女は立ち上がり、青年に微笑んだ。

「素敵な曲ですね、つい、口ずさんじゃった」

「あ、ああ」

あれは自分がついさっき思うがまま奏でた短いフレーズだったのだ。
それすら記憶に遠いオリビエは少し呆けた様子で少女に見入っている。

た。

「侯爵様の楽士様でしょ？わたしキシュといいます。美しい音楽が大好きなの。この、ランドンもね」

ランドン、といわれ犬がワフンと嬉しげにほえた。

「あ、ゴメンナサイ。お邪魔してしまいましたね」
「いや、もう一度。歌ってくれないか」

少女は不意に頬を染めた。

いや、ついさつき通りに面した窓から音を拾って口ずさんだ、その上「つい」と悪びれずに笑って見せた。
なのに歌えといわれると躊躇する？

「あの、でも」

「いいから、もう一度」

オリビエは無性に、人が奏でる自分の曲を聞いてみたくなっていた。
「君、オルガンは弾けるの？」

「無理です、そんなの」

今度はふんと口を尖らせる。ワフンと犬も同調する。

「じゃあ、歌ってみて」

とがった口が青年に見つめられて徐々に緩む。

「しょうがないな！笑わないでね」

不意に口調まで変わり、キシュと名乗った少女は後ろに手を回し、合唱の練習の時のようにふと腹に力を込めると歌いだした。
それは犬も聞き入る。

少女は才能があるのだ、一度聞いただけの曲を最初から、口ずさんで見せた。その上、オリビエが思うまま弾いた不安定なそれは、歌いやすく省略されるのか譜面に落としやすい。

オリビエは、窓から身を乗り出して、少女を誘った。

「ね、君、ちよっと手伝ってくれないか」

きよとんとしたキシユはすぐに仕方ないな、と大げさに肩をすくめ、テラスを回って犬と共に入ってきた。

「犬は外に」

扉を開けたオリビエが眉をひそめると、キシユはあら、と笑った。

「だめよ、ランドンは私の護衛だもの、私に何かあつたらただじゃすまないんだから」

気付いて、オリビエは自分の突然の思いつきを恥じた。

見知らぬ少女を家に呼び込むなど、見ているものがいればなんと噂されるかわからない。これが侯爵の耳に入れば、何か良くない結果を生むかもしれない。

オリビエは戸口に立ったまま、チェンバロを珍しそうに眺め回すキシユを見つめていた。

どうしようか。

このまま帰すのもおかしいか。

3

キシユは少し日に焼け、顔にはまだそばかすが残る。十代前半だろうか。赤いうねりのある髪が華奢な肩にふわりと乗っている。ドレープを取った綿のブラウスの上からでも細身のしなやかな体型がわかる。クリーム色のスカートに臍脂色の細いリボンが結ばれている。少女はチェンバロの風景画に見とれ、オリビエはその少女を見つめていた。

美しく整然と並ぶ弦に綺麗、と囁き、そのまま少女は歌いだした。先ほどと同じ。

いや少し、また所々端折られているが。聞き苦しくはない。

オリビエは我に返って、ペンを手に取った。
机に向かって譜面を書き付ける。
ふと歌が止む。

顔を上げると少女がオリビエの手元をのぞき込んでいた。

「それ、楽譜？」

「え、ああ」

「何の曲？」

「今、君が歌った曲だよ」

キシュは目を丸くした。

「聞いただけで譜面になるの！？」

「待って、聞いただけで口ずさむほうがすごいと思うけど」

「そんなことないよ、だって、曲を作ったのはあんたでしょ？作るのもすごいし譜面がかけるのもすごい」

「だから、それを一回聞いただけで歌える君もすごいよ。僕なんか弾いた先に全部忘れるから」

ぶ、と。

キシュは噴出した。

「え？」

そのうち、苦しそうに塞いでいた手も取り払い、少女は大声で笑い出した。

あはははは。

軽やかなアルトの笑い声は心地よく、最初は笑われることに納得のいかなかったオリビエも少女が痛そうに腹をさすって、こちらを見つめ、また笑い出したのには頬を緩めた。

「だって、だってだって！！忘れちゃうの？せっかくこんなに素敵なのに？自分が弾いた曲なのに？おかしい」

「…弾くのには夢中だから」

青年のいいわけじみた口調にキシュは笑いすぎた瞳をこすって、青年が座る脇に立った。

「子供みたい。でも。素敵」

頬にキスを受け、オリビエはつい立ち上がる。

「な、なんだよ」

自分よりかなり年下だ。そんな少女に子ども扱いされた。

「あら、素敵な曲のお礼。私気に入ったな。ね、何て題名？」

また嫌なことを聞かれた気分で、オリビエは黙り込む。

想いを吐き出した曲に題名なんかない。

説明すればそれは、会えなくなったアネリアを思い出しての曲であったと自分自身も認めてしまう。秋が近づく淋しさにアネリアも加わった。そんなもの、見知らぬ少女に話せない。

「ねえ、何てタイトル？」

「いや、教えない。いいから、もう一度歌ってくれないか」

「いや。教えてくれないなら歌わない」

ワフンとタイミングよく犬も頷く。

白い毛むくじやらを睨みつける。

「可愛いでしょ。なでさせてあげようか」

「結構」動物には近づかない。間違って手を咬まれてはいけなから。

気まずい沈黙。

「もう帰るわ。曲は素敵なのに、性格は変」

う、と返事に詰まって、オリビエは呼び止め損ねた。

少女は行こう、ランドン、と護衛を従えて出て行った。

硝子のはまった扉の向こう、揺れる赤毛。

庭の風景と馴染んで消えた。

一人のその夜。

一階のリビングを兼ねる仕事部屋でオリビエは再び机に向かっていった。

ランプの明かりの下、ペンを走らせる。

不思議なことに少女が歌った曲は鮮明に耳に残り、ちょうど侯爵に命じられていた秋の曲の一つとなった。

自分が奏でると、人に奏でてもらうのでは何かが違う。

冷静に聞けるのだろうか。

これまで湧き出した音を譜面に残そうと努力し、挫折したことを思うと、この発見は空を飛ぶ機械を発明したかのように心を軽くした。キシュといった。あの少女に曲を聴いてもらい、歌ってもらえば譜面に出来る。これは、とてもいい思い付きだ。

今日は怒らせてしまったが、相手は子供だ。甘い菓子など用意してやれば、手伝ってもらえるのではないか。

ふと思いつき。

オリビエはその曲にタイトルを書き込んだ。

『秋風のタルト』

書いてから、子供じみているか、と迷ったがそのままにしてみた。

侯爵はなんと言っだろう。そのタイトルを告げる自分を想像し、気恥ずかしい気分にもなる。だが、甘く切ない秋の曲に、ほろ苦い焼き栗の入ったお菓子を思い出していた。

ふと、空腹を覚え、温かい茶でも入れて、今日は休むことにした。

昼間、オリビエが出かけているうちに通いのメイドが用意してくれる夕食。今日はデザートに手をつけていなかったことを思い出し、自分で入れた紅茶と一緒にトレーに並べた。

二階の寝室に持ち込むと、悪いことと知りながらもベッドに座って

膝の上にトレーを乗せる。

冷めた夕食を一人で食べるのは嫌いだったし、侯爵家で出された時間も餌をもらう犬のような気分だった。

だから、この時の夜食は普段感じたことのない、奇妙な満足感があった。

温かい飲み物と甘いものが心に沁みるなど、初めて知った。

美味しいと、心から思った。

いや。

思い出したのだ。

子どもの頃、風邪を引くとベッドの上で甘いものを食べられた。躑に厳しい母親も、そのときだけは許してくれた。額の熱を測る母親の手。

火照った体に冷たくした甘い果物が喉を潤し、とても美味しかった。

記憶をたどる青年の膝の上で、退屈そうに紅茶のカップに湯気がたゆたう。

僕は、何かを忘れているのかもしれない。

2 少女、歌、奏で 2

4

翌日。

昨日と同じ時刻にオリビエは少女の姿を探し窓辺に立っていた。

朝のうちにメイドに頼んだお菓子は甘い香りを部屋に漂わせていた。「どなたにさしあげるのですか」と丸い手を持つメイドのシユールン夫人は面白そうに青年を見上げた。オリビエは十三の時から世話になっていいる。彼女にしてみればオリビエは子供のようなものなのかもしれない。

仕事を手伝って欲しい子がいて、その子をお茶に誘うために欲しいのだと告げると「じゃあ、今日は私が残りましょうか。」と興味津々だった。なだめて帰らせたのはつい先ほどのことだ。

ワフン。

聞いたことのある鳴き声。

オリビエは窓から庭の向こうの通りを眺めた。

走る犬の少し後を、あの少女が歩いてくる。まだ表情は見えないほど遠いが視線が合ったと感じた。

夕闇が近い。隣の家の本の系杉の一つ目に隠れて姿が見えなくなる。すぐに現れ蒼いスカートが見える。二本目に隠れ。

現れない。

と、引き返す姿。

「ちょっと、待って!」

思わず大きな声を出して、窓から身を乗り出す。

糸杉の向こう。斜めに延びた影が三本黒々と赤茶けた小路に横たわるだけだ。

嫌われたのだろうか。

せつかく焼いてもらった菓子も意味がない。キシユ、といった。どこの娘だろう。

こうなったら家を探し出して正式に雇うか。そんな余裕があるかどうか分からないが、どうしてもあの歌声を聴きたい。

ワフン。

ワフン？

気付くと腰高の窓の外に犬がきつちり前足を揃えて座っていた。嬉しそうに尻尾を振っていた。

「お前、もしかして」

オリビエがお菓子を一つ、窓の下に投げてやる。

ランドンは夢中でがぶりと飲み込んだ。

「飲み込んだ」

思わずそのまま繰り返す。

すでにランドンは何事もなかったかのような顔をしている。

なんだ、もっと味わえよ、シューレンさんの料理は美味しいはずだ。手が込んだお菓子なんだ。

尻尾を振って二つ目を要求するランドンをちらりと睨み、オリビエは二つ目を落とす。

わふ、と礼もそこに犬はまた、一飲み。

「咬まないと喉に詰まるぞ」

犬は首をかしげた。

「だから」

窓辺に乗り出すと、犬は急に立ち上がって前足を持ち上げる。

「わ！」

驚いて、数歩下がる。

犬は窓枠に両の前足を乗せると、嬉しげに顔だけをのぞかせて舌を出す。

「ランドン」

少女の声。

慌ててオリビエは窓に近づいた。

「君」

「こんにちは、変な楽士さん」

睨む真つ直ぐな瞳に、また言葉に詰まる。

変。その攻撃的な言葉はどういう神経から生まれるのか。理解できないから反論も出来ない。容赦ない攻撃を少女は繰り返す。

「そんなところにこもってないで、出てくればいいのに。ねえ、ランドン」

犬は先ほどの菓子の恩も忘れたのかすっかり少女にじゃれついている。

「それとも楽士さんは犬が怖いのか？」

「そんなことはないよ」

「じゃあ、きて」

「来て？」

5

「うん、ほら、家の中ばかりだからそんな真つ白な顔して痩せてるのよ。貴族の奥様にはもてるかもしれないけど、街の子には全然魅力的じゃないわ」

ずいぶんな言われようだ。

似たようなことを先日男爵にも言われたために、自覚がないわけで

はない。

「意気地なしなのね」

「違う、犬はだめだ。触れないから」

「意味が分からないわ。行こう、ランドン。ねえ、なにもらったの？お腹痛くない？」

そんなことを言いながら、少女は歩き出す。

「ちよっと、待って！」

窓から叫んでも、少女はちらりと振り返るだけだ。

オリビエはテラスへと周り、一瞬躊躇したが、外へと走り出した。

「待ってっ！」

オリビエの家のさほど広くない庭を横切るように少女は通りへと抜けようとしていた。豆ツゲの小さな垣根をぴょんと身軽に飛び越えた。犬も続く。

「待て」

同じようにまたいで、オリビエは通りの石ころに躓きそうになりながら、追いついた。

息を切らせた青年に、犬が嬉しそうに近寄ってきた。

「わ、待て。やめろって」

立ち上がると犬はオリビエの腰に抱きつく。

「おい、止めろって！」

あはははは。

面白そうにキシユが青年の顔を覗き込んだ。

「やっぱり犬が怖いんでしょう？」

「違う！咬まれたらいけないから、触れない」

「なにそれ」

「いいから、こいつ何とかしろって！」

ふーん、ふーん、と首をひねりながら、少女は犬を呼び寄せた。

「変な人。ねえ、ランドン。咬まれるのが怖いくせに怖くないって

言うの。変なの」

「あの、犬はどうでもいいんだ。君、もう一度歌って欲しいんだ」

「ますます変な人」

「頼むから。曲作りを手伝って欲しいんだ」

少女は黙った。

「僕は、弾き出すと夢中になっちゃうから、だから、君にそれを聞いて欲しくて。聞いて、歌って欲しいんだ。僕も君の歌なら譜面ができるんだ」

キシュに茶を入れてやり、犬がキシュの足元に寝転んで、やっとオリビエは自分のチェンバロの前に座ることが出来た。

少女は美味しいと何度もため息をつき、それを作ったメイドを尊敬すると繰り返す。

「変人なのに、お金持ちはいいわね。こんな美味しいものを毎日食べられるんだから」

「変人、は余計だと思う」

「変人は変人。私、これを作った人にお料理を習いたいな。なんていう人？」

少女の敬意はすっかりシューレンさんのもので、オリビエは複雑な気分だが、機嫌を損ねてもいけない。

「シューレンさん、っていうんだ。毎日来てくれる」

「どこの人？名前からすると外国の人みたいだけど。この町の人じゃないの？」

「え、近くだと思うけど」

「思いつて？知らないの？」

呆れたようにキシュは紅茶のカップを置いた。

食べる手を止めて、青年を見ていた。

そんなに悪いことじゃないはずだ、とオリビエは思うが。

「朝、顔を合わせるだけだからね。僕は侯爵家に出かけるから、その間に家の掃除や夕食を作っておいてくれるんだ。彼女を雇ってくれているのも侯爵家だ。だから、どこのどつという出身の人かは知らない」

言いながら、言い訳に思えてくるのが不思議だ。十三の時から毎日顔を見ている。何をしなくても毎日来てくれるから、あまり意識したことがなかった。

誕生日すら、知らないな。

「…変なの。今度紹介してね。あんたのいない昼間に来るわ。いろいろ教えてもらおうかな」

完全に馬鹿にされている。ここは、我慢。我慢だ。

「メイドになりたいの？」

「ううん。ちがうよ。でもこんなに美味しいお菓子、自分で造れたら幸せだもん」

「あ、それはそうだね」

少女のもっともな発言にいちいち頷いている。

「ね、変人さん」

「…オリビエって名前があるけど」

「じゃあ、オリビエ。この間の曲、弾けるの？あれ、気に入ったな」
早速呼び捨てなのかとため息を漏らしながら、オリビエは手を鍵盤に置く。

あの曲は何度も弾いた。

「秋風のタルト」

弾き込んだために最初のような切なさは薄れている。けれどその分、穏やかな優しさのある曲になる。

「淋しい曲だね」

途中でこんな言葉を挟まれると、演奏は中断。

「あれ、止めちゃうの？」

「え」止めてはまずかったかとオリビエは首をひねる。

少女は紅茶を一気に飲み終わると、オリビエの傍らに立った。

「ねえ、もつと弾いて」

「いや、君が淋しいって言うから。気に入らないのかと」

「なに、つかかったの、私のせい？」

「え、違うけど」

失敗したわけじゃない。

ただ、曲の途中で口を挟まれるなど、両親を亡くして以来なかった。

「じゃあ、弾いてよ」

「途中で何か言われると弾きにくいよ」

「じゃあ、歌わない」

6

何か、とてつもなく弱みを握られたかのような感覚に陥る。そんな僕はおかしなことを頼んでいるのか。

無理難題なのか。

こんな年下の少女、音楽の何が分かるわけでもない少女の機嫌を取りながら曲を聞かせて宥めなければいけないのか。

考えてみれば、思うまま弾く曲は内容を問われても困る。ただ、人形のように繰り返し返して歌ってくれればいいのだ。だが、この少女はきつと、「何を思ったのか、何を表現したのか」としつこいだろう。想像するだけでぞつとしないか。

これは間違っているんじゃないか。

似合いもしない、菓子を焼いて呼び寄せようなんて。

侯爵に知られたらまずいだろうし、こんな風に誰かに僕の曲を聞かせるのはどうなんだろう。男爵の件があつてから、侯爵はますます他所で奏であることを嫌っている。一時は侯爵家に住まわせると言い出して。さすがにそれでは息が詰まるから、何とか宥めたのだ。

これが知れて侯爵家に閉じ込められるようなことになったら。僕は

本当にかこの鳥だ。
外に出られず、憧れる空ばかりを曲にする。
自由に、なりたい。

ふ、と。

ため息と共に演奏の手が止まった。
いつの間にか指は心を奏でていた。

ら。

振り向くと少女は真っ直ぐ、真剣にオリビエを見つめながら、小さく曲を口ずさんでいた。

「君」

「キシユって名前があるよ」

「キシユ、今の」

「歌えるよ。歌って欲しいんですよ？」

「……いいや、今のはいいよ」

あれは、取り留めない、どうしようもない想いが音になった。聞けば苦しい気分になるだろう。聞いて幸せな気分になれる曲でなくては、客には受けない。

「歌いたい」

「え？」

いつの間にか少女の手が据わるオリビエの肩に静かに乗っていた。少女が口ずさむ旋律はオリビエが思ったほど不快なものではなかった。

それは静かで低く、流れているかどうか分からない川面のような。そして少しばかりの小石に波立つ、脆さが垣間見える。やはり自分

らしすぎて気分が乗らない。

「ごめん、それは」

少女は歌い続ける。

「キシユ」

最後の一音まで、キシユは歌いきった。

ほう、と息を吐き出して。少女は悲しげに青年を見つめる。

「これ、譜面にはしないのね」

「ごめん」

「とっても素敵なのに。聞いたら皆感動するわ」

「キシユ、そうだ。言ってなかった。僕の曲ね、君はきっと覚えてしまっただろうけど、誰にも言わないで欲しいんだ。僕以外の誰にも聞かせないで欲しい」

侯爵に知れたら。それは、気をつけなくては。

「なんで？どこで何を歌おうと私の勝手だわ」
頬を膨らませる。

「侯爵様に言われている。僕が、奏でるすべての曲は彼のものだから。許可なく侯爵様以外の人間に聞かせるのは禁じられているんだ」
キシユは口を尖らせた。膨らんだり凹んだりする少女の頬がなぜか視線をひきつけた。赤みを帯びた唇が胡桃割り人形を思い出させるのは何故だろう。

「その、僕が頼んでおいて悪いんだけど、僕の曲を僕にだけ聞かせて欲しいんだ」

少女はさらに首を三十度くらい傾けて睨む。

「だから。毎日美味しいお菓子を用意するよ。シューレンさんにお料理を教えてもらえるように頼んでおくから。だから」

「毎日なんて、無理」

「あ、そうか。君の好きなときに来ればいいよ。僕がいなくてもシ

ユーレンさんがいてくれるしね。気が向いた時に、聞いて歌ってくれれば」

「貴族様って、よく分からないけど。贅沢だよね」

「そうだね」

「だって、それじゃ私のランドンと同じじゃない」

「え？」

「オリビエは貴族様の犬と同じってこと」

2 少女、歌、奏で 3

7

少女の言葉がずっと耳に残る。

自覚しているところをつつかれる。分かっている、と自虐的に反芻している自分がいる。それは自分自身に弁解しているのと同様だ。自分にすら言い訳しなくては収まらないくらい、胸の奥では現状に苦しんでいる。

認めたくはないが。

息が詰まる。

キシュはあの後「でも、こんな素敵なペットなら、飼いたいて思うよね」

と。それは青年の表情を読んだ慰めかもしれないが。

先日と同様、今日はお茶とお菓子の礼だと言って、軽いキスをくれた。

それも慰めかもしれない。

情けない。十八にもなって、年下の少女に憐れみをもらうなど。

風の強いその夜。オリビエは生まれて初めて侯爵の命令で曲を作ったことを思い出した。

あれは、十三歳の秋。両親が亡くなって、一人途方にくれていたときだ。

遠い街の親戚たちが引き取り先をめぐってヒソヒソとキッチンで話し合っていた。僕は一人、チェンバロを弾き続けていた。

他に何も出来なかった。

父の葬儀に来ていた侯爵が音を聞いて訪ねてきた。

彼が僕を引き取ると言い出し、親戚は喜んで僕を差し出した。

リッツアルト侯爵は、僕に命じた。
明日、迎えをよこす。それまでに、両親へのレクイエムを作りなさいと。

僕は頷くしかできなかったけれど。

ずっと、奏で続けていたのは両親への想いだった。そのどの一小節でも二人への想いで一杯だった。

音楽を覚えてくれたのは両親だ。僕は音で父さんと話しをしたし、楽器で小鳥の声を真似して見せれば母さんは鳥の名を当てて見せた。この家で、僕が奏でる音全てが両親の思い出なんだ。

このチェンバロも、この指も、手も。すべて、両親が残してくれた。翌日。侯爵が自ら迎えに来た。

僕はここで。両親の残してくれたチェンバロで弾きたいと言い、彼は頷いた。

あれも、雨の日だった。

湿り気は音を曇らせた。

それでも、僕は弾きつづけた。湿気に弱いチェンバロの弦は、弾いているうちに乱れ、音も鈍る。それでも。

父さんが僕に語るのは音楽の話だった。

母さんが僕に教えてくれたのは優しい気持ちだった。

僕はその両方を音に変えた。

拍手を。

侯爵の拍手をもらって、初めて涙がこぼれた。

張り詰めた弦が、雨で緩むように。僕の心を溶かしたのは自分自身の曲と、侯爵の笑顔だった。抱きしめられ、子供のように泣いた。

侯爵は僕を侯爵家に住まわせるつもりだった。

でも、この家の、両親の残したチェンバロを放っておくことができ

ないと訴えたら、ここに住むことを許してくれた。手入れを怠れば楽器は使えなくなる。

それを侯爵は良く知っていた。

感謝すべきなんだろう。

僕は、音を奏でること生きしていける。

そんな幸せは、他にないじゃないか。

どんなに自由でも、楽器がなくては僕は奏でられない。楽器を維持して、奏で続けるためには、侯爵の力が必要なんだ。

キシュは歌えるから自由なんだな。

強い意志を感じる子だ。赤い髪がまるで太陽みたいに暖かい印象を与える。

どんな生活をしているんだろう。何処に住んで、どんな両親がいるのか。

どんな環境でなら、あんなふう強く、伸びやかに。そして歌えるように育つんだろう。

明るい太陽の下、犬と戯れる少女を想像した。

紅葉の始まる榆の木の下、白い犬と赤い髪の少女。

それを、明日、曲にしてみよう。

8

オリビエの奏でた明るい日差しを思わせる曲は少女をひどく感動させた。

もちろん、シューレンさんのお菓子も一役買っていた。香ばしい焼き菓子をすっかり三つほど胃に納めると、オリビエのそばに立って曲を歌った。

歌い終わる頃にはオリビエの前には譜面が出来上がる。

「助かるよ、すごく聞きやすいんだ、君の歌。音程がしっかりして素直だし」

「そうでしょ？あたしが男の子だったらなあ、聖歌隊に入るのに。あたしの町の教会は小さいけど、立派なオルガンがあるんだ。オリビエはオルガンも弾けるでしょ」

「あ、まあね。でも、教会には教会の専属のオルガニストがいるだろう？」

「いるわけないでしょ。あたしの住んでいる町は司祭さまが学校の先生だし、オルガンだって弾くんだから。聖歌隊だって子どもばかりじゃないんだから。うちの親父も歌うんだよ」

「すごいね。見たことがないなそういうのは」

特に最近侯爵家でミサを受けるために街の教会の様子はまったく分からなかった。学校もオリビエが通ったのは市役所や裁判所に程近い街中の学校だった。男性教師と女性教師がいてそれぞれが男の子と女の子を教えていた。学校はそういうところだと思っていた。

「本当よ、同じ真つ白なローブを着るんだから。うちの親父のソプラノ、聞かせてやりたいわ」

「え、ソプラノ？君のお父さんって、カストラート*なの？」

そこでキシュが持ってきた麻の袋に残りの菓子を全部詰め込むのに気付いた。

「ばかね、冗談に決まってるじゃん。あれって子種がなくなるんですよ？そしたらあたしいないでしょ」

澄ました顔で袋を抱えると私帰るね、と立ち上がる。

「何か、用事かい？」

「飽きたの。また気が向いたら来るわ。あ、そうそう、お菓子よね、パンのほうが助かる」

*カストラート：ボーイソプラノを保つために去勢した男性歌手のこと（現在はもちろんない）

翌日からキシュはパンのために通うようになった。

始めのうちはオリビエの夕食用にと用意されたパンを渡していたが、それではさすがにオリビエも困った。

少し足りないとしューレンさんに頼んで、パンを増やしてもらった。

キシュは毎日ではないが、オリビエが帰ってくる頃に見計らったようにふらりと家の前に立ち、何も言わなくてもリビングに上がるようになっていた。

オリビエが曲を奏できれば、必ずそれを歌ってくれた。

「あーあ、お腹すいた」

少女は譜面を再確認しているオリビエの目を盗んで、こそこそとキシュチンへと入り込む。アーチになったリビングとの境で一瞬立ち止まるから、さすがに躊躇するのかと振り返るのを期待したが、赤毛の後姿はおもむろに向こうに消える。

「キシュ、だめだよ」

遅れて追いかければ、用意されている夕食の硝子のふたを持ち上げてしっかりとハムを口にくわえていた。

「まるで野良猫だね」

呆れながらテーブルのランプに火を灯し少女の顔をのぞく。悪びれない様子でにんまり笑う。

レンガを積んだ炉の種火に薪を足し、火を起こすと鍋を上にした。鍋のふたを開け、一度かき混ぜてからオリビエは少女と向かい合わせに腰掛ける。

キシュは膝を抱えたままイスに座って夢中で食べていた。そばで座って見上げていたランドンが、なぜかオリビエの脇に移動し同じように尻尾を振った。

相変わらずなでたりはしないが、オリビエはハムを一切れランドン

の足元に落とした。

「どうしたんだい、お昼食べられなかったのかい」

犬の護衛を連れた野良猫を眺めながら、オリビエはお茶を飲む。

「今日は親父と喧嘩しちゃったの。だから、朝から帰ってないんだ」

「僕も良く叱られたよ、学校を半日で抜け出したりしたからね」

キシュはスープをすすする手を止めて、上目遣いで見上げる。小さく肩をすくめるとスプーンをおき、黙って器ごと持ち上げて飲み干した。

目を丸くしてみている青年に、満足げなため息を吐き出すと伸びをする。

「本当に野良猫みたいだ」

「飼ってみる？」

キシュが立ち上がったてオリビエの前にかがみこんだ。目の前に少女の白い胸元が見えたが、あまり色っぽいとはいえなかった。

「多分、手に負えないし、ひっかかれそうだ」

「ちえ。泊めてもらおうと思ったのに」

「それはまずいよ」

「同じだよ、昨日外泊したから親父と喧嘩したんだ」

「外泊」

この歳の女の子にはあってはならないことだ。

細く清らかで真っ直ぐに見つめる太陽のような少女は、一方では濃い影を身にまとうのかもしれない。オリビエは幼い頃に良く通った街の教会を思い出した。ミサの日には聖母の像がランプに照らされ、なぜか恐怖心を感じた。

安らかな慈愛の笑みも、暗がりになれば違うものに見えた。

「そ。男の子の家に泊めてもらったんだ。あんたは友達じゃないから、一応代金払ってあげようか」そう言って自分の体を指差してみせる。

「お母さんが悲しむだろう。それに教会の教えに……」

「説教臭いな。あのね、オリビエちゃん。あたしももう十七なんだからね。恋人の一人や二人いてもおかしくないんだ」

「二人はおかしい」

「じゃ、三人。あんたも入れてあげようか」

「結構。それに、十七じゃないだろ」

「体が小さいのは痩せてるから。痩せてるのは貧しいから。貧しいのは」

そこで止まると、オリビエをじつと上目遣いで見上げた。青い空の瞳はランプの明かりでしつとりと潤んで見える。

「なんだよ」

「あんたたちがこんな贅沢しているから」

そう口を尖らせて、テーブルに残る料理を指差した。

「だいたい一人分でこれは多すぎるでしょ。いつも残してるんですよ」

図星だった。食べきれないとシューレンさんに言ったことはあるのだが、成長期なんだとか、もっと食べないといけないとかで、どうしても減らしてくれない。

それが普通の分量なのかオリビエには分からないが、とにかく毎日あまってしまう。

それ以上に贅沢な内容と分量の侯爵家の夕食については以前アネリアがこぼしていた。

「いい？世の中には決まった量のお金と食べ物しかないの。それをね、あんたたち貴族がたくさん持っているから、皆に回らないんだよ。わかる？怠惰と贅沢、それこそ教会の教えに反しているわよ」

「じゃあ、働き者のよき信者のキシュに、夕食半分食べてもらうってのはいい判断かな」

「さらに一晩の寝床を提供してくれるならね」

「それは断る。帰る家があるんだから帰りなさい」

「かわいくないの、年上ぶって」

つんとしてリビングへと歩き出しながら、少女は赤い髪を煩そうに束ねなおす。

その白いうなじは痩せて、確かに僕は贅沢なのかもしれないとオリビエに思わせた。

「おいで、ランドン」

振り向きもせず、ランドンのわんという挨拶を残してキシュは帰っていった。テラスの引き戸を開け放したまま小さくなっていく影は夕日になぶられオレンジに染まる。

そんな風にたわいない会話を楽しむ日もあれば、一曲だけ歌ってパソを持って帰る日もあった。

それでも、一人きりの家に帰るよりはキシュがいてくれたほうが楽しかった。

野良猫に餌をやる気分なのだと、オリビエもわかっていた。けっして懐かない野良猫ということも。

3・春を待つ鳥 1

1

この地方の秋は短い。

リビングの暖炉に薪をくべるようになると、キシュは温かいオリビエの家にもっと長くいたがるようになった。

相変わらず住んでいる場所や本名ははぐらかされていたが、少女の服装が季節に関わらず変化しないことに気付いてオリビエはクリスマスまでに温かいコートをあげようと決めた。

小さい手はアネリアのようにかさかさとしていて、不器用にナイフとフォークを操るそれをつい、見つめている。

「これ、何？」

見慣れない食べ物があつたのか少女はフォークの先でつついて転がす。皿の中のそれは赤い色をしたスープ。イファレアのミネストローネとも違い、大ぶりのジャガイモと牛の肉、人参や赤カブが入っていた。ビーツと呼ばれるその赤カブはこの地方では珍しいものなのかもしれない。シューレンさんの母国では良く食べられていると聞いていた。

「トマトのスープで肉と野菜を煮込んでいるんだ」

「だから、これ。この真つ赤な変な奴」

眉を寄せる顔が面白くて、つい笑う。

「何、ばかにして。いいよ、食べてやるから。これで死んだらあなたがあたしの親父を養ってね」

「分かった、ランドンもね」

「いい心がけ」

そうついいながら、小さくきつたビーツを口に含む。

じっと見つめる青年にキシュは上目遣いを返す。

「…なに？」

「美味しい？」

「嬉しそうに笑ってるの、なんか、腹立つんだよね。オリビエってさ、ときどきすごくバカにした目であたしのこと見てる」

「かわいいから」

なかなか慣れない野良猫が美味しそうに餌を食べてくれたら、普通は嬉しいと思う。

「なに。そのくせ、一度もキスしないの」

少女は口を尖らせる。後ろに縛った赤い髪が尻尾のように不機嫌に揺れる。

「してほしいの？」

「そうじゃないよ、でも、失礼な気がする」

「よく分からないな。僕は子供を相手にする趣味ないから」

「だからー。あたし、あんたと一個しか違わないって言ってる」

子ども扱いするといつも言葉はきつくなるけれど、けっして嫌そうでないとオリビエは理解していた。その証拠に顔は赤く高潮しているが赤い尻尾は大人しく肩にかかって動かない。

そのくるりとした毛の先が白い胸元に落ちているのを見ても、あまり心を揺さぶられることはなかった。わざとだろう、いくつかボタンを緩めてあるがその手には乗ってやらない。その方がキシュとの関係は上手く行くような気がしていた。

猫は媚びても捕まりたくないのだ。自由が好きだ。少女の我侘に「はいはい」と答えながら気が向いて甘えてくるのを待つ。そんな飼い主の気分だった。

確かに見下していると言え、そうなのだろう。

痩せた小柄な少女。無邪気なきつい言葉を投げつけるのは幼いからだ。きつとすぐに意地を張って、かわいく頬を膨らます。それが想像できるからこそ、恋愛の対象とは思えなかった。

以前、ボーイフレンドがいるようなこともちらちらと話していたが、どこまで本当なのか怪しいとオリビエは思っている。男の子の友達

はいるだろう。けれど、この子を女性として扱う勇気のある男はそういないと思えた。

何しろ、幼い。

今もオリビエの皿の肉を横取りしようとそつとフォークを突き立てている。

「欲しいならクダサイって、普通は言うんじゃないか？」

「奪うのがいいの。美味しいから」

「変な趣味だね」

「そう。なんでも無理矢理奪うのが美味しいの。クダサイなんて頭下げるくらいならいらないもん」

その変なプライドが幼稚。

運ぶ途中でフォークをするりと抜けた肉が派手にクロスを汚す寸前で、差し出した左手で受け止める仕草も、「あつっ」と慌てる様子も。

「ばかだな！火傷するよ、もう」

痛がる手を取って、水道のところまで連れてくる。

「ほら、冷やさないと」

小さな手に水をかけてやる。井戸水はこの時期は氷のように冷たい。

「ひゃっ！冷たいくて痛いよ！ばか」

慌てて引きかける手首を押さえて、しっかり冷やす。

「放してって！」

「だめだよ。ほら、じつとして」

背中ごと押さえつけると、押し黙ってじつと手を見ている。

「もう、平気だから。ねえ、このままじゃしもやけになるよ」

やけにしおらしい声を出すから、水を止めて乾いたタオルで拭いてやる。

「ほら、冷え切っちゃったじゃないか。オリビエのせいなんだから。だいたい、最初が大げさなんだから」

「大げさじゃないよ、女の子なんだから。綺麗でいないと」

「何、母親みたいなこと言ってるんだよ」

「君のお母さんもそうだろう？」

「いないから知らない。あ、なに？オリビエもそうしてもらったの？男の子なんだから綺麗でいなくちゃって？」

ふと、オリビエは水道の脇に置かれた白い花に目をやった。その日、両親の墓に手向けたのと同じ花だ。葬儀のときに、棺に投げられたのも同じ。

母は美しく眠っているようだった。

「……僕の場合は、演奏のためだよ。絶対にね、傷つけない」

「変なの」キシュは青年が曇った小窓の外の暗がりを感じて、見ていることに口を尖らす。

「大切なんだよ。それは仕方ない。母さんが、寒い時期には必ず毛皮の一番高い手袋を買ってくれた。足はしもやけだらけになったけど、手だけはいつも綺麗だった」

「変」

「いいだろ？君より綺麗」

オリビエは手のひらをかざして自慢して見せた。人より少し長い指、程よく筋肉のついた手のひら。アネリアはかつて、とても綺麗だと褒めてくれた。

「ヘンタイ」

「ひどいな」

オリビエは笑った。

キシュが「親父」の話題を出しても、母親の話をしない理由がこのとき分かった。

いないのだ。それはオリビエも同じだった。生まれた子どもが成人できるのは七割に満たなかったし、大人が五十を超えて元気でいられるのも同じ程度だった。

だから、そういう話は珍しくはない。

「さ、デザートがまだだよ」

「あ、そうだ、今日はなんだろう！」

慌ててオリビエより先にテーブルに駆け戻ろうとするキシユの考えは予想できる。

オリビエの分まで口に突っ込むつもりなのだ。

「待てよ！」

「やだよー」

チヨコレートで手と口をべたべたにした野良猫に、オリビエはあきれて笑い出した。

「また、手を洗わなきゃいけないだろ？」

こんな楽しい夜が、ここ最近は日常なのだ。

クリスマスは侯爵家での夜会やミサで会えない。だから、その前に少女に似合うコートを用意してあげたい。

2

オリビエが誰かにクリスマスプレゼントを贈るのは初めてだった。

どうしたらいいのかわからず、とりあえず頼りになりそうなシュールン夫人に話してみた。

夫人は目を真ん丸くしていたが、エスファンテの街で手に入るだろうと教えてくれた。

オリビエはそう言われて黙る。

「あの。シュールンさん。僕、現金を持ってないんだ」

それはプレゼントの話以上に彼女を驚かせた。

必要なものはすべて、侯爵家で準備される。食事も衣服も日用品もすべてシュールンさんを介して手に入った。本が読みたいと思えば、侯爵家の侍従長ビクトールに話せば、二、三日のうちに届けてもらえた。

自分で何かを買いに行く必要も、自由もなかった。

公爵夫人の買い物につき合わされ、一緒に山ほど服を買ってもらう

ことはあっても、自分で支払いをしたことはない。

それは、十三の時にすべての遺産を侯爵に預けた時からずっとそうなのだ。

不便でもなかった。

「それは、困りましたね。そのお嬢さんの服を買うのに、侯爵様のお許しが出るかどうかは…」

アネリアとの結婚を許してもらおうとした、あの時の侯爵を思い出す。

「ビクトールに言えば…」

ふと、アネリアのときのことを思う。

またか、と呆れられるだろうか。

別にアネリアとの間柄とは違う、ただの友達だ。

「僕にも、何か。そうだな、お金になる仕事があれば」

「オリビエ様、それは堅く禁じられておりますよ」

朝食後のコーヒーをもらいながら青年はため息をついた。

マイセンのカップに描かれた鮮やかな蘭の花が褐色の揺れる水面に現れては消える。

ここ数年、公爵夫人が夢中になって集めている品だ。フロイセンで作られる白磁の食器は銀食器より人気があった。

シューレンさんもその器にはことさら気を使うらしく、いつも食器棚の決まった場所に贅沢なほど場所をとって置かれていた。

「ね、シューレンさん」

「はい？」

「これ、売っちゃう？町に質屋があるよね。絶対にいいお金になると思うんだ」

欲しいといったわけでもないのにアンナ夫人が買ってくれたものだ。「お、オリビエ様！！そんなことをなさるなんて、罰が当たります

よ！」

顔を真っ赤にして、シューレンさんが怒鳴るので、オリビエは冗談だとためる。

「オリビエ様。その、キシユという娘さんは学校に通っていないのでしょうか？教会の教えを受けているとは到底思えませんし、貴方様に良くない影響を与えるのではないかと心配ですよ。その子のためにそんな恐ろしいことをおっしゃるなんて」

「分かったから。しないから、そんなこと。ゴメン。そう怒らないで」

そう、どうせできやしない。

「二度とそんな恐ろしいこと、おっしゃらないでくださいませ」

「約束するよ。だから、そんな風に怒らないで欲しいな」

丸い頬を赤らめて怒るシューレン夫人が哀れに思えてオリビエは背後から軽く抱きしめた。

少しだけバターの香りがした。

いつのまにか自分の身長が夫人を軽く追い越していることに気付いて、あれ、と声を上げる。「シューレンさんって、こんなに小さくて可愛らしかったかな」とつぶやくと「オリビエ様はもうご立派な紳士でいらっしゃいますよ。私はとつくに気付いていました」と笑う。

「お会いした時にはまだ、小さなお坊ちゃまでしたのにねえ。夕方私が帰ってしまったのを淋しいとおっしゃってくださいましたね」

そうやって見上げる表情は、昔から変わらない。今も、悪戯な子供を見るように目を細める。淋しいなんて言った覚えはないぞと記憶を探る青年に夫人もいたずらな笑みを返した。

「冗談ですよ」

それでもその日以来、マイセンの食器の棚には鍵がかかった。

シューレン夫人がオリビエのことを思っていたのだらう。あるいはキシユのことを心配しているのかもしれない。別段そのことを問い

ただす必要もないので、マイセンの美しいカップはもっぱら観賞用になった。

3・春を待つ鳥 2

3

北の山々から冷たい風が吹き降ろされる季節。

その年は例年より早く霜が降りた。寒い時期には音楽堂にストーブが焚かれる。一年ぶりに火を焚くそのために、煙突を下男のモスが掃除してくれた。

こんなものが引つかかっていましたと、主のいない鳥の巣を見せた。
「取ったのか？来年鳥が困るだろう」

真顔で元に戻す方法を考えるオリビエに、モスが煤だらけの顔に白い歯を見せて笑い出した。

「楽士様、本気で空っぽの巣のために、この冬ストーブなしで過ごされるつもりですか？あつしは反対しませんかね、皆外套を着たまま震えて曲を聞かなきゃなんねえですよ？」

「……そんなに、笑わなくても。ちよつと、戻せるか考えたただけだ。あんまり綺麗に丸く出来上がっているからさ。鳥もバカだな、こんなところに巣を作ったって取られるのに」

「鳥は利巧ですよ、どんなに自由に空を飛んでも、羽を休める時期と場所が欲しいんです。今はもつと南の暖かいところに渡りの最中でさ。それにね、なくなりやまた、作るんです。それが鳥ってんだ」

オリビエはしげしげと丸い木の枝で作られた巣を見つめた。

「オリビエ様は、鳥が好きなんですネ」

「あ、まあ、ね」

自由に、空を飛べるから。

「あつしはどうにも不憫に思いますよ」

「鳥が、不憫？」

「翼があるのは、飛ばなきゃなんねえからだ。それは、この地上で足をつけて生きていけねえってことでさ。不憫ですよ。いつだって死に物狂いで飛んでるんです」

モスの低いだみ声を聞きながら、オリビエはチェンバロの空を眺めていた。

その日、鳥の巣を持ち帰ったオリビエを、いつものように待ち受けていたキシュがからかった。

「素敵なリースじゃない、羽とかついているし、クリスマスにぴったり？」

「……」

何故持つて帰りたくなつたのか、オリビエにも分からなかった。綺麗に丸く作られたそれを薪と一緒に燃やそうとしたモスを止めた。帰る場所を鳥がなくなってしまう、そんな感傷を抱いた。冬の間預かって、春に元のところにおいてやれば鳥も戻るのではないかと。巣に宿る小さな命がちいちいと可愛らしい鳴き声を聞かせてくれることを想像すらした。

「どうしたの？オリビエちゃん、おかしいよ」

「いいんだ、これは」

「ま、ヘンタイの考えることは分からないけど」そうあきれる少女の脇で、ランドンは鼻を鳴らして青年の持つそれに興味を示す。

犬から避けて、キッチンの食器棚の上に隠した。

「何これ！」

オリビエをからかおうとさらについてきていたキシュがテーブルの上にぎっしりと積まれた色とりどりの箱に飛びついた。

丸いもの、四角いもの、小さいもの。どれも派手なりボンをつけてテーブルの上だけがパーティーのようだ。

「ねえ、オリビエ、これ何？贈り物？ねえ、何、なんなの！？開け

ていい？開けるよ？」

一気に子どもっぽくなる少女にオリビエは「手を洗ってから」とたしなめる。

「何、年上ぶって失礼な」と文句を言いながらも素直に手を洗ってくるのは、包みの中にお菓子があることを想像しているのだろう。少女の予想通り、いくつかの箱にはキャンディーやクッキー、肉の燻製などが入っていた。

「これ、ねえ、こんなにたくさん、なんなの」

止めるまもなくキャンディーをポケットに詰め込んでいる少女にオリビエは湯を沸かしながら応える。

「侯爵家からのクリスマススの贈り物だよ」

「……オリビエって愛されてる」

まだ、遠慮の一つもなく包みを開け続けている少女は派手な飾りボタンと刺繍の入った上着を引っ張り出すと羽織ってみる。もちろん大きいために垂れた袖は少女の膝に行儀よく乗っている。すでにその膝には大きめの手袋とアルパカのマフラーがかかっている。真っ赤なヒイラギ模様のセンタークロスをびらびらと広げてランドンにかけようとする。

「キシユ、あんまり散らかさないで欲しいな」

「ね、ねえ、これ、いいな、素敵」

キシユが取り出したのは、深い紅色のコートだ。

「あれ、これオリビエには小さいじゃない、あたしもらってあげる」

「それ、新しいものじゃないんだ」

「いいよ、綺麗じゃない、素敵。ありがと、あたしにだってクリスマスは必要よね」

「僕から」

「え？なんか言った？」

「僕からの、プレゼントだよ。と言っていていいかわからないけど」

オリビエはせっかく入れた温かいお茶も、置く場所が見つからず持ち上げたポットをまた置いた。

「さ、夕食。ほら、それ片付ける。リビングに持って行って。後で見よう、明日侯爵様にお礼を言わなきゃならないから。運んで」
「ねえ」

オリビエはまだ未開封の箱をいくつか抱えたとリビングのテーブルに運んだ。後から赤いコートを抱え、オリビエの上着を羽織った少女とテーブルクロスを背中に乗せたランドンが続く。

「ねえってば」

「ほら、そこに置いて。ああ、そのマフラーはシューレンさんの分だから、ちゃんとたたんで」

「ねえ、オリビエ！これ、このコート！」

「だから、君へのプレゼントだって」

気配を感じて少女のほうに向き直ると新しい上着が投げつけられた。

4

「キシユ、乱暴だな」

少女は先ほどまでのだぶだぶの上着少女ではなくなっていた。リビングの窓に反射する自分をしっかり見ようと右に左に回ってみせる。しげしげと袖口のレースを眺め、次に胸元をなで、裾をひらりとさせてみる。

赤い毛織物のコートは上質ですんなりした腰のラインが華奢な少女を女性らしく見せた。胸元を飾る刺繍とレースはなだらかな丘を築き、その真ん中で小さな両手が組まれていた。

祈りに似たそれをする少女は聖女のような笑みを浮かべていた。

「ありがとう」

多分、初めてだったろう。

キシュがオリビエに礼を言った。

「あ、いや。その。ごめんね、それ、お下がりなんだけど。まだ袖を通していなかったはずだから」

「お下がり？これが？誰の？すっごい素敵なもの、このままお貴族様のパーティーにも出られそうよ」

「それ、母さんの、なんだ。五年前のだけど質のいいものだから」
どんと、少女に抱きつかれた。

「わ、キシュ……」

赤毛が耳元をくすぐった。

案外背が高いんだと、今更気付く。それともこの数ヶ月で伸びたのか。

「ごめんね、僕は自分で買いたい物できないから、どうしても新しいものは買えなかったんだ。それでも、何か君にお礼をしたくて。やっぱり、気に入らないかな、母さんのだから大きいと思うけど」

キシュは黙って首を横に振った。

「キシュ？」

押し付けられる額、頬。

泣いている？

嬉しくて？

あのキシュが？

だとしたらそれは奇跡というものだ。

不意に少女は顔を上げた。

期待する涙は見られなかったがいつもと少し表情は違った。

「あのね、そんなのもらえない。あんたバカよ。ヘンタイの上にバカ。形見でしょ？お母さんの」

「ん、まあそうだね。でも誰も着ないんだから」

「だめ、いらぬ。ちゃんと自分で買ってプレゼントして」

そう言われれば、反論は出来ない。

「……そうだね。ごめんね」

あれほど喜んでくれたと思ったのが、どうにも少女の気持ちは分かなかった。乱暴に投げ返されたコートを抱え、オリビエは二階にある両親の部屋へ持つていった。冷え切った両親の寝室は、埃一つない。あのときのまま、いつでも使えるようにベッドにシーツも敷かれている。シューレンさんの優しさなのだ。

そこにオリビエが花を絶やさないことをシューレンさんも知っているのだ。

赤いコート。これをシューレンさんが見つけてくれて、これなら年頃の子に丁度いいですよ。キシユには大きいよ、母さんのサイズだよ、と笑うとシューレンさんは自分にそれをあてて見せた。

「ほら、オリビエ様、その子と私、あまり身長は変わらないのではないですか？だとすればぴったりでしょう？」

「あれ？」

「オリビエ様、貴方様の身長はもう、お父様を追い越していますし、つまりキシユというその子だって大人と同じです。もう立派な淑女ですよ。まあ、行動は子どもそのものですけどね」

シューレンさんの言うとおり、キシユに似合っていた。両親は常に自分より大きいものだ、そんな印象だったのに。いつのまにか自分自身も父親を追い越していた。時が経っているのだ。

リビングに戻るとキシユは膝を抱えたままソファーに座り込んでいた。

オリビエが現れて助かったといわんばかりにランドンが足元に駆け寄り、尻尾を振った。

オリビエはランドンにはけっして手を触れないのに、なぜか懷かれていた。

「キシユ、夕食にしよう。お腹すいただろう」

「ほんと、馬鹿なんだから」

まだ、コートのことを言っているのだろうか。

「ほら、おいで。ごめんね、今度は何とか自分で買い物できるようになるから」

「あんたいくつ？お子ちゃまなんだから」

拗ねたままついてくる少女の肩に手を置いた。

「だから、謝るよ、そんなに怒らないで」

「だいたいさ、あんな素敵なもの見せといて。形見だって。ほんと馬鹿なんだから。貴族様と違ってね、あたしたちはパンのためにならなんだって手放すんだよ。あんなの家にあったら親父がさっさと売り払っちゃうんだ。もらえるわけじゃない。ちよっと考えれば分かるでしょ？」

「え？」

「何、その顔」

気に入らなかったのでは、ないのか。

「形見じゃなかったら、売るのが？」

少女は頷いた。

「そう。案外、優しいんだね。キシユ、今日はちゃんとお祈りしてから夕食だからね」

「なにそれ」

「僕はやっぱり感謝しなきゃいけないって思ったんだ」

「神様に？」

「そう」

両親にも、そして侯爵家にも。服を売らずに生きていける環境にある。

「もちろん、キシユにも感謝してる。一緒にいるのは楽しいからね」
「じゃあ、仕方ないわ、付き合っただげる。でもお祈りの言葉覚えて

ないから、オリビエが話してね」

「じゃあ、覚えようね」

「だからそれが見下してるっての」

「かわいいから、君」

「もう」

3・春を待つ鳥 3

5

クリスマスから新年にかけて、オリビエは侯爵家で過ごす。シュールン夫人に休暇を与える意味もある。その間侯爵家で行われる様々な催しにオリビエの曲は欠かせないものになっていた。クリスマスのミサではオリビエの奏でる聖歌は人々を泣かせた。

新年を祝う夜会でも、大広間でダンスが繰り広げられるその一方で、オリビエが演奏をする音楽堂にも客の足が途絶えなかった。皆、踊り疲れては飲み物を手にオリビエの曲を聴きに集った。

一年でこのときほど、これまで作った曲を総動員する日はない。楽譜が尽きれば即興の曲を奏でる。侯爵の姪ソフィリアの子どもリリカが、無邪気に窓からの雪を眺めるのを横目に見ながら、可愛らしい曲を奏でる。深々と積もる雪は窓の外を青く白く染めていく。夜の闇に音楽堂の明かりが漏れ、雪原に反射して煌く。

その子には今朝、雪だるまを作ったとねだられたばかりだった。オリビエが困っているとビクトールが代わりに小さな雪だるまを窓辺においてくれた。

今も小さなレディは窓の外の白い彼に新年の挨拶を告げているのだらう。

敷地内の礼拝堂で鐘が打たれ、新しい年の始まりを知る。

それを合図に、オリビエのこの年の仕事は終わる。

ふとため息と共に立ち上がり、まだ残っていた客に一礼する。

若い男女、先ほどの子どもが眠ってしまっているのを静かに見守る侯爵の姪。老夫婦。温かい拍手が鳴り止むとオリビエは焚き続けた

ストーブのために乾燥した喉を潤す。

空腹など感じている暇はなかった。

少しずつ人の気配が減る室内で、イスに座ったまま鍵盤をそつとなる。

侯爵にもらったブルゴーニュの白ワインを庭の雪で冷やしていたことを思い出し、テラスに出る扉を開く。差し込む冷気に頬が引き締まる。いつそ心地よさを感じてオリビエは一人テラスに立った。

かすかに届く大広間の人々のざわめきも、庭の木々が積もった雪を落とす音も。全てを心地よく変えてしまう。雪に埋め尽くされた庭は好きだった。音すら美しく変える。

「風邪を引くぞ」

振り向けば、見覚えのある栗色の髪。ランプを背にした影だけでも分かる。

ロントー二男爵。ふと眉をひそめたがその背後に侯爵の姿を見つけオリビエはホツとする。いつだったか、ロントー二男爵がオリビエを譲って欲しいと言い出したときには、あまり近づくなと侯爵に言われた。

二人は仲が良いのか悪いのか、オリビエには測りかねたが、侯爵家の夜会や茶会には必ずと言っていいほどホスタリア・ロントー二男爵は顔を見せた。

6

オリビエがワインを取り出し、音楽堂に戻ると男爵は肩についた雪を払ってくれた。

「オリビエ、それを飲むつもりか」

侯爵が眉を寄せ、それを見た男爵は笑い出す。

「え、……あ！」

甘い白いワインは凍っていた。

「もうしわけありません、せっかくいただいたのに」

「これはこれで、おつかも知れませんよ」面白がって男爵が無理矢理コルクを引くと、凍りついたそれはぼろぼろと崩れた。

「あ」

「男爵、何をしている。そのようになったもの、飲めたものではない。新しいものを持ってこさせる」

侯爵に命じられたビクトールが三つのグラスと新しいワインを持ってきたときには、男爵は意地でも空けると宣言し、丁度残ったコルク栓を無理矢理ビンに押し込んだところだった。半分凍りついたワインはとろりとし、香りだけを楽しんだ男爵がオリビエに差し出す。

「え、……」飲めと？

侯爵に助けを求めるがいつもの無表情で自分のワインを口に運んでいる。知らん顔だ。せっかくのワインを、という多少の苛立ちも見取れる。

仕方なくオリビエは男爵の冗談と知りつつもグラスに注がれた凍りかかったワインを口に含んだ。

それは当たり前だがひどく冷たく、そして濃厚な甘みを持っていた。時折触れる氷の塊がさくさくと舌を刺激し、そう、美味しかった。

「あ」

「どうした？感想は」

面白がっている男爵に、オリビエはしてやったりと笑って見せた。

「美味しいです。濃厚で甘みが増しています」

そして一気に飲み干してみせる。

「侯爵様にいただいたものですから、私が責任を持っていたきます」と二杯目をなみなみとグラスに注ぐ、というより落とすオリビエ

工を目を丸くして男爵は見つめる。

男爵はからかうあてがはずれ、嘘をつくなどグラスを取り上げた。

「美味しいですよ、男爵」

口にすると同時に表情を変えるロントーニが面白く、オリビエは笑い出した。

「ほら、ね。まるで噂に聞くフロイセンの貴腐ワインのようではないですか。蜜を落としたようだ。本当に美味しいです」

「ふん、子供向けの味だな」

そういつつも飲み干す男爵に悪戯な気分になる。

「では男爵もお好きなのですね」

「私を子ども扱いするか、お前は」

「美味しいものは美味しいです。あ、だめですよ、後は私がいただくんです」

ビンを取り合うようにじやれる二人を、静かに侯爵が見つめていた。珍しくオリビエの笑い声が響き、同等と化している男爵も楽しげに青年の肩を叩く。

オリビエは空腹と渴いた喉に染み入るそれが気に入って、酔いが回っていることにも気づかない。男爵が目を離れた隙に最後の一口を自分のグラスに奪う。

「リツアルト侯爵、貴方も睨んでいないで一緒にどうです。食事も宴会も、共に飲んで食べるから楽しいですよ、そうだろう？オリビエ」

「え？あ？」

不意に同意を求められ、最後の一口を取り上げられないうちに飲み干そうとしていた青年は侯爵の視線に気付いた。

「あの……」

オリビエの表情が強張る。

それを見て取って、ロントーニは背中を二回ほど叩いた。

「ほら、それ。侯爵にも」

「え……」

オリビエが自分のグラスを改めて見つめた時には侯爵の大きな手が掴み取った。

「！」

ガシャン！

床に投げつけられたそれは見事なほど細かく砕け、足元に広がった。

「あ……」

立ち上がりかけたオリビエは侯爵の表情から目がそらせない。

「男爵、そろそろお休みになってはいかがかな」

静かな侯爵の言葉はランプの炎すら凍りつかせるように思えた。

オリビエはつい、調子に乗った自分をのろった。

「仕方ありませんね、では、休むとします。侯爵閣下、オリビエ、楽しいひと時だった」

そう残して、ホスタリア・ロントーニ男爵は音楽堂を出て行った。

残されたのは静寂。

立ったまま二人は黙っている。オリビエはうつむき、侯爵は見下ろす。

それはそのまま、二人の関係を物語っていた。

7

「お前は、十六の時から私の前で笑わなくなったな」

オリビエが侯爵の前で笑わなくなったのがいつからだったか、それは本人も気付いてはいなかった。声を上げて笑う、それまでは嬉し

いことがあればそうしていた。あの頃は自由かどうかなど気にする必要もなかった。

「は、あの、そうでしたか。すみません」

謝るようなことでないのに、謝ってしまう自分をおかしいと思いつつ、記憶をたどる。

「お前が誕生日を迎えた頃からだ」

それは、あの晩。

「アンナは上機嫌でお前に新しい上着をプレゼントした」

そうあの晩。

初めて、アンナ夫人と関係を持った。

オリビエは痛いほど肩をつかまれ、乱暴に引つ張られる。侯爵はオリビエを連れて音楽堂を後にした。

向かう先はどうやら母屋。オリビエに与えられた部屋も、そこにある。

あの時、けっして自分から求めたわけではなかった。侯爵が恐ろしかったし、自分の立場を考えればしてはいけないことだと十分分かっていた。

それでも、夫人の誘惑に負けたのは、初めて酔うほどワインを飲んだからだ。

足元で不快な音をさせるガラス片と、記憶が重なる。

あの日以来、僕は侯爵の前で心から笑えないでいた。

それを侯爵も気付いている。その理由も、気付いているのだろうか。

黙り込んでついてくる青年を、部屋に押し込むと、侯爵は「明日は休暇だ、ゆっくり寝なさい」と声をかけた。

結局夕食を口にせず、ワインだけを飲んだオリビエは異様な空腹感と気持ち悪さに寝苦しい夜をすごした。二度とワインで酔うような真似はしません、この年初めにオリビエは自戒の念と共に神に誓う。

4・思想の騎士、ファリの街（前書き）

更新遅くなってごめんなさい 筆者からお知らせ。

この「音の向こうの空」が、「アルファポリス」にて、Pickupコンテンツとしてご紹介いただけることになりました 10月3日はトップページに。以降は「小説、歴史ジャンル」のトップページに掲載されます 小説の続きも読めますので是非、遊びに来てくださいね！

4・思想の騎士、ファリの街

1

結局あの晩、侯爵がなにを言いたかったのかわからないままだったが、オリビエはいつも通りの春を迎えていた。

音楽堂に昼の日差しが差し込まなくなり、庭の木々が春の盛りを過ぎ緑一色に落ち着きかける頃、オリビエはキシユのおかげで多くの曲を作り上げていた。

それらはどれも好評で、父親を知る貴族にも「父親にないものを持っている」といわせたほどだった。

五月には王立アカデミーのコンクールの噂も聞こえ始める。アカデミーは由緒ある国立学術団体で、学問、文学、歴史、芸術様々な分野の第一人者が会員となり、王国の智の源となる辞書編纂やメセナと呼ばれる学問芸術振興を担っている。年間いくつものコンクールを行い、優れた人物や作品、慈善団体に援助を与えた。

音楽のコンクールは年に数回行われたが、春の音楽栄誉賞がもっとも権威のあるものとされていた。

外国の作曲家や演奏家も参加するほどだった。その演奏会に行きたい、それはオリビエを高揚させる唯一の憧れだった。

三年前に一度だけ、侯爵夫妻の旅行のついでに連れて行ってもらったことがあった。会場はシャンフアーネであったが、エスファンテよりずっと都会で国王の御前演奏会でもあった。

生まれて初めて見る華やかな演奏会、貴族たちに圧倒され、それでも演奏が始まるとオリビエは夢中になって奏者を見つめていた。

その手が膝の上で見えない鍵盤を打つのをアンナ夫人は笑っていた。最優秀賞を受賞した作品を、滞在していたホテルで再現すると侯爵は気難しげに首を横に振った。

「お前の演奏ではない。真似をする必要はないだろう」

不興だったのだ。

以来、コンクールの話題は侯爵の不機嫌の元となり、コンクールに参加してみたいという小さな野望はオリビエの胸の中深くにしまいこまれた。

「オリビエならきつと優秀賞だね、そうしたら援助金もらって、侯爵様の犬じゃなくなるじゃない。ねえ、ランドン」

愛犬をなでながらキシュは言った。

「援助金だけで一生生活できるわけじゃないよ。侯爵様には感謝しているんだ。どうせ飼い犬なら美味しいものを食べさせてくれる飼い主がいいだろう？」

「現金で可愛くないなあ」キシュは頬を膨らめる。

オリビエの家で夕食やパンを手に入れるようになったからか、それともそういう年齢なのかキシュは初めて出合った頃よりふつくらし、頬のつやも眩しいほどになっていた。

無造作に束ねた赤毛も、きれいに結わえなおせば美しい女性に変わりそうな予感もあった。服の下に見て取れる痩せた体型も少しは丸みを帯びてきていた。

「なに？」

オリビエの視線に気付いて上目遣いの少女は、何をしたいのか胸元のボタンを一つ外す。

「そっちこそ、なんだよ、それ」

肩をすくめてオリビエが楽器に向かう。

その後姿に少女が顔をしかめて見せたのもオリビエには見えないが、わふとランドンの困ったような声に見かけほどは成長していない少女を思い、密やかに口元を緩める。

「あ。やっぱりいやらしい顔した」

気付けばすぐ脇に立つキシュ。やはり猫のようにオリビエについてきていた。

「いいや、面白いと思つてさ」
そう笑いながら笑みは音に流れる。指が奏で出せばオリビエの意識も視線も何もかもが、音楽に盗まれてしまつことをキシユは知っている。

最近は何もかけても無視されることもある。

奏でられたそれが、数日前に歌つたものだと思ひ付き、キシユも声を合わせた。

二人と一匹のリビングに、少しだけ開けられた窓の隙間から春の夜風が流れ込む。

2

その日はなぜか、いつもと違う時間に侯爵が音楽堂を訪ねてきた。もちろん彼の家だ、いつ何処に現れようと自由だが、午前のまだ朝の気配が残るうちからオリビエを尋ねるのは珍しいことだった。

濃紺のチョッキの金ボタンは丸く輝き、グレーのキュロットという姿だ。侯爵はキュロットはあまり好きでないようで、普段は身につけない。オリビエや侯爵家の母屋に出入りする雇い人は男なら皆、キュロットの着用を要求された。夫人が好きなのだ。

だから、オリビエも今日はドレープのたっぷり入ったシャツに同色のリボんタイ、チョッキは臙脂。キュロットはアイボリーにグレーの刺繍が入ったものだ。裾をリボンで結んでいる。タイツは好きではないからブーツを履いていた。

侯爵は入ってくるなり、オリビエを立たせた。

「これから、首都に向かう。お前も来るのだ」

「え、しかし」

「服は持つてこさせよう。急なことだが、先日のお茶会、王弟のロスレアン公が同席されただろう。どうやらお前の曲を気に入り、国王に進言したらしい。今朝方、国王からのお召しがあった」

国王リアン十四世。

実直な、まだ若い王だが、その王妃が遊び好きで有名だ。

宮殿では夜な夜な派手な舞踏会が開かれ、内宮貴族が集まるといいう。内宮貴族とは、領地を持たない貴族のことだ。王族に連なる血筋のものが多い。また、司教会の上層をなすものも貴族と同様の扱いを受けている。先日ここに立ち寄ったロスレアン公はそう言った種類の貴族だ。

リッツアルト侯爵のように領地を持つ貴族は、必然的に首都から離れた土地に住む。戦争が起こったりすれば、国軍をもてなす義務が課せられるなど大変なこともあるが、領地からの税を徴収する権利があるため、首都に住む内宮貴族よりは実情は裕福なのだ。

首都に住む貴族は、地方貴族を田舎者と侮蔑する傾向があり、よほどのことがない限り、侯爵も好んで首都に赴くことはなかった。

年に数回。アンナ夫人にせがまれて、買い物に出るくらいだろう。まだ、オリビエは首都フアリに行ったことがなかった。

「あの、演奏会が開かれるのですか？」

侯爵は渋い表情をする。

いつもの、出し惜しみ、というものだ。

「お前は、向こうに着いたら病気になるれ」

「え、あの」それなら行かなくても。

「王のご命令には従って連れて行っただが、体調不良で演奏は出来ない。よいか、そうするのだ」

「はい」

それはそれでいい。貴族たちが大勢集まる宮殿など想像できない世界だし、その上国王にお目通りなど、緊張するばかりだ。

侯爵の指示を受け、形ばかりだが譜面を用意しているところに、メイドが衣装をいくつか持ってきた。

丈夫なトランクにそれらを詰め込みながら、オリビエはため息をつ

く。

衣装にしみこんだバラの香り。これは、アンナ夫人が用意したのだと分かる。

「素敵な衣装ですね、オリビエ様」

メイドの一人が羨ましそうに絹のシャツをたたむ。

「そうかな、ちよつと派手だよ」

「あら、アンナ様がものすごく張り切っていていらつしゃって。これでは足りないから向こうで新調なさると聞きましたよ」

「え、そんなに長期間なのかな。参ったな、聞いてない」

「あら、何かご予定でも？」

キシュに何も言っていない。

「悪いんだけど、僕の家に来ているシューレンさんに、伝言を頼めないかな」

「いいですよ。午後に街に出る予定ですし。久しぶりに彼女にも会いたいわ」

オリビエはシューレンに当てた手紙に、キシュが尋ねてきたら、急な旅行のことを伝えてほしいとしたためた。

また、彼女が遊びに来たら、仕事の邪魔にならない程度に相手をしてやって欲しいと付け加える。

世話好きなシューレンさんなら、キシュも機嫌を損ねることはないだろう。

四頭立ての馬車を二つ。馬に乗った従者が十人。

オリビエは侯爵の腹心で、この街の市長をしている人物と同じ馬車に乗ることになった。時々茶会で顔を合わせ挨拶する程度で、あまり話したことはなかった。

でっぷりとした腹を金ボタンの朱色のチョッキの下に蓄えたルグラ
ン市長は、薄くなつた頭部をかきながら愛想の良い笑顔を浮かべた。

彼が身じろぐたびに馬車の座席は小さく鳥のような鳴き声をあげた。オリビエは形だけの貴族の称号をもらっている。ただ単に、「租税を払わなくて良い特権」を得るための称号で、それは侯爵が両親を亡くしたオリビエのために用立ててくれたものだ。どうやって国王の許可を受けたのか経緯は分からなかった。正式には、オリビエヌ・ド・ファンテルである。オリビエは街の人々からは「ファンテル卿」と呼ばれていた。

「ファリ紀行には良い天候ですな、ファンテル卿」
だからルグラン市長もオリビエをそう呼ぶ。

「はい。突然のことで、まだ実感がわかないのですが。ルグランさんは何度かファリには行かれたんでしょう」

そこで、市長は眉を上げ、自慢げに鼻の下の髭を伸ばした。

「ファンテル卿は首都は初めてですか」

「え、ええ。旅行はあまり」

旅行と言っても常に侯爵のお供だ。

自分のために街を離れたことなどなかった。

「では、驚かれますよ。このエスファンテが東の果ての田舎町だという意味が分かりますよ。ファリでは市民はみな、五階建てのアパルトメントに住んでいるんですよ」

「ご、五階!？」

侯爵の城も、数えればそれくらいはあるのかもしれないが、平民の住む家がそんな高さだとは想像もつかない。エスファンテの市の中心部、市庁舎でも三階建て。レンガを積んだそれはオリビエが見たことのある立派な建物の中で五本の指に入る。

「この街じゃ届く新聞は一つですがね、かの首都では十を超える新聞が発行されているといいますよ。今回呼んで下さったロスレアン公は、平民のために建物を借り上げ解放していますよ。一階はカフェになっていましてね。そこで弁護士やら司祭やら、はたまた女ま

で政治や思想を語るそうですよ。今じゃ、新しい話を聞きたいのならそのカフェ【エスカル】へ行けと言われるほんです」

新聞や政治の話はオリビエには遠い世界だった。メイドたちの噂や、茶会の席の客たちの会話からちらちらとうかがい知る程度で、あまり興味もなかった。

「そうですか」

オリビエの感想がそれだけと知るとルグラン市長はうつすら笑って被っていた帽子を取った。

「失礼、今朝早かったのですね」

帽子を顔にかぶせ、眠ってしまった。

政治や思想。

自分とはもつとも無縁なものに聞こえる。

オリビエもまた揺れる窓に肩を預け、眼を閉じた。

3

この国には二つの権力がある。
教会と貴族だ。

そしてその頂点に国王がいる。

数百年前に当時の国王が神に似た存在であると自分を位置づけてから、国王を頂点とした身分制度が確立された。大まかに身分制度を説明すれば、国王のすぐ下に司教会に属する司教たち、そして貴族。その下には平民と農民がある。

司教とは貴族の家系から聖職者になったもののことで、同じ聖職者でも司祭は平民と同じ扱いであった。扱いの違いの主なものは、「租税を納めなくて良い特権」があることや、「領地を持つ特権、そ

の領地から租税を徴収する特権」などだ。細かいものになれば、帯剣の特権、家紋の特権、風見鶏の特権、狩猟の特権などもある。人々は教会からの租税と、領主からの税、そして国税。三十の苦役を担っていた。

これらは小作農民や貧しい町民にとって重圧であつた。

このところ発展してきた工業を経営する商人、弁護士や医師など、平民でありながら下級の貴族より資産を蓄えるようなものも現れていた。彼らはブルジョアと呼ばれ、下級貴族から特権を購入する裕福なものさえいた。

宮廷はここ数年、新大陸の独立戦争へ派兵したり隣国と競って新たな港を建造したりするなど浪費が続き、国庫は破綻しかけていた。その上、去年は酷い干ばつで、農村では餓死者も多いという。

オリビエは噂と今日の前に見える農村の風景を比較していた。

昼下がりの黄色い日差しの下、麦畑は緑色の穂を揺らした。人気のない田舎道。道の脇で牛を引いた老人が一人、オリビエたちの一行が通り過ぎるのをじっと待っている。その小さな姿はすぐに流れ去っていく。

東にはアウスタリア国の高い山々が真つ白い峰をそびえ立たせている。

このエスファンテ市は平地が多く、穏やかな気候と綺麗な水がある。昨年の干ばつでも侯爵が広い領地から徴収した麦の一部を村々の教会に分け、農民に配給された。

各地で起こっているという農民一揆の噂も身近ではない。思想家が集会を開くような街でもない。遠い首都で始まろうとしている、議会のことなど知るはずもなかった。

「ああ、すごい！」

何度目かのオリビエのため息にルグラン市長は髭を揺らして苦笑いする。

「ファンテル卿、子どものようですね」

「あ、でも、見たことないですよ、こんな美しい建物があるなんて！ やっぱリファリはすごいな」

オリビエは馬車が駆け抜ける町並みに感動していた。道が石畳になったときには驚きと共にその振動に閉口していた。それでもファリに近づくにつれ増えていくアパルトメントや豪華な飾りのついた聖堂、赤く塗られた酒場の扉にも感心する。

通りでは馬車が群を成してすれ違う。そんな光景は見たことがなかった。

そして今、招待されたロスレアン公の屋敷で馬車を降りてオリビエはもう一度。すごい、を口にしたのだ。

「オリビエ、疲れたわ、手を引いてちょうだい」

アンナ夫人の声が響くとルグラン市長は下卑た笑いを浮かべ、肩をすくめる。そそくさとオリビエのそばから離れて馬車から荷物を降ろしている下男に声をかけていた。

侯爵はとそちらを伺えば、婦人のよき夫である侯爵は丁度ロスレアン公の執事の挨拶を受けているところだった。すでにこちらに背を向け、侍従長のビクトールを従えて案内に従って母屋の正面へと歩き出している。通常ならその隣に夫人も寄り添わなくてはならないのでは。婦人もそれに気付いたらしく、立ち止まるとオレンジのドレスを翻す。

が、彼女の視線は高く。

壮麗な母屋の建物を見上げていた。

空にそびえるような尖塔を持つ華やかな様式の古い建物は、白い壁に新緑の蔭をまとい、風に揺れるそれらは建物が息をしているよう

に見せた。昔のバジリカだというそこには、聖なる十字が高く掲げられているが、さび付いたそれに白い鳩が胸を膨らませてたたずんでいる。

4・思想の騎士、ファリの街2

4

現国王の弟に当たるロスレアン公は、ファリの中心街に本宅を持ち、そこを商業用のアーケードに改築して商人たちに貸し出していた。今ではファリでもっとも有名な【ファレ・ロワイヤル】だ。

そこが、ルグラン市長が言っていた有名なカフェ【エスカル】がある場所になる。ロスレアン公の私有地内であるために警察の目も届かず、カフェでは宮廷を批判するような過激な集会も見過ごされている。もうすぐ三部会が開かれるために共和主義者たちの行動は過熱していた。

遠方からの客人を迎えるにあたり、ロスレアン公の計らいでその騒々しい市街の本宅ではなく、少し離れた郊外のこの別邸を選択したのはそういう理由も想像できた。

アンナ夫人が有名な【ファレ・ロワイヤル】に滞在できなかったことを残念がっていたのをオリビエはふと思い出した。

オリビエは自分の荷物、楽譜の入ったスーツケースを下男から受け取ろうとしていた。

「オリビエ」

いつの間にかそばに来ていた夫人に後ろから腕を回され、受け取り損ねたスーツケースが派手に落ちる。

ガタン！

「きゃ」

「あ、アンナ様……！」

衝撃で口をあけたそれから、幾枚かの楽譜がこぼれた。

「失礼しました、アンナ様、お怪我は」

「大丈夫よ、オリビエ。ジャック、お前が注意しないからいけない

のよ！危ないわね！」

下男に八つ当たりする夫人を横目に、オリビエは大切な楽譜を拾い集める。

ふわりと風が吹き、一枚が馬の足元に。

「危ない！」

手を伸ばそうとした目の前に誰かが立ちふさがり、オリビエは顔を上げる。

痩せた鼻筋の通った美青年で、二十五歳くらいだろうか。真っ白な軍人風の上着と金糸で飾られたブルーのチョッキを身につけている。黒い膝下までのブーツときらびやかな赤い房飾りのついた剣を腰につけている。あでやかな金髪がその姿をいつそう際立たせていた。

「危ないよ、君。馬に蹴られたら大変だろう」

「あ、はい。すみません」

背後で夫人はまだ御者と下男に当り散らしている。

甲高い声と馬の鼻息。侯爵の近衛兵がざわざわと乱す中、オリビエは目の前の男をじっと見上げていた。

匂い立つような上品さ、声の調子も笑顔を彩る白い歯も。都会の間とはこういうものなのかと見とれていた。

「私はエリー。王妃つき近衛連隊に所属している」

「あ、初めまして。私はオリビエ。リッツァルト侯爵の楽士です」

差し出された手に、支えられていることに気づいて慌てて手を離れた。

「なんだ、まだ子どもじゃないか」エリーという騎士の背後から、背の高い男が覗き込んだ。

「マルソー、失礼だろう。お若いとはいえ、立派な楽士だ」

そうたしなめながらも、エリーも口元が面白そうに笑っていた。

「はいはい。音楽などよく分かりませんでね、隊長殿。ほら、これ」マルソーと呼ばれた男は先ほどの一枚をオリビエに差し出した。

礼を言っ受ける。二人は「演奏を楽しみにしている」とオリビ

工に笑いかけ、それぞれの馬にまたがった。
緑の芝の美しい庭に、二頭の馬と騎士が小さくなっていく。
競争する楽しげな笑い声が流れて消えた。

午後には侯爵はロスレアン公と共に王宮へ向かった。

広い屋敷に残されたオリビエや従者たちは思い思いの時間を過ごしていた。オリビエは庭を散歩しようかと思ったが、尖がった鼻の庭師に邪魔だと言われ仕方なく屋敷の広間に入り込んだ。夜のために大勢のメイドたちが準備をしていた。今夜はここで晩餐会。数曲を披露する。そして、明日には王宮の夜会に出かける。

広間の片隅に置かれたフォルテピアノ。新しい楽器だ。

そつと近づくと、鍵盤に触れてみた。

重い。

けれど深く響く強い音。

少し周囲を見回す。メイドたちは田舎者の青年など気にもしないように花を飾りテーブルクロスをかけていく。

オリビエはそつと小さな椅子に座り、鍵盤に手を置いてみる。冷たい感触。一つ一つが指に跳ね返るような弾力。音も跳ねる。

ここでは何もかもが日常と違う。初めて牧場に駆け出す子馬のように、柔らかな美しい牧草を踏みしめ感動する。芳しい香り、日差し、細い足に小さな蹄。

白い子馬はタンポポに鼻を近づけ、小さくかじる。

苦い、でも面白い。

ゆらりと揺らした尻尾に何かが絡む。風か、蝶か。

蝶。白い蝶。それを追いかけて、駆け出して。

そして、どこまでも続くと思われた牧場には。

柵が。

そこで、オリビエの手は停まった。

はあ、と誰かのため息で我に帰る。

見回すと、メイドも侍従たちも、じっと聞き入っていた。

「素晴らしかった」

彼らの中、一際華やかな金髪の騎士と黒髪の男。遠乗りから戻ってきたのか、乗馬用の鞭を脇に挟んでいた。

「惜しいところで終わってしまったように感じたが」

オリビエが立ち上がると観客たちは拍手をし、深くお辞儀を返した奏者に二人の騎士が話しかけたところで波が引くようにそれぞれの仕事に戻っていった。

「俺には力強く感じたけどな」

マルソーと呼ばれた男はぽんぽんとオリビエの肩を叩く。

「丁度、茶でももらおうと思っていたところだ、お前も一緒にどうだ」

庭に出された小さなテーブルを囲んで三人が座る。エリーが頼んでいたのか、メイドがポットに入れた熱い茶を運んできた。

その脇に見知った菓子姿を見つけて、オリビエは数回余計に瞬きをする。キシユのために焼いてもらったものだ。

すかさず「食べろよ」とマルソーに笑われた。

「いえ、そういうわけでは…」

「ここの料理はどれも美味い。さすがロスレアン公だ。身の回りに置くもののセンスがいい。君を呼んだのも分かるね。君の音楽は自由な思想を感じる」

「また思想の話か、エリー」

「そういうが、結局お前が一番熱く語るんだろう？マルソー。たまにしつこいから、カフェにでも押しやってやりたいと思う」

カフェ、とはルグラン市長が言っていた有名なカフェのことだろうか。

「随分だな、俺はブルジョアたちとは違うさ。あんな口だけの奴ら、外国の思想を持ち込んであたかも自分の言葉のように語ってみせる。新しい情報や、貴族と国王の悪口を並べ立てる。気分のいいものじゃないさ」

「どちらにしろ、犠牲を払うのは貧しいものだな」

「ああ」

二人そろって同じタイミングでカップを口に運ぶのを、オリビエはじつと見ていた。

思想。

思想のことはよく分からないが、彼ら二人が何か同じことを考え、意見を共にしている同志なのだと分かった。

それが少し羨ましいとも感じた。

ふと、エリーと目があった。

美しい騎士は組んでいた足をさらりと組みかえる。

「どうした？君は政治や思想に興味はないのかな」

二人の期待を感じて、オリビエは戸惑った。

膝の上におかれたままの手を握り締めた。

「あ、はい。あまり、あの。世の中のことを知らなくて」

明らかに不興を買ったようだった。

エリーはつまらなそうに小さく首をかしげ、再び目の前の同志を見る。マルソーは哀れみすら浮かべ「ま、やっぱ子どもってことか」と笑った。

「どうなっていると思う」

エリーはマルソーに話しかけ、マルソーもその言葉に表情を引き締めた。

「王も大胆なことをなさった。三部会など。まとまるはずもないだろう。また、ブルジョアたちはうまい事をしたさ。人数が倍となつては、僧侶たちの動き次第になってしまった」

「なんだ、お前はどこの味方だ」エリーは笑う。

「さて、俺はこの国の味方さ」

肩をすくめ茶を飲み干すマルソー。二人はひどく大人で、立派に見えた。

5

オリビエは黙って、意味の分からない二人の会話を聞いていた。

三部会。もちろん、噂は聞いたことがあった。新しい徴税制度の審議のために貴族、僧侶、平民の三つの身分から代表が選出され議會を開くのだという。

だが、議員を選ぶ選挙には参加できなかったし、また、それに関わることを侯爵はひどく嫌った。

「お前の仕えるリツアルト侯爵も議員の一人だろう？」

不意にマルソーに話しかけられ、オリビエはびくつと顔を上げた。いつの間にか、うつむいて小さくなっていたらしい。

く、とエリーが笑う。金の髪と彫像のような顔が西日に眩しくて、オリビエは何度も瞬きした。

「おい、口が利けなくなったのか」

「あ、いいえ。侯爵はその、三部会のお話はお嫌いです」

侯爵が議員だとは知らなかった。

知らなかったという事実を伝えれば、さらに二人に馬鹿にされる。そう思うと、口は重くなり中途半端な説明で終わる。

「ふうん、あの人もロスレアン公と親しいからね。侯爵は貴族身分の議員だ。平民に同調すれば議決を左右する鍵になりうるな。分かっているここに招くロスレアン公も、なかなか」

エリーは面白そうに顎に手を当てた。

「ロスレアン公が議会と平民を利用して王位を狙う、という説もあながち間違っていないだろうさ。リツアルト侯爵も堅い人だからな、そうそう自分の思想を明かすはずもないか。で、オリビエ」

「あ、はい」

マルソーはオリビエの目の前の皿から、菓子を一つつまむと口に放り込む。

「お前、いくつだ」

「あの、十八です」

マルソーはぶつ、とむせた。

「なにか、おかしいですか」

さすがにそれは失礼だろうと思う。

政治のこととも思想のこととも分らないが、そこまで馬鹿にされる必要もない。

「失礼します」

立ち上がると、オリビエは一礼した。

まだ、マルソーは笑い続けていた。

エリーはただ黙ってオリビエの後姿を眺めていた。

悔しい。

世間知らず。自分がこれほど不甲斐なく感じたことはなかった。

一人になれる場所がわからず、離れの中を歩き回っているうちにアンナ夫人と出くわした。

真つ赤な唇が嬉しそうにほころぶ。

「オリビエ、あら、どうしたの。不機嫌ね」

「は、いえ。あの」

夫人はきよとんとした。

「あの、有名な喫茶店。エスカルでしたか。そこに行ってみたいのです」

とたんに目を輝かせ、夫人は薔薇の香水を匂わせたまま青年に張り付いた。

「楽しそう！噂に聞いたことがあるわ！」

夫人は退屈しのぎに買い物にでも考えていた。青年を連れて行けば二人きりで楽しい時間を過ごせるというもの。有名な「ファレ・ロワイヤル」には商店もそろっている。

「あの、私一人で、行きます」

オリビエは慌てた。言葉が足りなかった。まるで婦人を誘ったような格好になった。それはまずい。

「あら、それは許されなくてよ」

アンナ夫人は少女のように口を尖らせて見せる。上機嫌なのだ。

「危険かもしれませんし」

オリビエがいつになく力強い口調で否定しようとするが、夫人には逆効果だ。

「あら、心配してくれるの。優しいわね」

返って嬉しそうだ。

アネリアの一件以来、オリビエは夫人を避けていた。屋敷で遠めに夫人を認めてもそばに近づこうとはしなかった。婦人もそれを感じ取っていたのか、以前ほど執拗にまとわりついたりしなかった。二人の間にはこのファリのように真ん中を川が流れ、互いに向こう岸の相手の存在に気付いていながら、渡ろうとはしていなかった。夫人は川にかかる橋を見つけたのだ。

気まぐれな思い付きだろうが、橋は橋。当然夫人は渡ろうとする。

しかもこの橋は、オリビエがかけてくれたのだ。

夫人はお気に入りのオリビエを飾り立て連れ歩く喜びを脳裏に描いていた。

オリビエの首に両腕を回し、キスをせがむ。

オリビエは顔をそらした。

「オリビエ？」

「奥様は約束を破られました」

「あら、何のこと？」

「…アネリアは、まだ北の牧場にいますか」
夫人の顔色が変わった。

「誰のこと？ そんな子はいないわ。あ、そうね、もう一年も前に一人修道女になるとかで出て行った子がいたわね。アネリア、そんな名前だったかしら」

「！」

追い出されたのか！

驚いた様子のオリビエに夫人の怒りはさらに増す。

「オリビエ、何を引きずっているのかしら。お前の役割は分かっているんでしょう？ 子供だったお前を引き取って世話をし、ここまで育てたのは侯爵様よ。はむかえる立場じゃないでしょう？ よくよく、自分の立場を理解するのね。私はお前の指を切り落とすことも出来るのよ。そうなったら、お前に何が残るのかしらね」

オリビエは夫人を突き放した。

よろけつつもぎろりと睨むその顔は獣が牙を向く前に似ている。

「いいこと。お前は私のもの。侯爵様に音楽をかなで、私にキスをする。態度を改めるなら楽器が弾けなくなっても下男くらいにはしてあげるわ。お前に音楽以外で出来ることはそのくらいでしょう？」

駆け出した。

待ちなさい、と叫ぶ声も、もうどうでもよかった。

そのままそこにいたら、きっと夫人を殴っている。

生まれてから一度も、誰かを殴るなどした事はない。死ぬほど憎ん

だこともない。けれど、目の前にいる赤いドレスの女だけは、その生まれて初めてになりそうだった。

6

叫ぶ夫人。

何度もぐるぐると屋敷内を走り、庭に飛び出すと門を探した。繁った木々を抜ける。

美しい庭に降り注ぐ昼下がりの陽光。幸せだったアネリアとの時間を髣髴とさせる。横目に見ながらまたどこかの貴族が到着した様子の正門にたどり着いた。

到着したばかりの馬車の脇を抜け、門にたどり着くが二人の男が立ちふさがった。

「通してくれ！僕は外に出る。少し、出かけるだけだから、だから！」

傍らで馬車の主らしき太った貴族が憐れみの声を上げている。

オリビエは二人の間を抜けようとするが、腕と肩をつかまれて身動きが取れなくなる。

「どうか、落ち着いてください」

衛兵は青年をなだめようと、肩に手を置く。

背後から侯爵家の従者長ビクトールが駆け寄ってきた。

「オリビエ様！どうか、お待ちを！」

「捕まえて縛り付けておしまい！命令よ、身動きできないようにして私の前に引きずってきなさい」

侍従長の後から夫人の怒鳴る声が聞こえた。

まあ、と呆れたように客人の奥さんだろっう女性が口を覆った。

侍従長のビクトールが、どうか落ち着いてください、あなたのお気

持ちは分かりますから、と背後から抱きとめる。

拳を握りしめ小さく震えるオリビエに同情の視線を向け、ビクトールの荒れた手がオリビエの手を覆った。

そのがさがさとした感触がアネリアを思い出させた。

「お前も、知っていたんだらう？アネリアのこと…私をだましたのか？」

「！申し訳ありません、あの時はそうするしか」

「耐えられない、私は」

ビクトールを突き放そうとした時、肩をポンと叩かれた。

痛いほどのそれに振り向くと、黒髪の騎士マルソーだった。

「なんだ、ここでも拗ねてるのか」

「！そんな、私は」

「ビクトール殿、少しお借りしますよ、散歩のお供にね」

マルソーは強引にオリビエを引き、そばにいた自分の馬にまたがった。

「ほら」

「…あの」

後ろに乗れということだろうが、オリビエには経験がない。

「急がないとご夫人に縛られるぞ」

戸惑いを見せる青年にマルソーは手を伸ばして強引に引き上げた。

ちよūd駆けつけた夫人に「しばしお借りします」と爽やかに笑いかけて見せるのも忘れていない。

4・思想の騎士、ファリの街3

7

生まれて初めて跨った馬は想像以上に不安定で揺れた。そのうち、マルソーが肩を揺らして笑い出した。

「お前、女みたいにしがみつくなよ」

「！」

思わず手を離し、落ちそうになってまたしがみついた。

余計に男が笑った。

馬はいつの間にかゆっくり歩き、オリビエはファリの街の眺めを見る余裕が出来たことに気付く。

「お前、男の癖に馬は初めてか」

「はい。侯爵に禁止されています」

「は？」

「乗馬と、剣術を」

「あきれるな。どこのお嬢様だよ」

そういわれても。

返す言葉が見つからず、マルソーの足が鎧の上で静かに揺れるのを見つめていた。

「もう、戻りたくない」

聞こえなかったのか、マルソーの反応はない。

ルグラン市長が言っていたとおり、五階建ての建物が通りを護るように並ぶ。窓辺には花が飾られ、よい戸の白が眩しい。建物の隙間からのぞく細長い空が、少しばかり黄色く見える。夕方が近づいていた。

今夜、晩餐会で演奏する約束。

それは、本当に演奏するのか、侯爵の言っていた仮病で止めるものなのか。

どちらともつかない。

いいや。

オリビエは首を横に振った。

自分で決める。

演奏は、しない。

マルソーが馬を止めたところは、当然見知らぬ街角だ。通りに面した店の軒下には、真つ赤な木の椅子とテーブルがいくつか並ぶ。街の人たちがくつろぎ、コーヒーを飲んでいた。貴族風の人もいれば、僧侶らしき人もいる。

鋳物の看板には、「エスカル」と掲げられていた。

マルソーはにやりと笑いかけ、オリビエを中に連れて行く。

マルソーの知り合いらしい数人が声をかけ、男は愛想よくそれに応えた。

「なんだ、今日はまた若いのを連れてきたな。お前の部下か」

でつぶりとした店長らしき男が黒いエプロンで手を拭きながらオリビエに笑いかける。

「こんにちは」

青年の挨拶に男はリンゴのような頬をにっこりとさせ、パイでも食べるかいと皿を差し出してくれた。

マルソーと並んでカウンターに座ると、オリビエは落ち着かず周囲を眺めた。

思った以上に広い店内。硝子のはまった南面の窓から傾いた日差しが差し込む。日陰になった場所では黒い背広姿の数人の男たちがテ

ーブルを囲んで何か話し込んでいる。

カウンターの右隣でも、二人の男が真剣に何かを話していた。二人の手には新聞らしきものが握られていた。

「ほら、冷めるぞ」

マルソーに背を叩かれ、目の前に飲み物が出されていることに気付く。

「あ、はい。あの、僕何も持っていないんです」

マルソーが変な顔をした。

「現金を、持ったことがなくて」

「は？」

男の黒い瞳が丸く開かれるのを、オリビエは頬が熱くなるのを感じながら見上げた。

「すみません。両親がなくなってから、すべて侯爵に預けてあつて、それでも不自由しなかったので」

「あー」

マルソーの手がガシガシとオリビエの頭をなでた。

「わかったぞ、お前。そうか。おい、ベッツ親父、こいつに乾杯だ。今日、こいつは人間になった！」

「え？」

「なんだそりゃ、マルソー」

カウンターの向こうで店主が笑った。

「侯爵家の飼い犬だったのさ、それが今日、初めて飼い主に噛み付いた！記念すべき日だ」

「か、噛み付くなんて」

マルソーの大声に、慌てて止めようとするが、あちこちから笑い声とおめでとう、という声が聞こえる。

振り向けば、大勢の客たちと目があった。

「ぼうや、晴れて野良犬かい？」

誰かが言うと、皆が笑った。

「いいぞ、自由は！」

自由に乾杯！とどこかでまた声が上がり、皆いつせいに杯を掲げた。
「自由に！」

叫んだ一人が熱く何か政治の話を語りだし、そのテーブルに立った男を皆がじつと見つめる。話に聞き入る。

「自由とは、生まれながらにして誰もが持つ高貴なる権利！」

そうだろう！と男が同意を求めれば、店内の客が皆、そうだ、そうだと沸き立った。

酒を飲んでいゝるわけでもないのに、オリビエの頬は熱く火照った。

マルソーに肩を押され、再びカウンターの椅子に座ると、腹にたまつた熱いため息を吐き出した。

「いいのか」

マルソーがにやりと笑ってみせる。男はいつの間にか煙草をくわえていた。

思わず煙を吸い込んでむせ、オリビエは自分が乗せたくせにと眉をしかめた。

8

「このまま、オリビエ。お前が戻らなければ、侯爵はどうするんだろうな。今夜はともかく、明日は王宮でのお披露目だ」

そこまで知っていて、マルソーはオリビエをここに誘ったのだ。

ロスレアン公は侯爵と友人だ、今夜くらいは大目に見てもらえるだろう。けれど、宮廷はどうだろう。国王の謁見、さらに御前での演奏を許したのだ。普通なら断るものなどいはいはずで。それを断れば侯爵も何かしら咎があるかもしれない。ぞくりと、オリビエはこわばった。

侯爵が言っていた、仮病作戦は本気だったのかどうか。それも分からない。

青年がキツシュをフォークに乗せたまま忘れてゐるのをマルソーは

目を細めて見ていた。オリビエの決意を、試そうというのか。公爵夫人の手から逃れたいと願った青年の決意がどれほどのものか。その自由のために何を代償にできるのかを。

「二度と、楽器を弾くことは出来ないかもな」

マルソーは意地悪く笑って見せた。

「……」

オリビエは口を固く結んだ。ここで挫けたらさぞかし馬鹿にされるのだろう。思想もない、世間も知らない。十八の癖に自分の意見も持たず、自分で自分の行動も決められない。情けない男。

エリーが白けた様子で眺めていたのを思い出す。

話にもならない。

そう、決め付けられた。

僕は。

小さな振動が目の中のグラスの水を揺らした。

オリビエの指先が小さくテーブルをたたき、見えない鍵盤を探しているのを、マルソーが気付いた。

「オルガンならあそこにあるぞ」

オリビエは気付いて、慌てて拳を握り締める。音になろうとする思いを握りつぶす。

目をつぶって首を横に振る。

「……おかしな奴だな」

マルソーは目の前の酒を一気に飲み干した。

ついでにオリビエの目の前のパイをしつかり口に突っ込んだ。

「新聞記者は記事を書いて主張する。弁護士は言葉を操る。俺は口ではない、行動として思想を護る。お前は音なんだろう？音で自分を語るんだろう。それを否定してどうする」

「音楽を続けるには、侯爵様の庇護が必要です」
それが現実だ。

「…ふざけるな」
マルソーの口調が低く不穏なものに変わる。それでも、オリビエにはそれしかない。

「僕には、音楽以外何も無い。家も土地も、この服も、すべて侯爵様のものです。…いいえ、僕の音楽もすべて。…侯爵様の、もの」
「お前、バカか！歌おうとすれば誰でもいつでも歌える！語りたければ口を開く。自由になりたければ立ち上げられよ。自分に足があることすら忘れたというのか？」

オリビエは唇を咬んだ。
臆病なんだ、僕は。

何よりも、この手が鍵盤を弾けなくなるのが怖い。
両親が僕に残してくれたこの手が。

「立つてみるよ、おい」
すでに立ち上がって激昂している男が、強引にオリビエを立ち上げさせた。

周囲も珍しいマルソーの怒鳴り声に会話を止め、二人を見守っていた。店主が、小さくマルソーさん、となだめるが。

「もう一度言ってみるよ！お前。お前の音楽すら、侯爵のものだつてのか！ええ？」

オリビエはどうしていいのかわからなかった。

ひどい騒音のようなマルソーの口調に耳を塞ぎたかった。

頭のどこかで、あの時演奏した両親へのレクイエムが静かに流れる。

「何とか言えよ！」

オリビエの細い白い顔がうつむくと、余計に小さく見えた。

「おい、マルソー、子ども相手に熱くなるなよ」

同じカウンターにいた男が助け舟を出す。

「子どもじゃないぜ、こいつ十八なんだぞ！十八年も生きて、何を学んできたんだ！」

船は明らかに転覆した。

十八か、と驚く周囲のざわめき。

波間でオリビエはさまよっていた。

「どうしろと」

「なんだ？」

「僕に、どうしろというんですか！僕：は、音楽を続けたいんだ！自由じゃない、恋人だつてなくした、それでも、音楽だけはなくしたくない！」

「じゃあ、音楽はお前のものだろうが！」

どんと、背中を押され、オリビエはよろめいて近くのテーブルに手をついた。

「ほら、弾いて見せろよ！お前の音楽だろ？それすら侯爵のもんだなんて言うな！お前にはお前の生き方があるだろう！音楽のために何もかも犠牲にするならそうすればいい！だがな、それすら自分から捨てるようなら、生きてる意味なんかないだろうが！思想がなくなつてな、世間知らずでもな。それでもお前には音楽があるんだろ！胸張つてろよ！だからエリーが呆れるんだろうが！」

オリビエは睨み返した。

だまって、店の隅においてあつたオルガンに向かう。

小さな、古ぼけたオルガン。

それでも、木の鍵盤に手を置けば、自然と指が動き出した。たった五オクターブしか並んでいない鍵盤。限られた数の音。

だがそれは男たちに見たこともない景色を見せた。

ほんの数分だった。しかし、自由を見た気がしたと誰かが言った。手に取ったことも、心から勝ち取った経験もない自由を希う。力強い勇気をもらったと誰かが語った。

この店が、これほど静まり返ったことはかつてなかった。同時にこれほど一つになったこともなかったと、この夜の出来事はそう語り継がれることになった。

また、是非きてくれと何度も店主に言われ、オリビエは複雑な面持ちで店を後にした。

演奏を聴いて以来、黙っていたマルソーは、オリビエを馬に乗せた。

「…あの」

僕はどうすればいいのだろう。

「お前、侯爵に頭を下げる。俺も、協力してやる」

「え？」

先ほどまで、自由になるべきだと叫んでいたマルソーだった。

あれほど、侯爵に縛られるオリビエに怒鳴りつけたのに。

「どういう、ことですか」

「…聞いて、理解した」

「何がですか」

しばらく、考えて。黒髪をぼりぼりと搔くと、マルソーは「はあ」と息を一つ吐いた。

「悪かった。お前の音楽な。価値があるんだ」

「…」

「侯爵が、お前を抱え込みたい気持ちがかつちまった。宝物みた

いなもんなんだ。だから、侯爵はお前を護り続けるだろうし、お前から音楽を取り上げるようなこともしない。独り占めしたい気持ちがさ。分かっちゃった」

オリビエはなんとなく納得できず、黙り込んだ。

「音楽は絵とは違う。画家がいなくても絵画は残る。けど、お前の音はお前しか奏でられない。いつでもお前がいなくちゃ聞けないんだ。だから怪我なんかさせない。そのために乗馬も禁じるさ。その侯爵の気持ちがかかっちゃった。幸せだろうな。侯爵は」

「意味が分かりません」

「自分のためだけにお前の音を聞けるんだ。これほど贅沢で、幸せなことはないだろう。出し惜しみの侯爵。だろうな。お前が王宮で演奏すれば、間違いなく国王が欲するだろう。演奏させるはずがない」

「！」

「だろう？」

オリビエはうなずいた。

「病気になる、言われています」

「くっくっ」

面白そうにマルソーは笑った。

「あのリツアルト侯爵が。どうせ仏頂面でニコリともせずと言っただろう。お前は病気になる、と」

「ええ」

「お前、見失うなよ」

酔っているのかマルソーの言葉はあちこちに跳ね回る。つじつまが合っているのかいないのかもよく分からなくなる。

「だから、意味が分かりませんよ。マルソーさん」

「お前にとって何が大切か、だよ。これからの時代。侯爵をはじめとする貴族は大変だぞ。時代は変わりつつある。今のままじゃ行かない。みんな、時代の勝者になろうと懸命なんだ。だから、あの店にもいろんな奴らがいただろう。皆怖いんだよ。少し前に、新大陸

で母国から独立して一つの国が興った。新しい考え方なんだ。国民のための国、政治。その考えに感化されて皆自分に都合のいい未来を思い描いている。今の国のあり方じゃ、皆が飢え死にさ。だから変わらざるをえない。変わったときに、自分がどうなるのか皆分らない。怖いのだ。自分が今いる場所が、地位が、安全とは限らない。いつ沈むか分からない船の中で、走り回るネズミにおびえているんだ」

オリビエは黙って聞いていた。

二年前にこの国が派兵した、新大陸の独立戦争。そこで人々が勝ち取ったのは、自分たちの国を作る権利。生きる自由。

その思想が、この国を含め周辺の国々に及ぼした影響は大きかった。

「いいか、オリビエ。改革をうたう輩が必ずしも成功するわけじゃない。金持ちや貴族が必ずしも幸せじゃないようにな。お前は、一つ大切なものがある。それはお前にとっても宝物だ。それがあればお前は幸せなんだ。それは素晴らしいことなんだ。分かるか？お前は、いつでも自分の音楽を続けられることに精一杯努力すればいいんだ。政治に加わる必要なんかない。思想をもつ必要もない。お前は一つの宝を大切にするんだ」

「マルソーさん……」

「お前の曲を聴いて、俺はそのことに気付いた。自由が幸せなんじゃない。第三身分（平民）の議員連中は皆自由こそが幸せの近道だ何て抜かすが。違うんだ。なあ、そうだろう？そんなものにも影響されない。お前の音楽はそんなこと関係ないんだ。そうだろう。そういう生き方、そういう幸せもあるんだ。俺は、感動した。お前は俺に新しい考え方を教えてくれた」

「マルソーさん」

「お前の生き方そのものが、どこに出しても引けを取らない立派な思想なんだ」

わけが分からないが、とにかく、何か認めてもらったようだ。

オリビエは暖かい男の背にしがみついていた。

マルソーはもう、それを女のようにだとは笑わなかった。

市街から河を一つ隔てた高台の土地にロスレアン公の城がある。大きな共同住宅が立ち並ぶ町を抜け、暗い中にもガス灯が並ぶ川岸を眺める。川面に青白い蛍のようなそれがはかなく揺れる。湿った空気にオリビエは少しばかり身震いした。

4・思想の騎士、ファリの街3（後書き）

この小説は、「アルファポリス」のコンテンツに参加しています
応援のクリックをいただけると嬉しいですよ

5 切り取られた空（前書き）

オリビエの生き方は一つの思想だ、マルソーは熱く語る…。

遅くなりましたが 更新です 楽しんでくださいね！

5・切り取られた空

1

城門を抜けると、オリビエは礼を言つて馬を下りる。

母屋まではまだ距離があつたが、慣れない馬に揺られ尻が痛んだ。そう伝えるとマルソーも笑つて馬を下りた。

黒毛の馬を門番に預けると、騎士はまだ少し残る酔いを振り払うように何度も髪をかき上げていた。

母屋まで歩きながら、オリビエは両親のことや侯爵に引き取られたときのこと、アネリアを失つた経緯等をぼつぽつと語った。

マルソーは黙つてそれを聞き。時折青年の背を優しく叩いた。

「それでも…僕は、音楽を奏でられる。そうして生きていける。飢饉のために農村では餓死者も多いと聞きます。僕は幸せなんです」結局、何をどう考え悩んでも、その答えに行き着くことをオリビエも分かつていた。

自分に言い聞かせるように話すと、そうだなとマルソーは笑った。後押しされるようで心強く感じた。

邸内ではすでに晩餐会が開かれ、ロスレアン公が雇つた音楽家たちが室内楽を演奏していた。バイオリンの緩やかな調べと貴族たちのダンス。大広間は煌びやかな時間が流れる。

マルソーは、客人用の控え室へとオリビエを連れて行こうとした。大広間の脇を過ぎ、隣室へ向かう廊下でグラスを持ったまま数人の女性を引き連れるエリーと出くわした。

「お、お前のお供は淋しいな」

エリーがからかうようにワインの入ったグラスを掲げて見せる。マ

ルソーはにやりと笑い返し、オリビエの肩に腕を回して引き寄せて見せた。

「おやおや、我が友は変わった趣向を持ったようだ」

「こいつの演奏はどんな女より魅力的でな」

片目をつぶってみせるマルソーにエリーは肩をすくめ、理解できないという風に首を振った。

「オリビエ、侯爵が仏頂面だぞ。いつも以上にな」

エリーの忠告はオリビエの顔を引きつらせた。

「ほら、見つかった」

エリーが彼らの背後を見つめ、その視線の先を追ってオリビエが振り向く。

肩に置かれたマルソーの腕が慌てて離れた。

談笑する人々の間を真つ直ぐこちらに向かってくる。

リツアルト侯爵は噂では北の民族の血が流れているといわれ、一際背が高い。がっしりした体躯は遠めにもすぐにそれと分かる。元軍人。折り目正しい姿勢と歩き方。酔って揺らめく周囲にあつて異質だ。

オリビエを見据えたまま歩く侯爵に、幾人かが慌てて道を譲る。何事かとその行方を見つめる。

「こ、これは、侯爵、ごきげん……」マルソーが固い笑みを浮かべ挨拶を述べようとしたときには、侯爵の両腕がオリビエの肩をぐんと押さえつけていた。

深い緑の瞳に睨まれ、オリビエは凍りついたように目を見開く。視線をそらすことが出来ない。

これほど、怒りをあらわにした侯爵を初めて見た。殴られるのかもしれない。

瞬きも出来ず、オリビエはただ次第に潤む瞳で懸命に男を見上げていた。

「マルソー、酒も飲めない子どもを酔わせるとは。今夜はロスレア
ン公に演奏をお聞かせするはずだったのに、これでは弾けまい」

マルソーも、傍らに立つエリーも二の句が継げない。もちろんオリ
ビエは酒など飲んでいないが、否定の言葉はぐるぐると喉の奥で空
回りするだけだ。

侯爵は真っ直ぐオリビエを睨みつけたまま続けた。

「こんなに冷え切って、顔色も悪い。ビクトール、オリビエを寢室
に」

侯爵の背後に控えていたビクトールが侯爵に突き出されるようにさ
れてよろめくオリビエを引き受ける。二人が廊下の奥に消えていく
のを見送ると、啞然とするマルソーを振り返り、リツアルト侯爵は
にらみつけた。

「王妃つき近衛連隊の騎士がこの時期に『エスカル』とは。どこに
でも目はある。気をつけるのだな。隊長のエリーにも迷惑がかかる
う」

「お前、行ったのか」エリーも眉をひそめた。

「ご忠告、痛み入ります。エリー、少し休憩しただけさ。喉が渴い
てな」

マルソーは悪びれる様子もない。

王妃は【エスカル】も、そこに集る者たちも、そしてそれを作った
ロスレアン公をも嫌っていた。下手な噂を流されるのは、得策とは
いえない。

侯爵はさらに続けた。

「今夜のカフェでオルガンを弾いた若者がいたそうだが。知り合い
かな？」

広間のダンスの音楽が静寂に響いた。

エリーもその周囲にいた貴婦人も、二人の様子をただ見比べるだけ
だ。

マルソーは高圧的な貴族を嫌う。もともと平民の出身。同じ一平卒

からたたき上げでここまで来たエリーも男の気質をよく理解している。

ここでマルソーが憤れば、どう庇うべきかと身構える。

「……いいえ。名もない奏者でしたが。この世に二つとない名演でした」

マルソーが穏やかに笑って見せると、侯爵は目を見開いた。

「惜しかった。名を聞いておけばよかった」

さらに続けるマルソーに侯爵は一つ息を吐き、もうよいとつぶやいてその場を去った。

聞こえてくる広間のざわめきが、止まった時間を取り戻し彼らを包んだ。エリーは女性たちを残し、通りかかった給仕の盆からワインを一つ手に取ると、親友に手渡す。

「……マルソー、何があつたのだ。白状するまで放さないぞ」

エリーが男の首に腕を回し、晩餐会の会場へと引つ張っていった。

マルソーは笑いながら、あの感動をどう親友に伝えようかと言葉を探り始めていた。

5・切り取られた空2

2

「大丈夫ですか、オリビエ様」

ビクトールが寝室まで案内し、部屋の明かりをつけてくれた。三つのろうそくを立てた小さなシャンデリアが二つ天井から下がっている。

ベッドの脇のテーブルにも一つランプが置かれた。

壁の片側にあるクローゼットには、アンナ夫人が揃えさせた色とりどりの衣装が並ぶ。真つ赤な上着の一揃えが目立つように壁のフックにかけられていた。明日、王宮へ行くためのものだろう。

「アンナさまは、歪んだ形でしか、愛情を表現できない方です。不器用な女性です」

衣装の袖を持ち上げてしげしげと眺める青年にビクトールが声をかける。

「…それでも、僕は」

「侯爵様は、もう何年もアンナ様と床と共になされていません。奥様は、お淋しいですよ」

それは、相手をしてやれということか。

貴族のそういった部分は乱れきっていた。国王すら寵姫を正式に囲う時代だ。貴族たちの間でもそれは当然のことだ。アンナ夫人は退屈しのぎに若いオリビエを誘惑する。雇われ人であるオリビエがそれに従うのも仕事のうち。そう、考えるものがあるのも確かだ。

「だからって…僕はあの人の言いなりには、なれないよ。侯爵を裏切るのは、嫌だ」

「オリビエ様。アンナ様にはお子さんがおられません。その寂しさもあるのです。どうか、奥様に優しいお言葉をかけてやってください」

い」

「ビクトール！お前だってアネリアを娘のように可愛がっていただろう！そのアネリアを追い出したんだぞ！それでも夫人の味方をするの？」

「仕方ないのです。アネリアは、夫人にあなた様とのことを聞かされ、逆上した。夫人に手を挙げたのです。それは、してはならないことだった。追い出される前に、あの子は自分で飛び出していった。私が止めても、あの子はもう聞かなかった」

オリビエは深くため息をつく。

「もう、いいよ。何が本当なのかも、僕には分からない」

ベッドに腰を下ろした青年に、ビクトールは一礼し、部屋を出て行った。

夫人に忠誠を尽くしビクトールはあんなことを言うが、今頃夫人は大好きな晩餐会で大勢の男に色香を振りまいているのだ。

オリビエは襟元のリボンを解くと、新鮮な空気を吸いたくてバルコニーに出た。

夜風の向こうに遠くファリの街の灯が揺れていた。

翌朝、オリビエが目覚めた時には陽が高く昇っていた。

結局あの後、体を拭いてすぐに眠くなってしまったのだ。旅の疲れもあったし、慣れない乗馬や街の雰囲気酔っていたのだろう。けだるい目覚めに、朝食を運んできたメイドが心配そうに何度も大丈夫かと尋ねた。

朝からにぎやかな声が響く中庭を眺めてみたが、普段経験のない窓の高さにめまいがした。なにやらこの城の主、ロスレアン公が出かけるようだ。二頭立ての馬車が門に向かって進みだした。夜には分からなかったが、オリビエに与えられた部屋は五階だった。

「この辺は夜になると川風が吹きますからね。夜風に吹かれると、思っている以上に体が冷やされるんですよ。オリビエ様、そのように薄着ではお風邪を召されますよ」

心配そうなメイドがふつくらした手をオリビエの額に当てた。

オリビエが朝食をほとんど食べていなかったからだ。

結局、熱があると言われ、オリビエはそのままベッドに横になるように言われた。

侯爵が狙っていた通りじゃないか。

医師が呼ばれた頃には、悪寒に身を震わせていたが、内心オリビエはホッとしていた。いくら侯爵でも、国王陛下のお召しに仮病はまじいだろう。これなら誰にも疑義を挟む余地がないはずだった。

5・切り取られた空3

3

数時間横になるうちに、オリビエの思惑とは裏腹に、熱は下がり気分も良くなっていた。昼前には目が冴えて寝ているのが苦痛になる。何度もベッドで寝返りを打ち、うとうとしては演奏会の夢を見る。昨夜の晩餐会で遅くなったのか、アンナ夫人が起きてきた。足音で分かるのだ。今、扉の外に立つ。そしていつもノックもせずにくせに、一つ二つ息を整える。まるで走ってきたことを悟られまいとするように。

それもすべて耳のいいオリビエには聞こえているのに。

いつもの通り澄ました顔つきで入ってくる。まあ、私の忠告を無視した報いだわ、と冷たく言いながら。

オリビエが身を起こしたところにしがみつく。まだ少し、酒の匂いをさせていた。

しどけなく開いた胸元に誰がつけたのか小さな赤いしみを見つけ、オリビエは目をそらした。この人は、寂しさを紛らわすためなら何でもするのか。

「オリビエ、昨日はひどいことを言っただわ、ごめんなさい」

珍しいことだった。

夫人が、自分の態度について謝るなど。

「私、あれからずっとお前を待っていたのよ。ねえ、お前の曲を聞かせて欲しいわ。侯爵様もロスレアン公も、皆様パレードにお出かけなのよ。私一人置いていかれてしまったわ」

「パレード？」

「そうよ。なんでも、明日から開かれる議会のために、サン・ノルト寺院からファリの大通りを通って議場のあるモリノ公会堂まで議

員たちが行進するんですって。全部で千人以上もいるそうよ。ファリではそれはもう盛り上がりつつあるんですもの。私も観たいと思っていたのだけれど、男性の方々は皆ご公務があるでしょ？ね、オリビエ、あなたも観たいと思わない？」

甘えるようにオリビエの胸に額を擦り付ける。

ああ、目的があるから素直に謝るんだ。

まだ少し寒気がしたが、パレードに興味がないわけではない。

「アンナ夫人、ビクトールが衛兵を一人頼みましょう。私もファリは不案内ですし、大勢が集めるのなら本当に危険かもしれません」

「一緒に行ってくれるのね！嬉しい」

もう一度ぎゅと抱きしめられ、香の余韻に視界がぐらぐらした。

ファリの街を真っ直ぐ横切る大通りはパレードの行われる少し手前で封鎖され、彼らの乗った馬車も止められてしまった。警備のスイス衛兵に様子を聞き、通りの脇の建物の二階にあるカフェを教えてもらった。考えることは皆同じらしく、混雑する狭い階段を昇る。

踊り場でやり過ぎせればいいが、そうしてはいいつまでたっても先に進めない。思い切って昇れば、すれ違う人々とまるでダンスを踊る時のように触れるか触れないかという状態だ。体の大きなビクトールは迷惑そうに睨まれても当然とばかり夫人を庇う。街の男と喧嘩になりかけ、オリビエが取り成して頭を下げなければならなかった。階段を昇りきると小さな店の古ぼけた扉があった。暗がりから扉を開くと、通りに面した窓が眩しい。すでに詰め掛けた大勢の人の姿が陰だけになって見える。皆窓辺に近寄り、パレードの到着を待っているのだ。

大柄なビクトールに夫人の背後を任せ、オリビエは時折額に手を当てながら、三人が入り込める隙間を探す。窓辺に張り付くようにしている三人の親子がいる。大人が数人張り付いている場所よりは、眺めがいいように思えた。子どもの背の向こうに、通りが見えた。

うなり声のような、どよめきのようなものが聞こえ始める。

「どうやら、来たようですよ」

オリビエが体をそらし、少し後ろにいる夫人が見えるようにと手を引いてやる。

圧倒的な人混みに借りてきた猫のような夫人は目を真ん丸くして首をかしげて外をのぞく。その仕草がやけに子どもじみて見えた。ふと、ビクトールと目が会うと、彼も穏やかな視線を夫人に投げかけていた。

「奥様、肩が冷えますよ」

ビクトールがそつと夫人の乱れたショールをかけなおす。その毛むくじらの大きな手にアンナがふと手を添える。白い夫人の手は何気なくビクトールの手の甲をなでるとショールの白に消える。

オリビエは目をそらし、再び窓の外へと視線を戻した。

ビクトールは時折、アンナのことをお嬢様と呼んだ。

侍従長のビクトールはアンナ夫人が嫁いでくる前から侯爵家に勤めている。アンナ夫人がまだ十代のあどけない少女の頃から知っているのだらう。身一つで侯爵家に嫁ぐということがどれほど少女に重荷だったのか、彼は知っている。オリビエが知らないアンナ夫人を知っている。

昨夜、ビクトールが言った言葉が思い出された。

子どもが母を慕うように、夫が妻を支えるように、優しく接して欲しい、と。

本当は、夫人にそうしてやりたいのはビクトールなのかもしれない。

5・切り取られた空4

4

来たわよ！

誰かが叫んで、一斉に店内の人間が一点を見つめる。

人々の熱気にほだされ、オリビエも味わったことのない高揚感を感じていた。

通りの向こうから歓声を引き連れて整った列が進んでくる。先頭は国王の衛兵たちだ。馬に乗り四列を乱さずに進む彼らは表情を厳しくしたままゆつくりと進んでくる。大司教や国王、王妃。煌びやかな貴族たちの一団。その中にエリーとマルソーの姿を見つけた。

「あ、マルソーだ」

そういったオリビエの声も、周囲の声にかき消されている。

大勢の騎士の中にあつて、エリーもマルソーも目立っていた。立派な近衛連隊のブルーの衣装に金の房飾り。白い羽が帽子に揺れる。何故だか嬉しくなつて盛んに声を張り上げたが、気付くはずもなかった。

「王妃さま、素敵ね」アンナ夫人がオリビエの袖を引きため息をつく。

オリビエは王妃にはあまり興味がなく、言われて初めてソチラを見つめる。高く結い上げた白い髪、華やかなドレス、羽飾りの扇子。孔雀の羽をあしらった貴婦人も見える。それはどうも、オリビエの感覚からは「素敵」ではなかった。

「あ、侯爵様よ」

貴族の列の中にロスレアン公とリツアルト侯爵を見つけ、アンナ夫人は無邪気に手を振った。ロスレアン公は民衆に人気がある。一際声援が高くなるからそれがすぐに分かる。婦人の声が届いたわけではないだろうが、侯爵がこちらを見たような気がした。

「…、あ」

オリビエは昨夜の恐ろしい侯爵の表情を思い出した。
ぞくりと寒気が走る。

医師に反対されながらも出かけてきたことが知れたらまた、なにか言われるだろうか。

「オリビエさま、お顔の色が冴えませんよ」ビクトールが感づいたかのように肩に手を置いた。

「あ、いや。大丈夫」

本当に気分が重くなってきた。一気に興奮が冷め、代わりに悪寒が襲ってきた。

そのとき。通りに詰めかけた民衆とそれを押さえようとする警備の兵。そこから少し距離をおき、興味がなさそうに歩く少女がいた。
黒い髪。白い肌。小柄で、華奢な少女。

「ビクトール、ごめん、ちょっと」

オリビエは慌てて店を飛び出した。

「オリビエ様！」

「オリビエ！？」

青年が何かを見つけたそのあたりに目をやり、ビクトールは表情を厳しくした。

アネリアだ、きっと、あれは。

アネリア。

オリビエはすれ違う人が迷惑そうな声を上げるのもかまわず、階段を一気に駆け下りると、通りを見回した。

確か、あの建物の角辺り。

パレードに夢中の人々の背中をくぐるようにオリビエは走った。

水色のよろい戸の窓の下。
目指す姿。

その少女は建物の陰に隠れるようにひっそりと立っていた。

「アネリア！」

5・切り取られた空5

5

薄い紫の短いドレス。胸元はメイドの衣装よりずっと深く空いている。

派手な化粧。まだ十六のはずなのにそうは見せないほど、大人びた目をしていた。

ぼんやりと通りのほうを眺めている瞳が、やっとこちらを捉えてくれた。

「アネリア！」

「！お、オリビエさま！」

その小さな荒れた手を握り締める。
そのまま抱き寄せる。

「会いたかった！アネリア！」

あの日の午後、陽だまりの下で戯れた。柔らかな髪を手ですいて、
何度もその首にキスを繰り返した。
柔らかな肌の感触。

「は、放して」

抱きしめる青年の胸元で、少女は拳をドンとぶつけた。

「！」

改めてアネリアの顔を覗き込む。

両手でその頬を包んで。

大きな瞳はそのままなのに。その瞳には嬉しそうな笑みはない。

「相変わらず、綺麗な手ね」

「アネリア……」

「放してつてば。その服。奥様の見立てでしょ？ひどいセンスね。人形みたいに着飾られちゃって」

「アネリア」

「私ね、あれからいろいろな男を経験したわ。生きていくには必要だったから。ね、オリビエ、あなたが一番最低だった」

両手から、少女がすり抜ける。

一歩下がって、アネリアはオリビエをにらみつけた。

「追い出された私のことを探もしないで、自分はこのうのと都見物なんでしょ？案内してあげましょうか？百フラン出すなら手をつないで歩いてあげてもいいわ」

「…」

「…なに」

「すまない。僕は、君のこと護れなかった」

「百フランもないのね。相変わらず、何も持っていない。音楽以外何もなくて、音楽以外何も大切じゃない。私は、奥様に追い出されたんじゃないわ。オリビエ、あなたの音楽に不幸にされたのよ」

なにを言われても、それが本当のことなのだ。

そうしたくないと思っけていても結果としてアネリアを不幸にしたのだ。

それを、アネリアが恨むのはむしろ正しいことだ。

オリビエはどうしたらアネリアの気持ち晴れ、少しでも幸せな気分にならせてあげられるのか、そればかりを考えていた。

荒れた小さな手を見るたびに、愛おしかった。護りたいと思っていた。

どうしたら喜んでくれるのだろう。

「アネリア…僕はどうしたら」

不意にアネリアがしがみついていた。

「！」

「ねえ、私やつぱり、あなたが好き。オリビエじゃなきゃいや。一緒に逃げて、ねえ、来て！」

少女の視線はオリビエの背後、青年を追ってきたビクトールとアンナ夫人を見つめていた。

「オリビエ、何をしているの！」

夫人の甲高い声に、オリビエも気付く。

「見ちゃだめ、ねえ、来て！私と一緒に逃げて」

両手を取って引っ張る少女につられて、オリビエも走り出した。

6

遠く背後にビクトールの声。

細い路地の暗がり走りこみ、すえたゴミの匂いに胃が騒いだ。どこか現実味を感じないのはまた上がり始めた熱のせいだろうか。強引に引っ張るアネリアの手はひどく冷たい。

五階建ての建物の隙間を縫う路地は、地の底を思わせた。日の光の差さない暗闇の世界。湿った空気が重くのしかかり、オリビエは何度もよろける。

いくつか角を曲がったところで、体勢を保てなくなって壁に寄りかかる。それでも少女は早く、早く、と強引に腕を引っ張った。

「アネリア、分かった、から、待って、ちょっと…」

少女の姿がゆがむ。

「待って…」

息を切らせ、オリビエはその場に崩れるように座り込んだ。

「なあに、どこか具合が悪いの？自業自得ね。これで、お金を持っていたらよかったのに」

アネリアの声が遠ざかる。

「さよならを言わなきゃいけないわ」

「え？」

「ほら、オリビエも、言わなきゃ。楽士オリビエに、さよならってね」

ぼんやりと開いた目に、少女の紫の服が映った。路地に膝をついて、何かを持って。

振り上げる。

少女の足元には割れたビン。

「会いたかった、アネリア」

鉄槌とは、こういうことを言うのだろうか。

アネリアは僕の手を怒りを落とそうとしていた。僕の運命を断ち切るうというのかもしれない。この手がなければ、僕の人生は変わる。僕と音楽は切り離される。

少女の持つ硝子の破片は、下から眺めると透明で美しかった。

その向こう。建物の隙間で細長く切り取られていたけれど、それは確かに空だ。

あの時、アネリアと寝転んで眺めた昼下がりの空とつながっている。

僕は、涙を流していた。

アネリアを下から抱きとめる。

勢いで振り下ろされたそれが背中に突き立った痛みも、関係なかった。

アネリアはあの時以上に痩せていた。それでも、腕の中の少女はアネリアだった。時を経ても、場所が違ってても。僕の中の彼女はあの時のまま、愛おしい。

悲鳴が、聞こえた。

5・切り取られた空6

7

目が覚めると、そこは見たことのある寝室だった。

クリーム色を基調にした壁、青緑のカーテンに金の房飾り。天使が踊る暖炉。ここは、侯爵の屋敷の、一室だったような。

「オリビエ様！」

白いエプロンのメイドが覗き込む。

「早く、侯爵様にお知らせして！」

もう一人いたのだろう、軽やかに扉を開いて出て行く音がした。

オリビエはうつぶせになっている姿勢を苦しく感じ、身を起こそうとする。

「つつ」

痛みと同時に、自分がベッドに縛り付けられていることに気付いた。

「なんだ、これ」

「動いてはいけませんよ、オリビエ様。背中をお怪我されてしまったので、寝返りを打たないようにと、お医者様がこうされたのです」

メイドが手首にからんでいたロープを解いてくれた。

「ま、縛られている姿をもう少し見ていたかったのに」

残念そうな口ぶりとは裏腹に、アンナ夫人が嬉しそうにベッドに駆け寄った。オリビエの手についたヒモの痕をそつとなでる。

「ご夫人もなかなかのご趣味ですね」

そう、夫人をからかったのはロントー二男爵だ。何故ここにいるのだろう。

「あら、これは侯爵様がお決めたことですよ。ねえ、あなた」
侯爵はニコリともせずオリビエが起き上がるのを助ける。

腰に枕を当ててもらい、こわばった体からホッと息を吐き出すとオリビエは改めて侯爵を見上げた。

「あの、何も覚えていないのですが。ここは、侯爵のお屋敷ですか」
夫人と男爵は視線をそらし、侯爵だけが真っ直ぐオリビエを見ていた。

「あの、教えてください。あれから、一体どうなったのです」

「お前はファリの路地で背中を刺され、ロスレアン公の城に運び込まれた。治療を受け、落ち着いたところで私も議会が膠着したのです。こちらに運んだ。その間、お前は眠り続けていた」

「アネリアは」

侯爵の太い眉がピクリと動いた。

「あれから七日だ。風邪で体力が落ちていたこともあって感染症に罹って一時は危なかったのだぞ。心配してロントー二男爵もここ数日滞在されている」

「あの」

「当分は、ここにいろのだ。よいか、外出も許さん」

「アネリアは、どうしたのです！」

逃げたのだろうか、それとも。

侯爵の分厚い手がかむようにオリビエの口を塞いだ。

「う……」

「その名を私の前で口にするな。二度とは言わん。いいな。守れないのなら、一生ここに縛り付けるぞ」

ロントー二男爵も神妙な顔をしていた。

結局、食事をもらい、再び横になった頃。食器を片付けに来たビク

トールと話すことができた。

こわばった表情、視線はテーブルの食器に置いたまま、ビクトールはゆっくり話し出した。

「私達が駆けつけたとき、アネリアはあなたにしがみついて泣いていました。奥様は悲鳴を上げ、私が止めるまもなくアネリアにつかみかかり。突き飛ばされたあの子は足元に転がっていた硝子の破片を奥様に向けました。私が奥様を庇い、あの子を殴り飛ばして。あなたを抱き上げた時には、あの子はもう、逃げ出していました」

「じゃあ、無事なんだね」

「オリビエ様。もう、お止めください。あなたは、あの子を愛しているわけではありません。ただ、ご自分があの子より音楽を選んだ、そのことに呵責を覚えているだけです。同情しているだけです。それは、あの子を不幸にします」

あの時の、アネリアの言葉がよみがえった。

僕の音楽が、彼女を不幸にした。

「分かっているよ、ビクトール。僕は、結局卑怯者なんだ。あの時、アネリアは僕の手を狙ったんだ。でも僕は、それを差し出すことが出来なかった。僕の音楽が彼女を不幸にしたと分かっていたのに、自分から音楽を取り上げることが出来なかった。だから、思わず彼女に抱きついたんだ。ケガも、自業自得なんだ。僕が全部悪いんだ」

じつと手のひらを見つめていたオリビエに、ビクトールは笑いかけた。

「あなたのようにになりたいとは思いませんが、羨ましいとも思いません」

「意味がよく分からないよ。ね、ビクトール。少し、弾きたいな」

「侯爵様がお許しになるまでは我慢してください」

その日の午後には、部屋にチェンバロが運び込まれた。ビクトールが侯爵に許可を取ってくれたのだらう。

下男が五人がかりでそつと運び入れたそれは、相変わらず真っ青な空を抱いていた。

オリビエは慈しむように時間をかけて調律して行つた。

音に納得し、アネリアへの気持ちを音に昇華させる頃には、メイドが手をつけられることのなかった冷めた茶を温かい夕食に取り替えた。

「少し、聞いていていいかな」

夕食と一緒に運び込まれた客人は、食事用のテーブルにしっかりと席を取り、椅子にもたれかかるとくつろいだ。

ロントーニ男爵の存在も、オリビエはただ、小さく一度頷いただけだ。

賑わう街、ファリ。今夜もそこでは自由が歌われ、叫ばれるのだらう。

人々のぎらぎらした粘りつくような情熱が、この国を変えるのかもしれない。あのパレードの高揚した空気。喧騒が力の渦のように集っていた。

オリビエがあればどの熱意を持って、あのかわいそうな少女に愛情を注ぐことが出来たならきつと何かが違っていただらう。

そんな情熱を、音を奏でること以上に何かに向けられたのなら、オリビエの人生も変わったのかもしれない。

だが、オリビエには音が、楽器が、それを奏でる指が必要だった。

お前の生き方は一つ思想だ。

マルソーの言葉は音をにじませた。そこに存在していい、といわれたのと同じだ。

このままオリビエという音楽家として、生きていいのだといわれた気がした。

静かに緩やかに。音は伸び、空を翔る。そのために描かれた楽器の空は、いつもの蒼を讃えてオリビエの思いを受け止める。

そこでこそ息が出来るのだといわんばかりに、オリビエの指先は鍵盤を走る。踊るように走るように。疾走し続ける。その先が何であろうと音に限りはない。

ふと、オリビエの手を誰かが包んだ。演奏は強引に中断される。

いつの間にか眼を閉じ演奏していたオリビエは気分がついていかず、それと知るまでぼんやりとしていた。

見上げると、侯爵が大きな手でオリビエの手を包み込んでいた。

「もう、休みなさい」

立ち上がると、いつの間にか室内にはメイドや医師、ロントー二男爵、そしてアンナ夫人の姿もあった。皆、静かにそこにいて、何一つ音を立てなかった。

オリビエはまったく意識していなかった。

侯爵に支えられ、ランプの明かりの中、ベッドに横になると急に疲れを感じた。医師に痛み止めをもらうとすぐに眼を閉じた。

ああ、そういえば、いつの間にか夜になっていたんだ。

オリビエは深く眠る。

6・エスファンテの青年衛兵

1

オリビエが自分の家に戻れたのはそれから三日後のことだった。

シューレンさんの淹れてくれた朝のコーヒーを飲み、オリビエはぐんと伸びをした。

「やっぱり、ここが一番だね」

青年が好きな蕎麦粉の入ったクレープにバターをたっぷり使ったオムレツを添える。炒めたベーコンとクレソンで彩が加わる。ダイニングの窓からは屋敷を囲むオリーブの木々を透かして小さな菜園の向こうに隣家の影が見えた。

オリビエの家は侯爵家から程近いところにあつたが、街の中心にあるような庭のない細長い商家とは違い、一軒一軒庭と池と、街道からの小道を持っている地域だ。垣根や小路の形、家の配置はさまざまだが、ブルジョアと呼ばれる平民の中でも裕福な人々が住んでいる。隣家はルグラン市長の甥に当たる人物が住んでいる。

その向こうは広く牧場を経営している豪農で、最近ある貴族からその家を買ったらしい。

オリビエは庭にこだわりのないで生えるがまま、所々シューレンさんが好きなように花や野菜を植えていた。

今も、皿に乗るクレソンは庭から取れた新鮮なものだろう。生き生きとした新緑の季節にこの野菜は活躍を見せる。

シューレン夫人は太った体を揺らしながら、夕食の下ごしらえをしている。

羊の肉に、庭に生えるローズマリーをすり込んでいた。

夜にはローストされたラムが出されるのだと想像できた。

「オリビエ様がお怪我されたと聞いて心配しておりました。まだ、ご無理はいけませんよ。侯爵様からくれぐれもと命じられておりますしね。しばらくは侯爵家から馬車で送り迎えが来るそうですよ」
「もう平気なのに」

侯爵様のお気持ちですからね、感謝しなくては。そう、振り向いたシューレン夫人にたしなめられる。

「わかつているよ、でも、少しは体を動かさないと、本当に病人みたいだ」

「オリビエ様。大勢の方に心配いただいたんですよ、少し萎らしくしてくださらないと、心配した甲斐がありませんよ」
夫人がこんな風に言うのは珍しかった。

「変な理屈だね」

オリビエは切り取ったクレープを器用に三つ折りにしてフォークで突き刺した。

「オリビエ様」

またも非難めいた口調。どうも、シューレン夫人の様子がおかしい。オリビエは眉をひそめる。

まるで子どもをたしなめる母親のようじゃないか。そんな風に感じたのは初めてだ。

「僕に、何か言いたいことがあるのかい」

口からはみ出していたクレソンをつまんで、もう一度口に突っ込んだ。

オレンジのジュースを喉に流し込む。

「キシユという女性には、二度とここに来ないようにとお話申し上げます」

「！」

立ち上がったオリビエに、覚悟を決めたような面持ちでシューレン夫人は向き合った。白い眉間にめったに見ないシワを見て、夫人がキシユのことで承服できないところがあるのだと分かる。けれど、始めに菓子を焼いてくれた時には嬉しそうだった。

何があったのか。キシュが夫人の機嫌を損ねたのだろうか。夫人には、きちんと理由も説明したはずだった。

「言っただろう、あの子の歌は役に立つんだよ。僕が曲を作るのに役立つんだ」

夫人は首を横に振った。

「シューレンさんだって、クリスマスには協力してくれたじゃないか！」

「せっかくの贈り物が寝室に戻されているのを見ました。乱暴に開けられた包みも。オリビエ様のなさり用ではありません、呆れましたよ。あの娘とは身分が違うのです。オリビエ様のお気持ちを理解できるようなものではありません。形見の品を譲ることがどれほど決心の要ることか」

「いや、それは……僕が自分で用意できないことがいけないんだ」
そこで、シューレン夫人は目をそらした。小さく肩で息をして、それから告げた。

「確かに、オリビエ様が年頃の女性に興味を示されるのは当然のことですし、私もご協力差し上げたいと考えました。オリビエ様がよろしいのでしたら私が口を出すことではないと。ですがあの娘は、街の酒屋の娘です。身分が違いますし、酒屋はあまりいいうさを聞きません」

「キシュが、何か僕にとって悪いことをするとでも言うのか？」

シューレン夫人は首を横に振った。

「ですが、オリビエ様。フアリでは議会が膠着して不穏な情勢が続いております。その様子が新聞でもたらされるたび、この田舎町でも集会が開かれるのです。街の司祭や弁護士、医師、鍛冶屋や商人、さまざまな者たちが集って、一つの新聞を読み上げ、意見を交わすそうです。あの子の家の酒屋はそのための会場になっています。あなた様を利用しようとするかもしれませんが、侯爵様にご心配をお

かけすることになります」

「それを、侯爵様に言つたのか？」

シューレン夫人は首を横に振つた。

「今はまだ。オリビエ様がこのまま諦めてくだされば、私は黙っております。ですが、これからあの子をここに呼ぶようでしたら、考えなくてはなりません。オリビエ様のことを大切にしてくださっている侯爵様にご心配をおかけすることは出来ません。私は、オリビエ様。侯爵様に雇われているのです」

シューレン夫人の雇い主は侯爵。

それを言われてしまったら、オリビエには反論も何もない。

けれどそれは最初からそのはずだった。今、それを盾にするのは卑怯ではないか。

「意味が分からないよ」

オリビエは、ゆっくりイスに座つた。

少しだけ、背中が痛んだ。

「侯爵様が心配するって、なんでそう思うんだ？そんなこと、これまでだつて言つたことなかったのに」

「オリビエ様。あなた様がフアリから戻られた時。あの時の侯爵様のご様子は、それはもう、胸が痛むほどでした」

「僕は、知らない」

「とても、あの毅然とした侯爵様とは思えないほど憔悴なされて。まるでわが子を失う父親のようでした。オリビエ様、あなたをとても大事になされていると感じました。それは、あの場にいた皆が思つたのではないでしょうか」

うなだれている青年を、夫人が抱きしめた。

「お許しください。オリビエ様。あなた様が自由を得たいと願っていることは、私も十分承知なのです。ですが、今回のような危ない目に遭われたのを知ると、どうにも心配で仕方ないのです。あなた様は、ご自分が感じられている以上に大勢の方に愛されているのですよ」

なにか、反論してやろうとオリビエが言葉を探るうちに、玄関のベルが鳴らされる。

「侯爵家からのお迎えです」

二頭立ての馬車には、丁寧にも御者のほかに侯爵の衛兵が一人ついていて。サーベルを携える彼にオリビエは少しだけ、演奏させて欲しいと伝えた。

まだ若い衛兵は黙って頷いた。

オリビエがリビングでチェンバロに命を吹き込み、数曲を演奏し終わるまで衛兵と御者は部屋の隅で待っていた。

シユーレン夫人の入れたお茶に手も出さずにいるのは、使命に忠実なためか、オリビエの曲に聞き入っていたためか分からない。

6・エスファンテの青年衛兵2

2

侯爵家までの距離は短い。

常にオリビエは徒歩で通っていたのだ。それが馬車ともなるとあつという間だった。

「オリビエ様、私はズレン・ダンヤと申します。これから毎日、オリビエ様をお迎えに上がります。お帰りの際も門番にお声をかけてください」

二十代前半、ちょうどファリで知り合ったマルソーやエリーと同じくらいの年恰好に見えた。思い出すとなぜかズレンというこの青年も頼もしく思えた。

「はい。あの、そんなに丁寧な言葉遣いでなくていいです。僕もあなたと同じ、雇われ人ですし、僕のほうが年下です」

この青年にこの街で起こりつつあることを聞いてみようと思えばオリビエは考えていた。衛兵はこの街の警備をしている。きっと詳しいはずだ。

「いいえ、貴方は特権階級でいらっしゃる。そのようなこと、おっしゃらないでください」

「特権はあるけど。ほら、よくある何の資産もない名前だけの貴族だから」

ズレンという青年は涼しげな瞳をオリビエにむけ、何か言いたそうなのに口を開かない。

何か悪いことを言っただろうか。

居心地の悪い沈黙の間、オリビエが何を話題にしようかと探しているとズレンが小さく息を吐いた。

「私は侯爵様がお帰りになるまでは何があってもあなた様をお守りするようにと仰せっております」

「え？侯爵様はどこかに？」

「議会のために、今朝方またフアリへ向かわれました。我がエスフアンテ衛兵の主力は侯爵様を警護しております。その留守を預かる私の第三連隊が今はこの街を守っております」

「なんだか、物々しいね」

肩をすくめて見せるオリビエにも、ズレンは笑み一つこぼさなかった。

取り付く島のない青年にオリビエは残念な気分だ。

侯爵が不在ということは、アンナ夫人も自由なのだ。

オリビエが音楽堂に入った時からずっと、そばを離れない。

メイドが茶や食事を運んでくるたびに一緒にテーブルについた。そしてオリビエが楽器を奏でたり、曲を作るために散歩をしたりしている間は黙ってただそばにいた。

その様子がやはり以前とは違う感じがして、オリビエはどうにも居心地が悪い。

ついに、三時のお茶をメイドが運び入れ、夫人が「一緒に休憩しましょう」と声をかけてきたときにオリビエは口を開いた。

「あの、アンナ様。今日はどうなされたのですか。一日中私のそばにいらっしやる」

「あら、嫌かしら」

オリビエの分まで茶に砂糖を落とす、夫人はにこやかに笑った。

その笑顔がやはりいつもと違う。

「侯爵様とご一緒にお出かけにならなかったのですね」

「あら、嫌味？」

「いえ、そうではありませんが」

二杯目の砂糖を落とそうとする夫人の手を止め、オリビエはカップを受け取った。

「いつもより、お元気がないように思えますし。黙って私の作業を見ているだけではつまらないのではないですか」

夫人が目を伏せた。

長い睫が影を落とす瞳は、じつと手元のカップを眺めていた。

「いいのよ。相手をして欲しいわけじゃないの」

「アンナ様？」

「そばにいたいだけなのよ」

見上げた瞳といつも通り色香を放つ胸元は殊勝な言葉以上にもの言いたげだ。

オリビエは体ごと庭に向けると、目をそらした。

どうしたというのか。新しいからかい方を試しているのか。侯爵がいないからと言って一日中べったりされていては、さすがに屋敷の皆も黙っていられないかもしれない。夫人の行動のほとんどを侯爵は感づいているだろうけれど、度が過ぎれば咎められる。その時にはオリビエも巻き込まれるのだ。

それはもう、ずっと前から。

夫人がオリビエを誘惑し始めた十六の頃から危惧していた。

たとえそれが、夫人の命令に従っただけだとしても。

今も、夫人はオリビエの唇に指先を触れようとしていた。

細い指がするりと閉じた唇をなで、そのまま首にまきつく。座ったままのオリビエに覆いかぶさるように公爵夫人は唇を塞ぐ。

目の前に見る夫人は、美しいがやはり年上の女性。間近に見れば張りを失いかけた首に目が行く。

つ、と小さな痛みが走る。

「な？」

唇を押さえると血がにじんだ。

「お前を、憎く思うときもあるの」

見下ろす夫人の口元は赤く濡れ、凶器に見える。噛み付かれたのだ。再び唇を寄せる夫人をオリビエは手で押さえた。

「あの」

「ねえ、オリビエ。お前は誰なの」

「え？」

夫人の口調には怒りに似たものが漂う。睨まれ、オリビエはもう一度その言葉を胸の中で反芻した。誰なの？
一体なにを言いたいのだろう。

6・エスファンテの青年衛兵3

3

「お前は、なんなの。私から、侯爵様を奪った」

「アンナ様、あの、意味が分かりません」

強引に体重をかけられ、オリビエは夫人を押しつけ立ち上がろうとする。

何を言っているのか全然分からない。

「お前が、私を不幸にしたのよ」

アネリアが浮かんだ。

あのファリの街角、細長い空。

痛みより痛い切なさが胸に落ちた。

僕の音楽が彼女を不幸にした。

「お前がいたから。私は不幸になったの」

それが公爵夫人の言葉だと理解した時には、床に押し倒されていた。ついた瞬間の背中の中の痛みで我に返る。

まるでアネリア。

彼女と同じ台詞をこの夫人が呪うように繰り返すのは、どうしてなんだ。アネリアを追い出した張本人ではないか。

「ねえ、オリビエ」

耳元を指先でくすぐられ、オリビエは目をつぶった。

くすぐすと、夫人が笑う。

「あの、意味が分かりません、アンナ様。私があなたを不幸にしたとは、どういう」

襟元を解こうとする手を押さえて止める。

「ことですか」

「気付いたのよ。お前が怪我をしたときに。あんなふうに取り乱し

た侯爵様を、初めて見たの。おかしいでしょ？私が誰とどんな遊びをしようとも、二日も無断で屋敷を抜け出していようと、あの人はいつも顔色一つ変えないのに。あの時、お前が運ばれてきた時にどれほど恐ろしい顔で私を睨み、ビクトールを怒鳴りつけたか」オリビエは夫人に口を塞がれなくとも言葉が見つからなかった。荒々しいほどの口付けは青年の理性を舐め取るうとする。切れた唇が痛んだ。

夫人の細い肩、そのどこにこんな力があるのか。背中の傷が痛んだ。

長いキスのあと、切なげに息をつく青年に夫人は続けた。

「ね、侯爵様が私の相手をなさらなくなって、丁度五年。分かるかしら。オリビエ、お前をこの家に迎えてからあの人は私に見向きもしなくなったの。きつとそうなのよ。お前がいるから。ねえ、オリビエ、正直に話さない。あのひと、侯爵様とお前は、どんな関係なの」

オリビエは首を横に振った。

なんと言えがいいのか。

あの十三歳の秋、オリビエの曲を気に入ってくれたのだろう、だから、引き取ってくれた。雇ってくれたのだ。

それをどんな関係だと問われてもオリビエには答えがない。

「なにも、あの、雇っていたのだ、ということしか。アンナ様、それはきつと誤解です」

オリビエには、侯爵がアンナ夫人を大切にしているように見えた。夫人を愛おしいと思いじつと見守っているように感じた。いつか、アネリアが言っていた。侯爵様は普通の人と違う、堅実な人だと。色や欲にほだされるような人間ではないし、当然夫人を裏切るようなこともしていない。貴族にありながらそれは珍しいことだった。だからこそ、アンナ夫人にはそれが理解できないのだ。侯爵の静か

な深い愛情が。

「あの、けっして、侯爵様は奥様を裏切るなどなさいません」

「それはあてつけなの？」

頬をぺちんと叩かれた。

「私は、そうね。あの人にも、お前にも、こんなことを言う資格などないわね。私はあの人を裏切って、こうしてお前と抱き合っているのだもの！」

強引に口付けを繰り返し、白い手をオリビエの体に這わせる。

「放してください。侯爵様はあなたを大切になさっているじゃないですか。あなたが侯爵様を疑うのは間違っています。あなたが何をしても変わらずに、ずっと」

婦人の手がオリビエの首を絞める。

それはやんわりと、それでも温かい手の圧迫感はオリビエをぞつとさせた。

「何をしても？いい度胸ね。お前がそんなことを言うの？あの人を庇ってどうするの？お前も、裏切っているのよ。侯爵様を。ねえ、そうでしょ？お前に女を教えてあげたのも私なのよ。今更自分だけ善人ぶるのははしたないというものよ」

ゆっくり、婦人の手に力が入る。

オリビエは奥歯をかみ締める。

同罪、それは分かっている。

初めてアンナ夫人を見たときには、その美しさに憧れた。見たことも、触れたこともない柔らかな肌に幼い欲望を抑えることができなかった。

それが罪だということも、当然分かっていた。

「侯爵様がお帰りになったら、お前とのことをすべて話すわ。そうすれば、侯爵様がお前をどうするのか、どう思っているのか分かるから」

その宣告はオリビエを凍りつかせた。

慌てて夫人の両手首を下から掴んで押しのけると、オリビエは痛む背中を庇いながら体を起こす。

「ふふ、面白そうじゃない。ねえ、オリビエ。あの人が、私とお前、どちらを大切に思っているのか分かるわよ」

当然、それは分かっている。オリビエが追い出され、アンナ夫人は侯爵の愛情を確かめることになる。

オリビエと婦人の関係は侯爵も感づいているだろう。見逃しているのだろう。それを本人から突きつけられれば、見て見ぬ振りではない。オリビエをそのままにしておけるはずはない。

そして、僕は音楽を失う。

「あら、どうしたの、オリビエ」

オリビエはうつむいて、床に座り込んだままだ。

「泣いているの？」勝ち誇ったかのような夫人は、膝立ちになると楽しげに青年の頭部を抱きしめ髪をなでた。

「どうか、それだけは。侯爵様に言うのだけはお止めください。私から音楽を、取り上げないでください」

「そうよ、オリビエ、お前にはそういう姿が似合うわ。大人しくて従順。フアリでマルソーたちに何を吹き込まれたのか知らないけれど、私に逆らうのは許さない。そして、私から侯爵様を奪うことも、許さないわ」

夫人の赤い唇が、再びオリビエの体を舐め始めた。

全てが自分のものであるかのように、アンナ夫人はオリビエに印をつける。

そうして所有者としての快樂を貪る。

6・エスファンテの青年衛兵4

4

熱にうなされるような重苦しい曲を吐き出し、オリビエはやっと息をついた。

チェンバロの冷たい鍵盤が心地よく、ぺたりと手のひらを乗せる。

夫人は満足すると服を調べ、音楽堂を出て行った。

「お前が、何者なのか。調べて見せるわ」

結局、夫人は思いついた疑惑に夢中なのだ。そこに何か謎があると
思い込んでいる。オリビエの何を調べるつもりなのかは分からない
が、侯爵に夫人との情事を突きつけられるよりはましだった。好き
にしてくれと、思うしかない。

深い泥に足をとられている。

身動きが出来ない。

動けば、音楽を失う。

オリビエが奏でたそれは重く切ない。

楽器に描かれた偽物の空が差し込む夕日に赤く皮肉に光って見せた。

まだ陽の残るうちにオリビエが屋敷に戻ると、家の前に少女が立っ
ていた。

護衛のズレンは眉をしかめ、キシュを追い払おうとサーベルに手を
置きかけた。

「待って、知っている子だから」

「オリビエ様、私も知っていますよ。酒屋のパーシーの娘です」
ズレンの顔を見てキシュは「じゃあ帰るわよ」と拗ねた口調で言う
と、背を向ける。

傍らにいつもの犬。主人の代わりにオリビエのほうを振り向いていた。
た。

「待つて、キシュ。ズレン、あの、何も怪しいことはないんだ、ただ、彼女に作曲を手伝ってもらいたいんだ。なんなら、君が見張っていてくれていい」

オリビエの言葉にズレンはしばしキシュとにらみ合う。

「そうさせていただきます」

「なに、えらそう」

キシュの言葉に騎士はますます肩を怒らせる。

ズレンは御者に何事か説明し、馬車だけ侯爵家にと戻っていく。

オリビエがキシュを家に招きいれ、その後ろからズレンもついてきた。と、ズレンは戸口でキシュの護衛と目があつたのか立ち止まってにらみ合う。ワンと一声吼えられた。

オリビエはシューレンさんの用意してくれた夕食をキシュとズレンに振る舞い、温かい茶を入れた。

「オリビエ様、これはあなた様のご夕食でしょう、どうぞ、私にはお構いなく」

とズレンが遠慮すれば、

「じゃ、あたしこれもらうわ」とキシュがデザートの一つ目に手を伸ばした。

また二人はにらみ合う。

「あの、君たちがどういう知り合いか僕は分からないんだけど。でも、ここは一応僕の家だし、もう少し普通に出来ないかな」

ワフン。

困り果てたオリビエに同情したのか犬が声を揃えた。

「あ、オリビエ、ランドンにもお肉」

「お前！」

ズレンが立ち上がる。

「何よ、あんたは関係ないでしょ、裏切り者」

「裏切り者とはなんだよ！」

今にもつかみ合いを始めそうな二人。オリビエは閉口した。

「ああ、もう。なんだよ、君たちどういう関係なんだよ！」

オリビエが耐えられずに怒鳴る。

が、背中が痛んで慣れない怒鳴り声に迫力はない。

今日は朝から疲れた。

シューレンさん、アンナ夫人。だから早めに帰宅したのに。今はこの二人が。

ぐったりと疲れを感じ、オリビエは大きく息を吐くと、そのままゆらりとソファーに向かい、座り込んだ。

「ごめん、もう。いいから。疲れたよ」

「オリビエ様？」

「ひ弱なんだから」

少女の侮蔑にも、反論する気分になれない。

オリビエはけだるい気分でそのまま寝転んだ。

「オリビエ様？大丈夫ですか」

「なに、変なものでも食べたの？拾い食いはだめだって、ご主人にしつけられなかった？」

がばっと。

オリビエは起き上がる。

二人を無視して、一人楽器に向かう。

痛みもけだるさも、どうしようもない泥沼も。

音にしなければ涙になってしまいそうだ。

いつもなら調律してからの演奏が、今日は違う。とにかくこぼれて頬を伝う前に音に変えた。歪む音はそのままオリビエの不安定な心を映す。

マルソー、あなたの言った僕の生き方は、確かに一つの思想かもしれない。

でもそれを貫くのはとてもつらい。

つらいけれどそれしか。

僕にはない。

侯爵が僕を子どものように心配したという。その姿を見ていないが、少しばかり心がくすぐったかったのも本当だ。

それは十三の時、侯爵の胸で泣いたあの時以来の気分かもしれない。父さんの残した音楽の才能。母さんが教えてくれた愛情。それがあから僕らは侯爵に認められ今がある。感謝しているけれど、苦しい。何をどうすれば、僕はただ、音楽を楽しめるのだろうか。

純粹にこの一つきりの音が美しいと思えるのに。

張り詰めた弦のつぶやくようなそれがとても愛おしいのに。

「もう、止めなよ」

少女が叫んだ。

6・エスファンテの青年衛兵5

5

そう、多分、叫んだのだ。

肩をズレンに支えられていることに気付いて、オリビエは手を止めた。

「苦しい、悲しい曲だよ。そんなの、歌ってあげない」キシユがなぜか涙ぐんでいた。

「似合わないな、それ」

オリビエが笑うと少女は頬を膨らめて見せた。

「オリビエ様、すみませんでした。あの、どうかお休みください。熱があるのではないですか？侯爵家から医師を呼びます」

オリビエが立ち上がるとズレンが支え、二階の寝室まで連れて行ってくれた。

初めて入るオリビエの寝室にキシユはきよきよと見回す。壁にかけられた両親の肖像画を見つけるとすぐに近寄ってじっくり見めていた。

「大丈夫だから。ズレン、あの、君たちどういう関係なんだ？キシユが、僕に対して腹を立てるのは分かるんだけど」

「あら、私別に怒ってないよ。シューレンさんに来るなって言われただけ、あんたに来るなとは言われてないし。だから、来たの」

けろりと真顔で話す少女にオリビエは目を細めた。

機嫌を損ねたと心配していたのだ。

「でね、あたしがズレンのこと嫌いなのはね、裏切り者だから」

小さなテーブルの上に並ぶ本の背表紙までしっかりと眺めてキシユは言った。

「勝手にしろ」ズレンが少女を睨んで拗ねたようにつぶやく。

「どういふことなんだい」

「私と彼女は、幼馴染なんです。私はこの街の商家の出なので。両親が金を工面してくれて上の学校を卒業して私は士官学校に入りました。そうして、卒業して侯爵家に仕えることになったのです。ですが、この町に戻ってみれば、幼い頃遊んでいた皆は、私を貴族かぶれだとか宮廷の犬だとか。私は何も変わっていないのです。皆の貴族や宮廷を見る目が変わったんです。私が士官学校に入った時には温かく見送ってくれたのに」

オリビエより少し年上の青年は、悔しそうに拳を握り締めた。

「私は、侯爵様に援助を受けましたし、感謝しています。人間としても尊敬しています。確かに宮廷や貴族のやりように苦しめられている民もいますが、ここでは違う。この街は侯爵の堅実なやり方で救われているんです。なのに、新しい思想に目がくらんで皆おかしくなっている」

「毎日パンを食べてる奴がえらそうに言わないで」

キシユが立ち尽くしたまま、二人の青年を睨んでいた。

「あたしのうちは何とかなってる。でも隣街の叔母さんは毎日苦勞している。三日に一回食べ物を出しているの。自分さえ良ければいいなんて、皆思えないの。自分さえ、この街さえ潤っていればいいなんて、そんな考えは貴族様と同じじゃない！」

真っ直ぐ見つめるキシユの瞳が、その細身の体が嫌に力強く感じ、

オリビエは目を細めた。眩しい気がした。

少女は少し、肩をすくめる。

「オリビエには、関係ないことだったわね。気にしないで。あたし、パンをもらえるなら歌うわ。それでいいでしょ」

「キシユ、そんな言い方はないだろう！」ズレンが憤るが、オリビエはそれを手を挙げて制した。

オリビエはフアリでエリーに向けられた、しらけた視線を思い出し

た。

「僕は……」

「いいのよ、だって、オリビエは人間じゃないもの」
ワフン。

少女の護衛のタイミングは、素晴らしいくらいだ。
意味が分からないのだろう、ズレンは二人を見比べる。

「ズレン、あんたは仲間だと思ったから余計に悔しいのよ。あの界限で一番頭が良かった、尊敬されていたのに」

「キシユ、そうやって貴族や宮廷と対立してどうなるっていうんだよ。争いになったら無事では済まされないだろう？ まさか、ここでこの国で新大陸のような戦争をするつもりじゃないだろう？」
ズレンがキシユの肩に手を置いた。

とたんに少女の頬に赤みが差したことにオリビエは気付く。

「戦争なんか、わかんないわよ！ 戦争になっても、ズレンは貴族の味方をするの？ 私に銃を向けるの？」

「キシユ」

ズレンがつぶやいたそれが、少女の本当の名だと分かる。
彼はそれを知っているのだ。

「ごめ、ん。帰ってくれないか」

オリビエの言葉に、二人は思い出したかのように振り返る。

「帰ってほしい…僕には。関係のないこと、だから」

オリビエの家を出ても、二人が小路を何か言い争いながら歩くのが二階から見えた。慣れた口喧嘩。

互いに深く関わりとうとするからこそ。こじれる。侯爵と夫人、キシユとズレン。

それは羨ましくもあった。

6・エスファンテの青年衛兵6

6

翌日、朝の迎えに来たズレンは初対面のとき以上に堅く、口を開かないと決め付けているかのように黙り込んでいる。

通りの並木が流れるのをオリビエが見送り、その向こうの麦畑を見つめる。

小さな林の向こうには、この街の中心街が屋根だけ連ねて見えた。褐色の瓦に朝日が輝き、オリビエは目を細めた。

あのどこかに、キシユやズレンが暮らした場所がある。オリビエが通った学校も今は時計台の尖がった屋根だけを見せていた。

幾人か、仲の良かった同年代の子らを思い浮かべたけれど、両親がなくなつてからは遠ざかったままだった。

オリビエ自身、教会と広場を中心とした街に足を踏み入れる必要も、そして自由もなかった。会いたいと願うほどの友人もない。

「幼馴染、か。いいね」

そうつぶやいた青年に、ズレンはますます顔を堅くした。

「僕が育ったあの家は、貴族の子どもたちが音楽を学びに来ていた。僕は彼らを敵とみなしていたんだ。負けたくなかった。傲慢な態度の彼らに、音楽だけは負けないといつも威張つて見せた」

「……オリビエ様も、貴族の称号を得ていらつしやるのでは？」

「侯爵に引き取られたときに、形だけもらったんだ。僕を引き取ってもらつた代わりに両親の残したものを侯爵家に引き渡した、その時のおつりのようなものかな。免税の特権だけだからね、どこからも収入なんかない。一人で生きていくためには、侯爵様に頼るしかないんだ」

ズレンの返事がない。オリビエは窓から傍らの青年にと視線を移した。

「キシユに、聞いたんだろう？あの子は僕のことを侯爵の飼犬だと言うから」

「あの、それは。昨夜は本当に失礼しました。キシユにも言って聞かせます」

「君が謝る必要はないだろ。それに、本当のことだ」

また、沈黙がその場を支配した。

うん、と伸びをして、オリビエは息を吐く。

「もう、痛みもない。昨夜ぐっすり眠ったから、もう大丈夫。だから。ズレン、迎えはもう結構だ」

「オリビエ様」

「早く、楽器に触れたい」

それから数日の間、オリビエはとにかく楽器のそばにいた。

アンナ夫人がオリビエのそばにいるように、オリビエは楽器に寄り添っていた。そうしなければ何かが崩れてしまう気がしていた。

侯爵に命じられたズレンは送迎を止めないし、怒ってオリビエが歩いて帰ろうとすれば、その隣を歩き離れようとしなかった。

キシユも誰に会いたいのか毎晩家に来るようになり、オリビエの吐き出す音を見事に歌って見せた。それにはズレンも驚き感心していたが、キシユ本人はその対価として受け取るパンに一番の笑みを向けていた。

シューレン夫人はパンが毎日随分減るので、何か言いたげにオリビエを見つめるが、オリビエはズレンを夕食に招待しているし、夜中にお腹がすくのだと言い張った。

「ね、私も楽器に触っていい？」

オリビエがまだ夕食を食べ終わらないうちに、キシュは席を立つてチェンバロの脇に立つ。

「え、でも」

オリビエが慌ててサラダを飲み込もうとし、むせると、ズレンが笑ってワインと差し出した。

「オリビエ、大丈夫だよ。キシュはね、教会でオルガンを弾くんだよ」

ますますむせる青年の背をなでて、ズレンが言った。いつからだろう、エスファンテの青年衛兵はオリビエを呼び捨てて呼ぶようになっていた。

「そうなのか？オルガンは弾けないって言っていたのに」

少女はすでに、遠慮がちにイスに座り、鍵盤に恐る恐る手を置いた。そのぎこちない仕草がいつもの少女らしくなく、オリビエは目を細める。隣でズレンも噴出していた。

「おい、キシュ、がちがじゃないか」

「う、煩いわね！ズレンには楽器の価値がわかんないんだから！」
真つ赤になって反論する少女。

「ばかだな、キシュ。楽器そのものじゃないんだ、楽器を弾きこなすオリビエに価値があるんだよ」

ズレンが笑い、オリビエは少し恥かしくなりまた、ワインを口に運ぶ。

「そんなの分かってるわよ！もう、意地悪なんだから。オリビエみたいに音楽に全てを捧げるなんてそうそうできるもんじゃないんだから」

言いながら、キシュはぼろぼろと鍵盤を押さえる。

「へったくそ」

ズレンがからかえば、少女は口を尖らせた。わふんとランドンも笑う。

「もう、オリビエ、何か弾いてよ」

聖歌を弾きかけて、すぐに諦めたのかキシュは立ち上がり、チエンバ口の脇に立った。そこが、歌を歌う彼女の定位置になっていた。互いになぜか喧嘩腰の癖に、キシュとズレンは仲が良かった。彼らの存在はオリビエの夕食を楽しいものに変えていた。オリビエは始めのうちこそ喧嘩をするなら帰って欲しいと何度も二人に言い聞かせていたが、今はその必要もなくなっていた。

もともと幼馴染。離れていた時間を取り戻せばその距離は目に見えて縮んでいく。

オリビエはそんな二人を音に変えた。

お互いに顔を見ればからかったり、拗ねて見せたり、反発しているように見えるが。ふと見せるキシュの切ない表情、ズレンが端々にじませる優しさ。それが、オリビエの気持ちを温かくさせた。相変わらず犬呼ばわりだが。オリビエの奏でる曲にはキシュも敬意を表していた。

明るく楽しい曲を、キシュが声にし、二人に聞かせる。

伸びやかなソプラノにランドンも満足そうに床に寝転ぶ。

「ああ、いいね」

オリビエが満足げに笑う。

「ほんと、素敵」

キシュはまだ歌い足りないのか、つま先でリズムを取る。

「譜面にする間、テラスでダンスでもしてきたらどうだい。ズレン、今夜は月が明るいからね」

オリビエの提案に、キシュが頬を染め「ダンスなんて、貴族趣味よ」と顔を背けた。

「まあまあ、オリビエの邪魔にならないように、ほら、じゃあ散歩だ」

ランドン、と犬を呼び、ズレンとキシュは部屋を出て行く。室内からの明かりを背に、二人と一匹が月夜に歩き出すのが見える。

キシユが歌った歌はすでに譜面に書き込まれていた。
二人を見送りながら、オリビエは一人楽器に向かう。
孤独でなければ奏でられない曲があった。二人に聞かせられない音
だ。

6・エスファンテの青年衛兵7

7

月の明かり。その淋しい暗がりには、僕だけは一人。遠く聞こえる二人の笑い声と犬の声。

この家にそんなにぎやかな音があふれるなど想像もできなかった。両親が生きていた頃以来だろう。そういう温かさこそがこの家に馴染む。僕一人では静まり返ったこの家。

光を浴びる彼らの背中を一人きり暗がりから羨望を込めて眺めている。

そのうち、扉の隙間から犬だけが戻ってきた。

とぼとぼと歩く短い足。月明かりに床に化け物じみた影を作り、それが面白く思えた。オリビエの顔を見上げていったん止まるが。静かな旋律に何か納得したような神妙な顔をして、ランドンは足元の化け物の上に横たわる。

「あんなふうに、恋ができたらな」

犬は耳だけピクリとオリビエに向けた。

「僕だって、ね、アネリアとはあんなふうに仲が良かったんだ」
聞いているものはいない。

ランドンは時折尻尾を右から左にと動かすが、それがオリビエの言葉に返事をしているわけでないのはリズムで分かる。それでもオリビエは一人続けた。

「初めて、自分から好きになったんだ。その気持ちは、愛情じゃないってビクトールには言われたよ。僕は誰かを幸せにするなんてできないんだと思う。だってね、僕には音楽しかない。音楽を奏でることですべて行くんだ。それは幸せだし、不幸だ。そんな僕の人生に誰かを巻き込むなんて、だめなんだと思うよ」

くふん、とチェンバロの旋律の間に小さい犬のため息が混じった。

くすとオリビエは笑みをこぼし、月に捧げる想いを奏で続ける。

「ね、誰かが。僕を必要としてくれて、僕がその誰かを幸せにしてあげられるのなら。それは素敵なことだよね」

皆、きつと皆そうなんだと思う。

「不器用だから。僕には音楽しかないんだ」

「そんなことない」

通る声だった。

少女が、胸の前で拳を握り締めて立っていた。

「あ、なんだ、キシユ。もう戻ってきたの」

慌ててオリビエが立ち上がると、キシユは背後の扉を閉めて、オリビエに駆け寄った。

「なんだい？ズレンは？」

抱きつかれ、慌てる。

「いいの。可哀想な人」

オリビエの胸までしかない身長少女が、まるで母親のような顔を上げて見上げる。

「音楽はね、ここでなくても、侯爵家じゃなくてもできるのよ。オリビエ、教会に来てみなさいよ。きつと皆喜ぶわ」

「ありがとう。明日は天気が崩れそうだね。湿った月の匂いがする」
キシユの赤毛の額に軽いキスをして、オリビエは少女を放そうとする。

「ね、本気なの。聞いてよ。オリビエ、これからは貴族の時代じゃない。平民とか、貴族とかそういうのじゃなくなる。自由に生きられる世の中になるの。だから、オリビエだって素敵な恋ができるし、きつと誰かを幸せに出来る。それでね、オリビエも幸せになれるよ」
オリビエは笑った。

「ありがとう。僕は幸せ者だからね」

「んー、もうっ！何で真剣に聞いてくれないかな！本当にこのまま、一生犬のままにいるつもりなの！？こんなつまらない生活を続けるつもりなの？」

キシュが両手の拳でオリビエの胸に八つ当たりする。

「つまらないことはないよ。君やズレンがいてくれて、僕は楽しいよ」

「オリビエを見ているとイライラするの！だって、そんな悲しそうに笑って、楽しいって。嘘ばかりじゃない！本当の気持ち隠してるでしょ？淋しくせに、自由になりたいくせに。いい加減に私に反論してみなさいよ！犬呼ばわりされてへらへら笑って」

本気で怒っている少女が、なぜか可愛く見えてオリビエは目を細める。

口は悪いけど、いい子なんだな。

「オリビエってば！」

「じゃ、淋しい。淋しいから、慰めてくれるのか？」

逆に抱きしめる。

「！？オリビエ！」

キシュの小さな肩は予想以上に弱く、突き放そうと突っ張る手も難なく胸に押さえ込めてしまう。

赤い髪が夜露に湿り、しつとりと腕に絡む。

恥らう少女の目に、涙らしきものを見た。

6・エスファンテの青年衛兵 8

8

「オリビエ」

ズレンの声に腕を緩め、一度捕らえた柔らかな少女をオリビエはあつけなく手放した。

「あんまり怒るから。からかってみた」

「も、もうつ！」

キシユは足元で座っていたランドンを強引に抱き上げるとそのまま後ろに下がる。

「私、帰る」

ランドンが宙に浮いた足をばたばたさせるのもお構いなしで、キシユはさよならも言わずに飛び出して行った。

「ごめん、驚かせたみたいだ。ズレン、送っていけよ」

真顔の衛兵は真っ直ぐオリビエを見ていた。少しだけ背の高いズレンに見下ろされ、オリビエは目をそらした。

「キシユ一人じゃ、危ないだろう？このところ、浮浪民や山賊の噂もあるし」

「オリビエ、追いかけていいのか？」

少女が開け放したままの引き戸から、夜風が入りこんだ。それはゆるりと絹のカーテンを揺らし、ランプの炎を弱らせる。

ズレンの意図が分からず、オリビエは眉をひそめた。

「なに言ってる。僕が送っていつてどうするんだよ。ズレンが行くべきだろ」

年上の衛兵は肩をすくめ、オリビエの願いも空しくソファアにどか

つと座り込んだ。

「ズレン？」

「オリビエ、何か誤解しているよな。俺はキシュとは幼馴染だけど、それだけだ。大体、俺は年上好みなんだ。六つも年下のキシュは子どもにしか見えない。それに。お前のほうがよほど惚れ込んでるじゃないか」

「それこそ、誤解だよ！僕はあんな口の悪い娘は願い下げだよ。色気もないし、第一僕を犬扱いするんだから」

「飼われてやれば？キシュならいいご主人様になるさ」

「ズレン！」

向きになるオリビエに、ズレンは高らかに笑った。

「ほら、お前がこんなに感情的になるのは珍しいから。分かりやすいよ」

「分らないね」

「自分の気持ちがか？」

「いい加減にしろって！本気で一人で帰らせるつもりなのか？」

「俺は平気だね。大体、勝手に来るものをどうしてそこまで送らなきゃならない？俺はお前の護衛としてここにいるのに」

「！」

「心配ならお前が行け、オリビエ」

「お断りよ！」

オリビエがつかみかかろうとし、それを笑いながら受け流そうとしていたズレン。

二人は、戸口に立って真っ赤な顔で睨む少女を見た。

その腕から、ずるっと犬が滑り落ちた。

わぶ。

情けない声をだし、頭を振りながら犬は居心地のいいソファーへと

向かおうとする。

「ズレンはか弱い女性を一人きりで帰らせようとするし。オリビエは来てくれても役に立たないでしょ、私以上にか弱くて。しかも、送っていく勇気もない。本当、最低よね。二人とも」

キシュはランドンをまた後ろから抱きとめ、迷惑そうに体をよじる護衛をしっかりと抱きしめる。

「ランドンのほうがよほど頼りになるわ！じゃあね、本当に今度こそ、帰るんだから」

「送るよ！」

立ち上がるオリビエ。

「嫌よ。今迄だってそんなことしなかったくせに」

今までは、キシュが嫌がったのだ。いや、今も嫌がっていると云うかもしれないが。

「オリビエが行くなら、俺も警護につきあうかな」

「何、それ、オリビエのためなの？何か違うない？」

キシュの不満はそこだ。

「どうせオリビエだけじゃ不安なんだろ」

「ズレン、随分な言い方だな」

「それは納得だけど」

幾分複雑な面持ちのオリビエとキシュを尻目に、ズレンだけは面白そうににんまりと笑う。二十四の青年衛兵は軍人らしい迫力と余裕を見せる。

6・エスファンテの青年衛兵9

9

三人は月を見上げながら、夜の街を歩いた。

ズレンがオリビエをからかえば、キシユが拗ねたようにズレンにか
らみ、それを気にしてかオリビエは二人から離れようとする。その
間をランドンが尻尾を振りながら走り回る。

空にある月は、流れてきた雲に徐々に隠されていった。

商店街の大通りを行くと正面に街の教会がそびえる。大きくはない
が色とりどりのレンガでモザイクをつけられたそれは、今もかすか
にその片鱗を見せる。かつてそこがこの町の中心であり人々の祈り
を集めた。むき出しの黄色い地面に教会を囲むように低木が植えら
れている。小さな葉を持つヒイラギは何かから教会を守っているよ
うにも見えた。

正面の広場は丸く、その中心には小さな少女の像が立っている。そ
の脇から延びる狭い下り坂を三人は降りて行った。

オリビエにとって、キシユの住む境界は初めてだった。

オリビエが想像した街の中心街とは少し違い、二階建ての共同住宅
がぎっしりと通りに面してつながっている。共同の井戸の脇で、水
汲みの桶ががらんと空虚な音を立てた。

びく、とオリビエはその暗がりを見つめ、わふ、と護衛の声に猫が
走り去るとホッと肩を落とした。

いつの間にか、キシユが先を行きオリビエの少し後ろをズレンが歩
く。

「初めてくるよ」

オリビエが住民の声をもらす小さな二階の窓を見上げた。木のよろ
い戸の窓が、どこかで音を立てて閉められた。

自分の声が聞こえたのかと、オリビエは口元を押さえた。

「キシュ、この辺りまででいいだろう」

オリビエを背後からとどめて、ズレンが言った。

少女は振り向いて、何、皆に会う勇気がないの、と睨みつける。

背後のズレンの手に力がこもるのを感じて、オリビエは二人の顔を見比べた。

ズレンにとって久しぶりの街なのだろうか。裏切り者などと呼ばれるくらいだ。あまり、足を踏み入れたくないのだろう。オリビエは青年の手に手を重ね、どうする、と問いかけた。

「君がいけないなら、僕一人で送っていくけど」

「オリビエ。呆れる」

「え？」

「言っているだろ？俺はお前の警護のためについてきているんだ。

キシュは放っておいても自分で帰れる。いつもは、あの広場の辺りまでで分かれるんだ」

ズレンが言う、教会前の小さな広場はもう、ずっと前に通り過ぎていた。

がん、と通りに出ていた樽を押しつけて、誰かが扉を開いた。その影はよろけて地面に突っ伏す。

さすがに驚いたのかランドンがワンワンと二度吼えると「うるさいよ」とどこかの窓から女性が怒鳴る。

赤ん坊が泣きだす声。

地面の影は酔っ払いのようで、何事かを低い声でつぶやいて寝ている。

月はいつの間にか隠れ、湿った風が頬をなでていた。

暗がりにはただ、家々の窓の明かりだけが頼りなく揺れた。

オリビエは見回し、前に行くキシュの表情すら見えないことに気付いた。

「で、来るの？来ないの？」

「君は僕に、教会に来て言わなかったかな」オリビエが笑う。

「あんたに言つてない。ズレンに言ってるの。セイリア姉さんに合わせる顔が在るかっつて聞いているの」

オリビエは小さくため息をついた。

「ズレン、任せるよ。なんだか分からないけど、解決しなきゃならないんじゃないか。僕はここで」

「キシユ、セイリアの病はどうしようもなかったんだ。俺が医者にならなかったからっつてお前にそこまで言われる理由はない」

「ひどいよ！姉さんは、あんたの事待ってたのに！医者になつて、治してくれるつて」

「それはお前を氣遣つていたんだろ。最初から、俺は医者になるつもりなんかなかった。セイリアも分かってくれていた。俺たち二人のことをお前がどれだけ知っていたって言うんだ。あの時お前はまだ小さかっただろ。彼女を失つて、つらかったのは俺なんだ」
そこまで一気に怒鳴ると、ズレンは立ち止まってみていたオリビエの腕を取った。

「行こう。長居は無用だ」

「だけど」

「待つてよ！」

キシユが何か叫んだ。

と、再び先ほどの扉が開く。店内のランプの明かりに軒にかかったワイン樽の鉄輪が目に入った。酒屋の印だ。今度は開け放たれたので、酒屋らしいそこからは店内のざわめきが漏れ出した。静まり返っていた街が息を吹き返したかのようだ。寝転んでいた男がうめいて起き上がった。

「おい、生きてるか？」

誰かが扉から顔をのぞかせた。

「あー？お、キシユじゃねえか、大丈夫か」

「また夜遊びか、パーシーにどやされるぜ」

男たちが数人。

一人がゆらりとキシュに向けて手を挙げて、通りに出てきた。酔っているようだ。その後にもまた二人。背の高い男がズレンとオリビエを睨んだ。

「なんだ？貴族様か」

「違うよ、こいつ、ズレンだもの」

「はあ？あのズレンの小僧か。でかくなっただな」

オリビエを庇うように立つ青年は、腰のサーベルに手を置きながら、一歩下がった。

「おいおい、そんな顔すんなよ。別に俺たちは妖しいもんじゃねえし」

後ろの男が言う。

「にしても、ご立派になったなあ。お前がメジエールに行くことになったときはたまげたもんだ…あれ、お前」

髭の男が一人、顎に手を当てて二人をじっと見ていた。と、急に隣の男の腕を数回叩く。

「んだよ」

「おい、こいつ。司祭会の会長の、ほら」

「ラストン・ファンテルの、息子です」

オリビエが男の視線に応えた。

急に背中を小さく丸めると、男たちは口元を緩め愛想笑いを浮かべた。

「こりゃ、また。立派になられた。そうか、あのボウヤか」

「いや、お父上にはお世話になってね」

オリビエにも覚えがあった。

このエスファンテの中心街を教区とする司祭を援助する市民の集り、司祭会でオリビエの父親は会長を務めていた。ボランティアの会だ

つたが、街の弁護士や医者、思想家や教師が集っていた。母マリアの実父が司祭だったこともあり、オリビエの父ラストンは教会関係者には少しは名の知れた人物だった。

「いやあ、お元気そうだなによりです」

言いながら、皆一歩も近寄ろうとしない。

オリビエは眉をひそめ、隣に立つズレンの手を引いた。

「帰ろう」

ちらりと向こうにキシユの顔が見えたが、オリビエは目を合わせなかった。

7・疑惑、教会、オルガンの音色

1

広場まで戻ったところでズレンがオリビエに問いかけた。

「オリビエ、あいつらと何かあったのか？」

オリビエは黙ったまま、足を速める。

「あいつらは、確か、教会の下働きの連中だろ」

「…セイリア、死んだのか」

オリビエの問いに今度はズレンが黙る。

ほら、話したくないだろう。オリビエが見上げる表情はそう語る。

「そうだ。彼女とは恋人同士だった。だが、肺の病気と知っていて、彼女は俺を遠ざけた。それが彼女の想いだとわかっていたから、俺はなにも言わずにこの街を出たんだ。両親は落ちぶれた貴族でね、一族再興とか何とか、無理して俺を王立の学校に入れようとしたんだ。寄宿にかかる寮費は半端じゃないのに。結局、無理して働いて二人とも俺がエコール・ミリテール*に入学する前に亡くなった。ま、両親がいない方がメジエール**の試験には受かりやすかったから。感謝してるし、そこでの時間を無駄にするつもりもない。今はこんな田舎にいるけど。いずれ、ファリに出る。セイリアのことも、もう昔のことだ。キシュは実の姉妹じゃないんだが、セイリアのことを姉のように慕っていた」

そして、ズレンを兄のように慕っていたということか。

（*エコール・ミリテールは8歳から14歳までの士官学校 **メジエール工兵学校は二年間の専修学校で、エコール・ミリテール卒業後試験合格者のみを受け入れた）

エコール・ミリテールは王立の士官学校だ。成績の優秀なものしか入学できないし、入学すれば国王からの援助を受けられるという。

その上、卒業後にメジエール工兵学校まで進学したのであればエリートだ。フアリで出会ったマルソーやエリーも同じだろう。キシユと価値観が違うのは、もう、どうしようもないことなのかもしれない。

ズレンに「お前の番だ」と背を叩かれ、オリビエは唇をかみ締めた。歩きながら、思い出したいくないそれを記憶に並べる。

「僕の父は、あの教会の司祭会の会長をしていた。毎月、会合があるだろう？僕が十三の秋だ。ちよつと、悪さをしてね。僕は家の納戸に閉じ込められた。ふてくされる僕に、扉の向こうから母さんが話しかけた。お父さんが司祭会に出かけてしまったら、こつそり出してあげるから、と。父さんが出かけてしばらくして僕が扉の開くのを待っていると、家に誰かが訪ねてきた。母さんの気配が遠ざかった」

話してみると、たったそれだけなのだ、とオリビエは思う。随分短い物語だ。

「それで？」

ズレンが少し間をおいて問いかける。

「それだけ。それが、僕が両親の声を聞いた最後。次の朝、気付いたら僕は自分の部屋で寝ていて。僕を起こしたのが、彼ら。父さんと母さんは、馬車の転倒事故で亡くなったと。それだけだった」

肩に置かれた手に少しだけ力がこもった。

「ま、もう五年も前のことだよ。ズレンだって、僕と同じ年齢の頃に両親を亡くしているんだろ？」

「そうか。俺が丁度この街を出ている間のことなんだな」

「いいよ、結局原因とかよく分からなかったんだ。でも、事実とし

て、両親は亡くなったわけだし。僕は今、こうしている。誰かを亡くすのはつらいね、ズレン。君の気持ち、分かるよ」

青年は数回、オリビエの肩を叩いた。

「帰ったらもう少し、ワインでも飲むかい？」

「じゃあ、僕が作ったレクイエム、聞かせてやるよ。それで僕は侯爵様に見初められたんだ」

「出世作か」

「そ。最高に憂鬱な気分になる曲さ」

ふと、ズレンの歩みが止まる。

暗がりにも目を凝らして前を見据える。

オリビエもソチラを見ると、遠く見えるオリビエの家の前に人影があった。

「今日はそういう予定でもあったのか？」

ズレンは低くうなる。

「全然」

オリビエが応えると同時にズレンは人影に声をかけていた。

「誰だ！」

2

夜半から振り出した雨がかつかつと鎧戸を穿つ音が規則正しく耳に響く。

オリビエはそれを聞きながら、冷たい井戸水をグラスに満たす。二つの水音に何か音楽を思いつきかけ溢れた雫が手を濡らす。リビングからの無造作に叩く鍵盤の音に我に返る。

慌てて、滴るそれをかかえてリビングに戻った。

「男爵、楽器には、その……」触れなくてもいい。

呆れ顔のズレンに肩を押さえられていたロントーニ男爵はオリビエの姿を見るなり極上の笑みを浮かべて立ち上がる。煩そうにズレンの手を振り払って。

「オリビエ、聞かせてくれ」

「男爵、どうぞ、水です。こんなに酔って、ご家族が心配されますよ」

オリビエの差し出す水を受け取ると、こぼしそうになりながらソファに座り込んだ。いや、倒れこんだ。

「家族、なんていないさ。な、オリビエ、聞かせてくれ。お前の曲だ。何でもいいぞ」

機嫌はいいのだろう、二人の青年相手に男爵は盛んに笑みを見せた。「お前、なんていうか知らんが、こっちで一緒に聞け」

ため息を吐くズレンを隣に座らせると、男爵は楽器に向かうオリビエにじっと見入る。

「では。ズレン、聞かせてやるって言っていた、レクイエムだ」

家の前に立っていたのはホスタリア・ロントーニ、男爵だった。ズレンに誰だと問われ、男爵は胸を張ってフルネームを応えた。オリビエ・ヌ・ド・ファンテルに会いに来たと付け加えるのも忘れていない。

追いつ返すことも出来ず、ズレンが屋敷まで送ろうとしたが動くことがなかった。

従者も連れず、一人馬でここまで来たのだとロントーニ男爵は笑った。その馬は見当たらなかった。酩酊する主人にあきれて逃げ出したのかもしれない。

そのまま、家の前で寝込まれても困る。

仕方ないからオリビエは家に招き入れたのだ。

酔っ払った男は上機嫌だ。少し迷惑なのだとあてつけの意味もあつて、オリビエは自身が「最高に憂鬱な曲」と信じている、処女作のレクイエムを弾き始めた。

男爵が眉をひそめる。

ズレンも本当に憂鬱だ、と小さくつぶやいてオリビエと男爵を見比べていた。

男爵は眉間に深くしわを寄せ、口はへの子。持っていた水を口に運ぶのも忘れているようで、ズレンの心配はそこにうつる。

ぎゅっと握り締めた男爵の手は白く、もしかしてグラスが割れてしまうかもしれないと途中青年はそれをそっと取り上げた。

弾き始めるとオリビエの表情は自然と無になる。

あの教会で行われた葬儀。先ほどの男たちは、オリビエにとって死の知らせを運ぶ使者。黒い装束としわがれた声。少年だったオリビエには、最初に紡がれた言葉が、今も古傷のように胸をうずかせる。「ご両親が亡くなった」

理解も反応も出来ずにいた少年に、早口で何か説明した。何だったのかすら思い出せない。ただ、最初の一言だけが今も残っている。それからの記憶は学校で聞かされた歴史の物語のように遠く、実感のないもので、オリビエは強張りさび付いた心臓が痛む気がして、ずっと胸を押さえていた。

その手を開放できたのは楽器の前でだけだった。

それがどんな音だろうと、曲だろうとリズムだろうと。関係なかった。とにかく指が走った。胸の痛みが和らぐ気がした。あれが、オリビエが無心で作曲するようになった最初だ。

それは、自分の記憶には残らない。自分から音に乗せて感情を解き放つものだったのだ。自分の中に納めて置けないそれを吐き出した

めの曲。それを記憶する理由などなかった。
侯爵に弾いてくれと頼まれるまでは。

「レクイエム、それはご両親にあてたものか」

オリビエがいつのまにかレクイエムだけで終わらずに、弾き続けていた自分に気付いたとき、男爵が声をかけた。

見ると、男爵は涙を流していた。

7・疑惑、教会、オルガンの音色

3

「あ、あの」

ズレンはいつの間に準備したのか、温かい茶を入れてくれていた。それを受け取って、男爵は両手で抱えた。背中を丸めた男の姿がやけに小さく見え、ズレンから紅茶を受け取りながらオリビエはどうしたのかと青年に目で問いかけた。

ズレンは小さく肩をすくませ、ささやいた。

「男爵も大切な誰かを亡くしているんだろう」

オリビエが立ち上がって、ズレンと並んでソファーにうつろうとした時。

いつのまにか男爵が目の前に立っていた。

酒によっているのか音楽に酔ったのか。虚ろなくせにぎらぎらとした目でオリビエを見つめると、オリビエの手から紅茶のカップを取り上げた。

「？男爵」

間近で見ると少し伸びた髭が、男を年齢以上に見せていた。

「ズレン、お前は席を外せ」

酔っている声ではなかった。オリビエのカップをテーブルに置くと、目を丸くしている衛兵の青年にロントー二男爵は命じたのだ。

「オリビエに話があるのだ。お前は部屋を出ていなさい」

肩に回された腕に嫌な予感を覚え、オリビエはズレンにだめだと首を横に振る。

ズレンは男爵の手を引き剥がそうと、自分もカップをテーブルに置

くと立ち上がる。

「男爵さま、落ち着いてください、どうぞ、お座りください」

嫌に優しい口調でなだめるが、男爵は手にますます力を込める。

「あの、男爵、私は」

「煩い、邪魔をするな」

何の邪魔だというのか。

ズレンを突き放そうと、男爵は腕を振り払う。勢いでよろけるところを見るとやはりまだ酔っ払いなのだ。

結局オリビエがそれを支え、お前は、と繰り返す男爵を二人がかりでソファ―に座らせた。

「男爵、落ち着いてくだ……」

しがみつかれ、オリビエは困り果てる。

「あの、男爵」

「お前は、覚えているのか」

「え？」

男爵はうつむいたまま、そういった。

「お前は私を、あの時見たのか」

男爵の言葉にズレンが首をかしげる。

何のことだ、と。

オリビエは小さく首を横に振り、知らないと言図でかえした。

「男爵、あの。何のことですか」

返事はなかった。

「……寝てる」

派手にため息をついて、ズレンは男爵を今度は乱暴に引き剥がした。それでも寝込んでいる男はピクリともしない。

「迷惑だな」

「驚いたよ」

二人でシュールンさんのお手製のシルクの刺繍のカバーに包まれるように寝込んでいる男爵を眺めた。

「親しいのか？オリビエ」

「いや、侯爵様には近づくなといわれているよ。なんだか、僕の母さんに懸想していた頃もあつたらしい」

「ふん、実力はあるのにな、こういう人だとは知らなかったよ」

ズレンは顔をしかめた。

このエスファンテ市の衛兵であるズレンは、男爵について話してくれた。

ホスタリア・ロントー二男爵は、もとはファリの郊外に居城を構える貴族だった。宮廷貴族の家柄の次男坊だった彼は十数年前にこの町の隣リンスに移り住んできたという。綿織物の工場を持ち、ここ数年は外国の安い輸入品に押されつつあるが、新しい蒸気機関の機械を取り入れて事業を精力的に展開しているという。

侯爵の領地であるこのエスファンテでも、多くの市民が男爵に雇われている。それがこの地が潤う一因でもあり侯爵はロントー二男爵と親しくしているというわけだ。

「資産は莫大だと聞いている。でも、工場の勤め人は随分ひどい扱いらしい」

ズレンは最後まで蔑むような口調のまま語り終えた。

男爵は息をしているのか危ぶまれるほど静かに寝込んでいた。その表情がやけに無心で、四十過ぎには見えないほどあどけなく見えた。それがまた、気に入らないのか、ズレンはこのままここに寝かせようと言いだした。

「運ぶならお前一人でやれよ。俺はいやだ。そんなでかい図体の奴」
「でも、仮にも男爵様だよ。まずいよ」

「お前の両親の寝ていた部屋に、こいつを寝かすのか？」

「仕方ないよ。いいよ、一人でやるから」

ズレンが何をそんなに憤っているのか、オリビエには分からなかった。

男爵の今日の態度なのか、日々の行いなのか。ため息をつきつつ、オリビエは重い男の体を抱き起こそうとする。が、寝込んでいる男爵は異様に重い。

「ばか。こうやるんだよ」

見かねたズレンは男爵の腕を取り、すんなり背中に回すと背負うように持ち上げた。

「すごいな」

「戦場でね、負傷した仲間を助けなきゃならないからな。そういう訓練も受けている。俺、お前とは組みたくないな。見殺しにされそうだ」

「……悪かったな」

オリビエは両親の寝室の扉を開いた。

シューレンさんが毎日窓を開けて風を通してくれていた。もう五年以上も使われていないのに、そこは清潔に整えられていた。何もかも以前と変わりなく。ただ、両親の姿だけがないのだ。

「いや、違うな」

やはり重いのか少し苦しげにズレンがつぶやいた。

「何が」

「俺がお前より先に死ぬことはないな」

「僕が早死にだって言うのか？縁起でもないこと言うなよ」

「オリビエ、お前お人よしだから。戦争になったらすぐだぜ、すぐ」

「だから、殺すなよ」

「だから、護ってんだろ」

どさりと重荷をベッドに投げ捨てると、ズレンはそのまま座り込んだ。肩を手でもみながら寝込んだままの男爵に「貴族様はお気楽で」などと皮肉を投げかけている。

「戦争、起こるのか」

オリビエの問いに青年の動きが止まった。

「仕方ないな。男爵がいたんじゃ今日はどうせ帰れないんだ。とことん飲み明かそうぜ」

7・疑惑、教会、オルガンの音色3

4

ワインが飲みたいというズレンが地下から三本抱えて戻ってきた時にはオリビエはソファーに深く沈みこんで、大きなあくびをしていた。とつくに日付は変わっていた。そんな時間まで起きていたことはなかった。

「おいおい、まだ寝るなよ。あの男爵がいつ起きてくるか分からないんだからな」

「そんな、人を化け物みたいに言うなよ」

「いいや、あいつは絶対怪しい。不気味だろ、何するか分からないからな。お前は知らないかも知れないけど、男爵は男色家だって噂もある」

「……雇われたのが男爵でなくて良かった」

同じ仕事なら、まだアンナ夫人の方がマシに思えた。

「で、戦争だが」

ズレンはワインのコルクを何度も気持ちよさそうに鼻に近づけて息を吸う。

「ああ、いい奴だ。お前にはもったいないな」

オリビエは黙って肩をすくめる。

正直、オリビエはワインの味はよく分らない。侯爵が置かせているのだから、悪いものはないだろう。多分、ズレンが想像する以上に高価なものだ。

キシユが喜んで持って帰るパンは侯爵家で焼かれたものだし、用意されるタオルやシーツ、全てが侯爵のものだ。それを喜ばれてもオリビエには感銘はない。

「早く、聞かせて欲しいな。何が起ころうとしているのか、どうし

て僕に護衛が必要になっているのか」

ワインを一口じっくり飲んでズレンはオリビエをグラス越しに眺めた。

「なんだよ」

「議会なんだ。何かを決めるために議員は集ってる。なんだと思う」
オリビエはフアリでマルソーに聞いたことを話してみた。

「貴族や僧侶にも税金を納めさせるってことだろ」

「喜ぶはずないよな、貴族も僧侶も」

オリビエもわが身を思う。自分もその特権を与えられている。これで税金などといわれてもどうしていいのかわからない。貴族や僧侶の中には貧しいものもいるだろう。

「言い出したのは宮廷なんだけどな。今この国は借金だらけで、そのうち隣国のアウスタリアには国土を買い取られるんじゃないかって噂まであるくらいだ。だから、国王陛下は国のために貴族に我慢してもらおうと思っている。けど、納得いかない貴族と僧侶は、話し合いを放棄して議場を別にしたんだ」

「……三部会、じゃないのか」

「今は二部会と平民部会、って感じだな。平民の代表たちは皆に期待されている。早いところ決着をつけてほしいと皆願っているんだ。大体、主だった貴族や僧侶、平民代表の豪農やブルジョアたちがそれぞれの領地や仕事を放り出しているんだ。あちこちで困ったことになってる。領主が議会に出ている間に農民一揆が起こった街もあるんだ。それを聞いて慌てた地方貴族は領地に飛んで戻った」

「！あれ…それ」

「そうだ。表面上はお前のためになんて言っていたが、実際は侯爵様だって領地が心配だったと思う。例えば侯爵様が平気でも、ここで残っている俺たちエスファンテ衛兵は気が気じゃなかったからな。だから、俺たち下っ端を安心させるためにも侯爵様は戻ってくださった」

「……でも、またフアリに行かれたんだろう？」

二杯目を注ぎながらズレンはフンと息を吐き出す。

「議会の膠着に困った宮廷が、一度罷免された宰相レツフェルを呼び戻したんだ。スイスの元銀行家だからね、彼の政策には皆期待している。その彼が奔走したらしい。平民部会は自分たちで国民議会なんてものを打ちたてようとするし、放っておけなかったんだろう。それで議会が再開された。侯爵はロスレアン公に呼ばれたようだ。」

あの王弟は腹の読めない人だけど侯爵様を買っている。昔、侯爵様が軍隊にいた頃に同じ隊に所属したらしい。侯爵様も宮廷に継ぐ権力を持つロスレアン公の申し出は断れない」

オリビエは結局ロスレアン公とはまともに話せなかったと思い出した。

「今、議会は宮廷の軍隊に囲まれているそうだ。フアリ市民の傍聴も許されないらしい。議会の代表者たちは支える民衆から切り離されて孤立している。フアリの市民は街の中を軍隊が闊歩するのに閉口しているようだ」

「大丈夫かな、侯爵様」

物静かな侯爵が、議場の狭い席に座る姿を想像した。

あのと時のパレードでそうだったように、隣にはロスレアン公がいるのだろう。

「だから、今度はエスファンテ衛兵を連れて行っただ。彼らが帰ってくるまでこっちだって何とか維持しておかなきゃならない」

「維持？」

「本当に疎いな。このエスファンテは国境の町だろう？すぐ隣には山しかないとはいえ、アウスタリア領だ。アウスタリアの人間が入り込んで、少し前から街の不穏分子を利用しようとしているって噂だ。キシユの住んでいる、あの界隈。そこを拠点にしているんだ」

「……彼らを扇動して、一揆でも起こさせるって言うのか」

「そこまでは分らん。けど、首都のフアリがあんな状態で、その上この地には領主がいらない。アウスタリアだって首輪でつながれて

いるわけじゃないんだ。当然狙っているだろう。現に、南部では一揆を起こした農民をスフェン王国が支援しているという」

「……それで、どうして僕に護衛なんだ」

ズレンは砕いたチーズを口に運ぶとワインで流す。

「さあ。そこだけは分らないね。市の東部には山賊も出ているらしいし、流浪民が夜の間に作物を荒らすという話もある。それに対抗しようと農民は自警団を作っているらしい。その自警団も矛先を我らに向ければ反乱軍だ。このエスファンテだって治安がいいわけじゃない。ま、とにかく侯爵様はお前のことを気にしていた。お前の何が特別なのか、それは侯爵様にしか分からないだろ」

沈黙に耐えかねたようにズレンは三杯目をグラスに満たした。赤く揺れるそれを見ながらオリビエは目を擦った。

「眠いなら寝ろよ、俺はここにいるから」

「……ズレンは」

「ジーでいい。友達にはそう呼ばれている」

「ジーは、もし何か起こったら、人を殺したりできるのか」

「何のための衛兵だよ」

「だけど、さ」

「お前みたいに温室の中で綺麗なものばかり見ているのとは違うさ。一つ、忠告しておいてやる。優しくて、親しくしてくれる人間ほど裏切りやすい。人など、表面上は何でも繕える。気をつけるんだな」

「……僕のことを裏切って得する奴、いるのか？」

「ぶ、そりゃ、……いないかもな」

その発想が気に入ったのか面白そうにワインを飲み干す。

何も持っていないのだ。音楽しか能がない、こんな奴を大事にしてくれる侯爵。仕事とはいえ護ろうとしてくれるジー。

オリビエは音楽を残してくれた両親と神に感謝していた。

7・疑惑、教会、オルガンの音色4

5

翌朝、いつものように出勤してきたシューレンさんがあきれた声を出したのは言うまでもなかった。

オリビエもズレンも結局リビングで寝込んでいて、二人してシューレンさんに「悪戯ボウズ」扱いされた。

「男爵が昨夜訪ねてこられたんだ」

そうオリビエが言ったものの、そのときには男爵の姿はなく夢でも見たんでしようとシューレン夫人に笑われた。男爵はいつのまにか帰ったようだった。

男爵の行動に慄然としていたズレンも、シューレンさんの朝食を口にする頃には大人しくなっていた。実際彼女の食事は黙らせるほど美味しかった。その朝のオムレツにかかったソース、「これは兎の煮込みに添えると美味しいだろう」とズレンが言い出し、オリビエは鳥にかけたら美味しかったと反論した。オリビエは兎肉を好まなかった。

「オリビエのことだからな。どうせ、兎は見てくれがかわいいから食べれないんだろ？」

「ち、違う、味が苦手なんだ」

「あれは内臓が特に美味しいんだぞ、鳴かない動物でもな、絞めるときには鳴くんだったぞ」

兎の断末魔を想像してオリビエの手が止まる。

「止めるよ、食事中に。生き物の死を楽しむような言動は良くない」

「ほらやつぱり、可哀想なんだろ？優しいお坊ちゃまだよ」

「ジー！」

祖父が司祭であったこともあり、オリビエは教会の教えを幼い頃から躰けられていた。

「ダンヤさん、って言いましたね。もし、お一人でお住まいなら、こちらでオリビエ様と一緒に住まわれてはどうでしょう?」

二人を眺めていたシューレン夫人が唐突にそんな提案をした。

オリビエもズレンも顔を見合わせたが、お互い侯爵の許可が必要だと思い至ったらしく黙りこんだ。

「お二人を見て、にぎやかでいいと思ったものですから。お気になさらずに」と夫人が話を終わりにしたので、先ほどの兎と鶏のどちらが美味しいかの議論を再会した。

兎を食べるのはやはり納得がいかなかったが、オリビエはシューレン夫人の思いつきが胸に残っていた。

ただ、自分から侯爵に提案するのは気が進まなかった。

それが実現することになったのは翌朝のことだった。

何かが決められたのか分からなかったが、朝の迎えと同時にズレンの荷物が運び込まれたことでその事実を知った。

「侯爵様には許可をいただいたんだ」

そう笑うズレンに、シューレン夫人も乗り気で、夕刻二人が帰宅するまでにズレンの部屋をしつらえることを約束した。

オリビエの寝室の隣の空き部屋にすっかり柔らかいベッドが用意されている。殺風景だったそこは多少の衣服と本が入り、ランプが灯れば寝室と変わって住人を迎えた。上等な絹のカバーをかけたズレンのベッドに横になりながらオリビエは天井を眺めた。

「随分、早いね」

「丁度、フアリからの伝令が来ていたから。なんだよ、俺がいるのは嫌か?」

そういうわけではなかったが、嫌に早い決断と行動に不思議な気がしたのだ。

それとも、ズレンをそばに付けておかなければいけないほど治安が悪化しているというのだろうか。オリビエの侯爵家までの道のりは市街を通らない。寄り道もしないので最近のこのエスファンテの様子はまったく分からなかった。

子どもの頃に通った学校のある界限、町の中心部で市役所や裁判所のあるあの辺り。そういえば、フアリに同行したルグラン市長ともあれ以来会っていない。

「いや、ただ。なんていうか、不思議だ。誰かとずっと一緒にいるって感覚が。慣れてなくて」

「孤独を愛する楽土どのには、申し訳ないけどね」

「……僕だけじゃなくて、アンナ夫人の身边警護もしているんだろ？」

「もちろん。侯爵家の方々には常に従者がつき従うからね。アンナ夫人だつて一人で出かけたりはしない。孤独を愛するのはお前くらいさ」

「愛するわけじゃないさ」

アンナ夫人の行動を想像する。オリビエの正体を暴くのだのと息巻いていたけれど、その探偵ごっこはどこまで進んでいるのか。当分彼女を夢中にさせておいてくれれば煩くなくていいのかもしれない。

「なあ、ズレン。キシユ、あの日から来ないね」

実のところ、それが一番気になっていた。

あの酒場の近くで別れたきり。あの時、オリビエにとって思い出したくない人々との再会で少女のご機嫌を気にする余裕などなかった。様子からすれば、あの酒場がキシユの家なのだ。そこに、彼らも入り浸っている。

「ジーでいいって言ったろ」

「ジーは。キシユのこと、本当になんとも思っていないのか？ズレンがそうでもあの子は違うんじゃないか？」

寝転んだ頭上に手を伸ばせば、手に当たる絹がひやりと心地よい。

かすかに胸の奥にあるものを冷やしてくれるようでオリビエは背にした布団をなでる。

「それを聞いてどうするんだ」

「!……どうって」

「お前は どう思っているって聞いている」

寝転ぶ隣にズレンが座った。肩越しに見えるズレンの視線はどこか遠い。

「あ、ええと。面白い子だと思うよ。野良猫みたいだ。奔放で、自由で、生意気。僕とは正反対だな。でも、芯は優しいよね。悪戯っぽく挑発したりするけど、乗ってやらないんだ。近寄ったら引つかかれそうだしね」

「ふん。愛しているとか言われたらどうしようかと思った」

「え？まさか、それはないよ」

あれ以来、誰かを愛する資格が自分にあるのかどうか疑問が残る。僕には音楽があり、そのためにアネリアを不幸にした。キシュにも近づきすぎれば、同じことを繰り返すだろう。

それに、彼女は目の前の精悍な衛兵に恋をしている。多分。

「じゃあ、別にいいな。キシュには二度とここに来るなと言ってある」

「え？」

6

オリビエは慌てて起き上がった。

目の前に立つ青年衛兵は腰につけた銃をそっとテーブルに置いたところだった。

「なんだ？今、なんて？」

キシュになにを？

「オリビエ、シューレン夫人と話をした結果だ。俺も反対だから。」

お前がキシュと親しくするのは。少なくとも、今のこの時期は良くない」

横顔は真剣だ。

「どういう、ことだよ。シューレン夫人の言っている噂とか、それ、本気にしているわけじゃないんだろ？キシュの家が革命家たちの集会場になっているとか、そんな」

「シューレン夫人から聞いたわけじゃないさ。俺は、仕事上事実として知っていたんだ。だから、先日もお前を護衛して行っただろう？」

会えなく、なるのか？

キシュとは確かに生活は違う。けれど、少女の歌声や自由な感覚がオリビエには眩しかった。見たことのない景色を思わせてくれるような、空色の瞳。悪戯っぽく胸元を強調してみせる。向きになったり、オリビエを犬呼ばわりして自由な自分をひけらかしたりする、そんな子どもっぽいところも。

すべて、楽しかった。

幼い頃、母に黙ってベッドにお菓子を持ち込んで、布団にもぐりこんで食べたときのような。お父さんが大事にしている楽譜をそつと盗み読むときのような。それを弾いてみたくて、布団の中で指をたたき覚えたあの時。

秘密で覚えたそれを父親の前で弾いて見せたときの、驚いた顔。呆れながら、それでもえらいぞと褒めてくれた父さん。

そんな、しばらく忘れていたものを思い出させてくれた。

紅色のコートが、よく似合う。艶やかな頬。

「お前には悪いけど、ま、我慢してくれ」

「……キシユには、歌って欲しいんだ。わかるだろ？困るよ」

「お前の気持ちも分かる、魅力的な娘に育った」

「そういうのじゃない。別に、そういうわけじゃないけど！」

「侯爵様に知られたら、まずいだろう？」

「！」

「アネリアの件が、やっと収まったところじゃないか」

ズレンは穏やかに笑っていた。

アネリアのあの事件も、何もかも知っているのだろう。

侯爵様に知られれば、当然キシユとは引き離される。だから、キシユとは友達でいたいのだ。それ以上は望めない。

「キシユは、ただの友達だ」

「だろ？だったらいいじゃないか」

「だけど！！」

「オリビエ！」

部屋を飛び出しかけたオリビエを、しっかり捕まえてズレンは再び部屋の奥へと引っ張っていく。

抵抗してもみ合ったものの、現役の衛兵には叶わない。

「落ち着けよ。いいか、お前には何も知らせずにいると、侯爵様から命じられている。それほどあの人はお前のことを心配しているんだ。それでもこの間街の情勢は話しただろう？キシユの家のことも話さなきゃお前が納得しないと思ったからだ。これはすべてお前のことを思っていることだ。俺たちのことを信じる！お前のためなんだ」

睨みつけオリビエは腕を振り払った。

再びベッドに座らされた目の前に立つズレンに、立ち上がろうとしてもすぐに肩を押され座り込む。数回、そんな応酬の後、オリビエはズレンの胸倉をつかんだ。

「結局は侯爵の命令が一番なんだな。一緒に夕食を食べて音楽を奏

でた、あれのどこが悪いんだ?!それとも、ズレンもシューレンさんと同じことを言うのか?侯爵に雇われているから侯爵は絶対で、だから、僕が何をどう感じようと関係ないって言うのか?毎晩楽しかったあれも、全部侯爵の命令だからなのか?」

数瞬、間があった。

ズレンだって楽しかったはずだ。三人で囲む食卓はにぎやかで、いつも誰か笑っていた。

あれを曖昧な理由で止めなければならぬのは納得が出来ない。

友達と語らう、音楽を楽しむ。そのどこが悪いと言うのか。

ただ侯爵への使命感だけなら、そんなもの捨てて欲しい。

「当然だろう」

荒く突き飛ばされた。

ベッドに座り込み、オリビエはズレンを睨みつける。

「俺は金で雇われて侯爵に仕えている。そのためにお前のそばにいるし、キシュとお前を二人きりにさせないために毎晩夕食に付き合ってたまでだ。オリビエ坊ちゃまはなんだと思っただんだ?」

若い衛兵は鋭い視線を崩さずにオリビエの前に立ちふさがるように仁王立ちしている。真っ直ぐな視線。オリビエは睨みきれずに数回瞬きをした。

「この時代に。忠誠だの、友情だの。おかしくてね。俺の両親は貧しい中、ロントー二男爵の工場で働き、体を壊して死んだ。親のいない俺が学校でどれほど苦労してきたか。卒業しても結局は家柄で待遇が違っただ。でなきゃ、こんな田舎の衛兵などで甘んじてないさ。生きていくために皆、必死に働き、意に沿わないことも苦い思いも飲み込んでいる。同じような境遇のくせに、少しばかり音楽の才能があるからと何の不自由もなく生活するお前に何が分かる。

こんな綺麗な世界で、温室の薔薇のように育てられ、自由がないとばかりバカにどんな友情を感じるというのだ?金のためにここにいてる。当然だろう!それでもよくシューレン夫人は我慢して世話して

いると思うよ。なあ、オリビエ様。もともとここに滞在する件は、キシユの存在を知った日からフアリに手紙を送ってあった。侯爵の許可が下りたのが昨日。貴方は何も知らず、ただ勤めである音楽を奏でていればいい」

優しく親切にしてくれる人ほど、信用できないのだと。

ズレンは忠告した。

オリビエは唇をかむ。

「貴方の幼い恋愛になど、興味はありません。私は任務を遂行するだけです」

出会った当初と同じ。固い口調のズレンは表情のない顔で言い放つとオリビエの手を引いて起き上がらせた。

「さ、夕食にしましょう」

その夜。リビングにはいつまでも切なげなチェンバロの音が響いていた。

7・疑惑、教会、オルガンの音色5

7

朝も夜も。ズレンはエスファンテ衛兵としての態度を崩さなくなつた。

シューレン夫人はやけにご機嫌な様子だ。

二人はキシユのことで何かしら共謀しているように思えた。オリビエの知らないところでさまざまに物事が動いている。

新聞を頼んだのに、ビクトールは一向に届けてくれないし、アンナ夫人も最近は顔を見せない。一人、音楽堂でチェンバロに向かいながらガラス窓の外を眺める。かこの鳥、まさに。

音楽のために何もかもを犠牲に出来る。マルソーはそれをオリビエだけの思想だといった。胸を張って誇りを持てといった。

頼まれている曲作りは空しさが積もり一向に進まず。それなのに晴れない気分を音にする指はこれまで以上に鍵盤を軽やかに走った。

誰も聞くものない曲。ただ空しい気持ちはこの鳥かこの空気に織り交ぜ、小さな気流が風を起こすがいずれまた、雨粒のように自分に戻る。

考えてみれば、キシユと出会う前と何も変わらない。なのに何がそれほど、空しいのか。

友人になれたと思ったズレンが、実のところ自分をどう思っていたのかを知ったからか。

キシユに対するほのかな想いは、認めないわけにはいかないほど最近心は蝕むが。それをどうする手段もない。

口の悪い野良猫は。気まぐれに擦り寄っては可愛らしい声で鳴いた。

色にするなら白地に茶のぶち、それも愛くるしく目の周りを縁取る
それか。

青い空色の大きな瞳。餌をもらうときには従順に、嬉しそうに喉を
鳴らす。

ふと少女の唇や頬。食事を頬張るその姿を思い描き、小さく頭を振
った。

今奏でた曲にどんな欲望が表れていたのかと思うと観客のいない静
まり返ったこの場所に安堵すら覚えた。

そういえば、男爵の姿も見えていない。

あれから、どうしているのだろう。

思えば、関わる人の日常など何も知らずに生きている。

何もかもが希薄だ。人にも世の中にも関わるもの全てに対して僕は、
いつもガラスの向こうから眺めている。眺めるだけでその痛みも温
かさも想像逞しくしているに過ぎない。

温室の中の薔薇。ズレンの言葉がよみがえる。

夕刻。いつものように侯爵家の通用門で、門番に呼び止められる。

黙ってそっと抜け出せたら、もしかしてズレンに見つからず、キシ
ュが家の前で待っていてくれるかのような都合のよい期待を込めて、
そつとメイドたちに紛れて通り抜けようとするのだが。

門番の男はしっかりとオリビエを覚えていて、毎回必ず呼び止め、
一人がズレンを呼びにいき、一人がずっとそばについている。

「オリビエ様、あの、少々お待ちを」

その日は違った。

なぜか門番も一人しかいない。その男もズレンを呼びに行くわけ
もなく、何かを待っている様子だ。

「何かあったんですか」

「いや、ここは大丈夫だと思うのですがね。市役所に数十名の市民が押し寄せたらしくて、衛兵の皆様は出払っていらっしやるんですよ」

「市民が？何のために？」

「このところ、滞り気味だった税金を納めるようにと、市長がね、通達を出したんですよ。それで、もめているんです。侯爵様の定めた期限はまだ先だとか、まあ、よく分かりませんがとにかく市民が怒って詰め掛けて抗議していると。最近は何騒なんぞで、市民も自衛手段を講じようとしていましたね、自警団を作り始めたみたいですよ」

以前、ズレンが話していた。農民が自警団を作るように、市街の人々も自衛のために徒党を組むようになったのだらう。大勢が押しかければ、多少の無理難題は通ってしまうのかもしれない。ルグラン市長は大丈夫だらうか。

「ふうん。じゃあ、ズレンもそちらに？」

「はい、今この町は一個中隊だけですから、人手がね」

「じゃあ、僕はひとりで帰るよ。大丈夫だよ、これまでだって一人で帰っていただらう？」

「しかし、オリビエ様！馬車を呼びますよ、オリビエ様！」

大丈夫、と声をかけながら、オリビエは久しぶりに一人きりの帰途についた。

初夏の夕暮れ。まだ陽は高いが、空の青には淡い黄が混じる。流れる雲がそろそろ夕焼けに染まろうとじっと待ち受けているかのようだ。

道端の雑草に夏の青い花を見つけ、そっと手に取る。

ふと目の前をツバメが横切り。

春先に音楽堂のストーブの煙突に戻った鳥が、小さな雛を抱えた。それを告げると、巣を戻してくれたモスが嬉しそうに笑った。結局、

大変な作業をさせてしまったが、彼も楽しそうだった。

その話をキシュにすると、あきれたように暇な貴族様呼ばわりだ。それでも雛が可愛いんだと曲にすると、嬉しそうに歌ってくれた。

そう、風に乗るこんな声で。

「オリビエ！」

家の前に。

赤毛の少女が、白いブラウスに草色のドレス姿で立っていた。

名を呼んだ声とは裏腹に、そこに立ったまま、じっと立ったまま動こうとしない。

駆け寄るほど懐いているわけでもない。少女の性格を思い出し、オリビエも走り出しかけた自分を抑える。

ただ、その顔に浮かぶ笑みだけは隠しようもない。

「久しぶりだね！よく来てくれたね」

「オリビエに来るなって言われたわけじゃないから。パンも欲しい」

「あ、そうだね、ちょっと待っていて。パンを取ってくるよ」

「何？入れてくれないの？歌はいいの？」

不満そうな少女はオリビエの袖をつかむ。

そんな小さなことにすら胸躍るのは、会えなかった時間が何かを育てたのだ。春を待つ雛のように。

「今、ズレンもここに住んでいるんだよ。だから、彼が帰ってくるتماضيから。君の言っていた教会に行こう。パンは必要だろ？持ってくるから」

ズレンの名を出すと少女に何を巻き起こすのか心のどこかに不安はある。だからこそキシュの笑みがこれほどまでに美しいと予想できていなかった。

パンのせいかな、オリビエが教会に行こうと提案したからか。

「うん、会いたかった」

その一言に。可愛らしい笑顔に。思わず抱き寄せてしまう。

少女が少しばかり涙目になっても。抱きしめたい。

「オリビ、エ…」

「僕も、会いたかった」

手に触れる少女の服のさわとした感触、その下の柔らかな肌。それがどれほど柔らかく、弾力を持ちみずみずしいのか。確かめたくて力がこもる。

さらにその息遣いを耳元に感じたい。

唇を離れたとたん。

「はちん、と目の前に何かが弾けてオリビエは我に返る。」

「もう！何するの！ばか！」

「あ、ごめん」

慌てて抱き寄せる腕を緩めても。少女は消えてしまわなかった。

「ごめん、いきなりだった」

「謝るくらいならしないの！もう、つまんない」

「え？」

「奪うのが好きって言ったでしょ？奪われるのは嫌い。自由も何も」そう唇を指差して睨みつける。その上目遣いがまたどうしようもない。

ん、そうだねといいつつも抱きしめてしまつのは神も許してくれるだろう。

少女がズレンをどう思っているのかとか、オリビエに対して何を抱いているのかとか。そんなことを気にしている必要もないくらい、

パンを抱えた少女の笑みがオリビエの胸を躍らせた。

8

「うん、いい香り」パンのことだ。

「お腹すいているのかい？」オリビエが目細めると、キシュは頬を赤くしてぷんと横を向く。不機嫌な野良猫の赤毛の尻尾はふらりと揺れた。

「分かってるくせに。お腹いっぱい美味しいものを食べられるのは、金持ちだけだよ」

「あ、そうか、ごめん」

「そうやって謝る、意味がわかんない」

「そういえば、ランドンは？今日は護衛がいないんだね」

「オリビエだってズレンがいないじゃない。護衛がいたら二人きりにはなれないんだから。あれでいて、ランドンは嫉妬深いの。あたしが誰かと抱き合っていると吼えるんだよ」

オリビエがふと足を止める。

二歩先に行く少女は振り向きながら、「何してんの？」と笑い、そのままくるりと一回転して前を向く。

「あの。二人きりになりたいの？」

「なりたくないの？」

う、と言葉につまる。

「教会はこの時間、人がいないよ。ちょうどいいでしょ？ズレンがいると腹が立つし」

「キシュは、ズレンのこと、……怒っているのかい？」

好きなのかと聞き損ね、先ほどうっかり抱きしめてキスした勇敢なオリビエは影を潜める。

「……もういいんだ。セイリア姉さんは優しい人だったから。きつとズレンの言う通りだってわかってる。分かってるけど。ただ、ズ

レンを待っている姉さんが淋しそうで。恋愛がそういうもんならあたしにはなくていい、とまで思った」

「そうか」それでどこか斜に構えている？

「セイリア姉さんが亡くなる時だって、あいつ顔も見せなかった。それでも愛してたって言うの、ずるいよ。あたしには二人のことはわかんないけど、姉さんが最後までズレンのこと心配してたのは知ってるんだから」

キシユが珍しくうつむいた。

「パンがぬれるよ」

オリビエは少女が抱える袋を受け取る。そのまま小さな背を抱いてやる。

キシユは首をかしげて柔らかな赤毛を青年に預けた。

「目の前で見送るのも、見送ることが出来なかったのも。きっと両方つらいんだよ。僕も見送れなかったから。彼の気持ち、少し分かるな」

「あんたが？」

「後悔してる。してもしかたないのに。そばにいれば、死ななかったかもしれないなんて傲慢なことさえ考える。運命に逆らえるはずもないのに」

「……オリビエは優しいんだね。ときどき、腹が立つよ」

言葉とは裏腹に、キシユの小さな手はオリビエの服にしっかりとしがみついていた。少しぬれた睫が、伏せた瞳を彩る。

「……キスしていいかな」

「だめ」

町の教会。それは先日キシユを送っていったときに途中にあった小さなものだった。エスファンテ市は三つほどの教区に分かれている。真ん中が市の中心でオリビエが通った学校に隣接していた。その東に位置するのがこの小さな教会。歴史は古く、薔薇窓のステンドグ

ラスは精緻な模様を描かれ静かな礼拝堂内を照らす。

ロマネスクの時代のものだろう。弧を描くシンプルなアーチが天井を支え、同じ形の縦に長い窓が二つずつ並び壁を彩る。

補強のために渡された木の柱組みもまた美しく、同色のベンチとともに正面の聖像を護っている。

五十人ほど入れる小さな礼拝堂の左隅に、オルガンが備え付けられていた。小型だが立派なパイプオルガンだ。

「いいね」

「素敵でしょ？あたし、お祈りとか神父様のお説教とか、好きじゃないんだけど。ここの場所は好きなんだ。オリビエの曲がここに響いたら、ね、きっと神様もビックリするよ」

「ん、そうだね。そしたら、お許しくださるかな」

人気のないそこでオリビエは再び少女を抱きしめる。

「見かけによらず、大胆ね、オリビエちゃんは。どうしちゃったの？飼犬でも盛りの季節？」

「飼犬でも。野良猫を見たら追いかけたくなるんだろ」

「追いかけて捕まえて。それで。どうするの」

最後まで言わせない。

冗談めかした生意気な口も、その華奢な肩も。わざと挑発する胸元も。全てに触れたくてオリビエは捕らえた猫を裸にする。

野良猫でなくす為に首に印を。乳房にも。

飼犬の首輪を外すようにキシユもオリビエの服を剥がしていった。

これほど。

何を尽くしても言い表せない。

これまでの幸せ全てを比較してしまいそうになるほどその時間は愛しい。

余韻はオリビエの音になり。曲になる。

歓喜を叫ぶ雄雄しい曲に。

キシュはそれを歌い。

キシュの歌をまたオリビエが奏でる。

音は人を呼び寄せた。

若い二人の悪戯を教会の司祭が黙って聞き入る。

お祈りにと訪れた親子は響く音色に立ち尽くして。その後からのぞきに來た人々の行く先を塞ぐ。そして彼らもまた足を止めた。

凜々しく響くその曲は彼らの内なる何かを呼び覚ます。

演奏が途切れた瞬間、覚醒した何かを拍手にして人々は吐き出した。

気付いてまだ乱れている胸元をキシュが慌てて整えた。

オリビエは立ち上がり、まず司祭に頭を下げた。

「すみません、オルガンをお借りしてしまいましたし、その……」

キシュの方を振り返る。教会で女性が歌うのは禁忌とされている。その上別の理由でこの場所を借りたのだ、胸を強く打つ動揺でオリビエは何を言おうか言葉を探す。

司祭は黒い長い衣装を引きずるようにベンチの脇を抜け、オリビエの前に立ってその手を取った。

「あなたは…、侯爵様の楽士様」

「オリビエ・ファンテルです」

「いや。素晴らしい、感動しました。キシュは、この子は男の子のようなもの、神もお許しくださるでしょう」

司祭が目を向ける頃には、衆人は三人を囲い、口々に感想を漏らしていた。

「もっと聞きたい」小さい子どもが真っ直ぐオリビエに目を向けた。

「じゃあ、聖歌を。お祈りの時間だから」

穏やかに笑う青年に、小さなレディは両手を顔の前であわせ嬉しげに笑った。

7・疑惑、教会、オルガンの音色6

9

その日。その界限に住む全てが小さな礼拝堂に集ったのではないかと思えるほど。古びた教会は賑わった。

久しぶりに侯爵家の礼拝堂以外で祈りを捧げ、隣に座るキシユと目を合わせては微笑むオリビエは周囲の皆の目を釘点けにしていることにも気付かずに深い充足感を満喫していた。

こういう場所で、奏でること。誰かが喜んでくれること。自分の音楽が、誰かを幸せにする。

ミサが終わった後、司祭に請われてオリビエは数曲を奏でた。それはどれも、いつか侯爵家の茶会で披露したものだったが、人々は嬉しそくに聞き入っていた。

老婆が涙を流し、その隣の孫が不思議そうにそれをなだめる。

薄暗いランプの明かりの中、聖母の像も優しく見えた。

夜もふけた頃。

オリビエはキシユと一緒に司祭にもてなされ夕食をご馳走になっていた。その内容は質素なもの、穏やかな司祭の話聞き、キシユが珍しく借りてきた猫のようにお行儀良くしているのがまた新鮮で楽しかった。

さすがに、ズレンが心配するだろうかとかすかに不安を覚え、帰ることにしたオリビエにキシユは口を尖らせた。

「ねえ、家に来て」

それは甘い誘惑だった。

ふと酒場の様子とあの男たちを思い出す。

「それは……」

「あの曲。すごく素敵だった。これまでのオリビエとちょっと違ったよ。なんていうか、勇敢な感じ」

少女の語るのは情事の後の。今思い出せば少し気恥ずかしい曲でもある。

「キシユにあげるよ」そう言ったのも羞恥心から。

「ほんと？嬉しいよ！ちゃんと覚えているの。ね、今度楽譜にしてね。引けるようにオルガンで練習するから」

「ああ、分かった」

ここ最近の空しい仕事が、一気に熱を帯びる。

気付けば少女の歩みに沿って、あの酒場近くにいる。ちくりと警戒心が芽生える、そのとき。

「これは、楽土殿」

見たことのある、ここにいるはずのない。

「あら、男爵さま、いらっしやいませ。今日は飲みすぎちゃだめですからね」

何故にキシユが親しげに？

どうにも言葉を作り出せないオリビエに、ロントー二男爵はいつでもどおり肩に手を回す。

「珍しいね、こんなところで出会うとは。キシユ、ちょっと用事があるんだ。彼はいただくよ」

「え？だめよ、父さんに約束したんだから、オリビエを連れて行くって」

「彼と話をするのはこの間からの約束なんだよ。悪いねキシユ」
いや、待て。

オリビエは意味を飲み込み、改めて男爵の手を解こうと。

「あの、男爵、僕は」

「さ、行こうか。聞きたいことがあるんだよ」

強引に引きずる男爵が、なぜこんなところにいるのか、キシユの家

は革命家の集う噂の酒場。オリビエの想像はあのファリの【エスカ
ル】と同じ。確かにあそこにも貴族らしき人もいた。だがあれば、
あの場所は。王弟であるロスレアン公の屋敷内でもあるわけだから
おかしくもないといえるのだが。ここはエスファンテ衛兵のズレン
が警戒するような下町の酒場。
ぐるぐると思い巡らせ、これはどうしたことかと思う。

男爵は。革命家と、仲間？

第八話「葦のようにまっすぐ」へ続く

…ここまで読んでくださって、ありがとうございます！

この作品、実はブログで先行連載しておりまして、そちらは随分進
んでいます…（＾＾；）

折角、こちらのサイトでの読者さんがいらっしゃるから、こちらで
も連載をと思ったのですが、何しろ長い作品ですし、コピペだけで
も大変…

同時に「蒼い星」も連載しているので…（蒼い星シリーズは、この
「小説家になろう」だけの公開なので、頑張っ続けています）
ということ。

お叱りを覚悟の上、このサイトでの連載はここまでにさせていただきます
きます（＞＜）
ごめんなさい。

ブログ「聞いて聞いて、聞いて」の方で連載しておりますし、多分、
あちらの方が読みやすいと思います。

あとがきにリンクを貼っておきますので…続きをブログで読んでく

ださると、嬉しいです
わがまま言っすみません！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0844f/>

音の向こうの空

2010年10月19日14時47分発行